

和姚給事寓直之作

清論滿朝陽。高才拜夕郎。還從避馬路。來接珥貂行。寵就黃扉日。威廻白簡霜。栢臺遷鳥茂。蘭署得人芳。禁靜鐘初徹。更疎漏更長。曉河低武庫。流火度文昌。寓直光輝重。乘秋藻翰揚。暗投空欲報。下調不成章。

清論朝陽に滿つ、高才夕郎に拜す、還る避馬の路に從る、來て珥貂の行に接す、寵は黃扉の日に就き、威は白簡の霜に廻らす、栢臺鳥を遷して茂り、蘭署人を得て芳し、禁靜かにして鐘初めて徹し、更疎にして漏更に長し、曉河武庫に低れ、流火文昌を渡る、寓直光輝重く、秋に乗じて藻翰揚る、暗投空しく報せんと欲す、下調章を成さず、

【句釋】和は前の如し。姚は姓。給事は官名、左右に侍奉し省事を分判するを掌どる、秦漢共に給事黃門あり、唐、侍中侍郎と改む、門下省に屬す。寓直之作、姚が門下省に寓直して作る詩に和したるもの。清論、道の立つた論を爲すの士なり、滿朝陽、朝廷に滿つと見るべし、日の揚るは盛世を意味す。高才は姚を言ふ。拜夕郎、漢制に給事黃門の職は日暮青瑣門に入對して拜するを名けて夕郎と曰ふ。還從避馬路、後漢の桓典、侍御史と爲る、宦官之を畏る、典常に驄馬に乗る、京師之が

爲めに語して曰く行行且止、驄馬御史を避けん、給事中は正五品上なれども勢力知るべし。來接珥貂行、珥は耳に飾る珠なり、貂は「テン」と云ふ獸なり、侍中の冠は貂を以て飾りと爲す、貂は内勁悍にして外溫潤なり、左散騎と侍中は左貂にし、右散騎と中書令とは右貂にす、貂の尾を以て製すと知るべし、共に姚が職分を言ふ。寵は恩寵なり。就は接近なり。黃扉は黃門を言ふ、給事中が一躍すれば正四品上の黃門侍郎なり。日は天子に譬へるなり。威廻百簡霜、御史の職、風霜の任と爲す、彈劾の文を白簡に寫す、南史に、沈約中丞が彈文を作る、皆曰く、白簡を奉じて以聞すと、姚の前官、御史たればなり、霜臺、肅政臺、憲臺は皆御史臺の稱とす。栢臺も亦御史臺の稱とす、臺前に多く栢樹を植うるを以てなり。遷鳥茂、姚が官署を榮遷するに譬ふ、栢なるが故に茂と云ふ、姚が盛なるを言ふ。蘭署は漢の御史中丞兼て蘭臺祕書を典る故に蘭署と名く。得人芳、給事が前官の時を言ふ、蘭署なるが故に芳なり、蘭を多く植うるにはあらず。禁靜、禁署が靜肅なり。鐘初徹、鐘聲が透徹する。更疎、更は夜なり疎は「マバラ」漏疎とすべきを語を倒して用ふ。漏更長、時計が疎なるは夜長き證據なり、漏疎更更長の意を逆用す、更二字なるも夜と「サラニ」と動詞と名詞との異なるに依つて妨げざるか、宿直の景を言ふ。曉河低武庫、武庫は兵器を藏する所、未央宮前に在る、庫に當つて銀河の低るを見る。流火は「毛詩」に七月流火とあり、秋の氣を言ふ。度文昌、尙書省の事を文昌臺と謂ふ、武庫と文昌と偶對を取り、兼て實對と爲る。寓直光輝重、宿直

は光榮ある役と爲したるものならん。乗秋藻翰揚、秋の爽氣に乗じて詩賦の成るを嘆ずるなり。暗投は鄒陽が書に、明月之珠、夜光之璧、以暗投三人於道路、莫下不按劍相眄者上と、宋が自身の事を言ふ。空欲報、姚が詩に酬報せんと欲するなり。下調、宋が劣才を言ふ。不成章、詩經に雖則七襄、不成報章、

【評論】此の篇、十六句八十字、前半四十字は姚が高才を嘆稱し、後半四十字は姚が寓直の事を叙し、以て吾が和に歸宿す、章法分明とす。

早發始興江口至虛氏村作

候曉踰閩嶂。乘春望越臺。宿雲鵬際落。殘月蚌中開。薜荔搖青氣。桃榔翳碧苔。桂香多露裊。石響細泉回。抱葉玄猿嘯。銜花翡翠來。南中雖可悅。北思日悠哉。鬢髮俄成素。丹心已作灰。何當首歸路。行剪放園萊。

曉を候つて閩嶂を踰え、春に乗じて越臺を望む、宿雲鵬際に落ち、殘月蚌中に開く、薜荔青氣を搖かし、桃榔碧苔を翳ふ、桂香うして多露裊し、石響きて細泉回る、葉を抱きて玄猿嘯き、花を銜んで翡翠來る、南中悦ぶべしと雖も、北思日に悠なる哉、鬢髮俄かに素と成り、丹心已に灰と作る、何か當に歸路

に首ひ、行いて故園の萊を剪るべき、

【句釋】早發、早晨に發す。始興江口は、廣東省韶州府曲江縣是れなり。至虛子村作、謫官の時此に來りて作りしもの。候曉、候は待なり。踰閩嶂、廣東福建の二省は古の閩越の地なり、閩山を超えて向ふ。乘春望越臺、詩に依つて之を案すれば、韶州府より武水を度り、以て廣州府に下りしものなり、番禺城内に越秀山あり聳ゆること二十餘丈、上に越王臺あり、游人覽勝の地と爲す。宿雲鵬際落「莊子」に鵬之翼若垂天之雲、將徙南溟とあり、今宿雲が大鵬の飛ぶが如く天際に落つるを言ふ、今の香港海灣なり。殘月蚌中開、蚌中は即ち海中なり、「龜策傳」に明月之珠、出於江海、藏於蚌中と、月望の時は蚌蛤實し、月晦の時は蚌蛤虛し、蚌蛤は「ハマグリ」なり、殘月は猶海中に在るなり。薜荔は種種の説がある、「楚辭注」には無根緣物而生、何物にや分明ならず、蔣一葵の説に、木蔓に生ずるもの之を薜荔と曰ひ、石に生ずるを之を石鱗と曰ひ、地に在るを之を地錦と曰ひ、叢木を繞るを之を長春藤と曰ふ、姑く之に従ふ。搖青氣、風の吹くに據つて薜荔が動揺する形容なり。桃榔は廣東南海の名木、枝葉を生せず、樹頂に少しく葉を生ずるのみ、其の樹、枿欄に似て其の質堅硬なり。翳碧苔、樹多きが故に碧苔を翳ふに至る。桂香、桂樹も亦多し。多露、衰は衣に塗る香を言ふ、露が花を塗む、故に衰と言ふ、桂花四時發く處ありと云ふ。石響細泉回、石の響くは細泉の回するが爲めなり。抱葉玄猿嘯、玄は黒なり、黒猿が樹葉を抱きて以て叫び嘯

く。銜花翡翠來、此の翡翠と云ふ鳥は南海の暖地に産す、翡翠は赤鳥、翠は青鳥なり、其の羽を以て婦人の飾具とす。南中雖可悦、珍樹珍禽多く目を悦ばしむるものは多し、而かも精神の悦びにはあらず。北思、都を慕ふの思なり。日悠哉、日思はざるは無し、悠なる哉、如何ともする能はず。鬢髪は黒髪なり。俄成素、俄然黒髪が白髪と成る、憂に縁る故なり。丹心は國を憂ふる丹心と見るより、希望の代名詞と見る方作者には適するなり。已作灰、眞に憂國の丹心なぞある人物にあらず蓋し希望は有りしならんが、今は早や死灰と成つて再燃せずとなり。何當首歸路、首は向なり、宋は汾州即ち陝西省の人なり、行剪故園萊、故園の萊即ち草を剪らん念願なりしも、憐むべし、竟に死を賜はるに至る、使者に請うて妻子に訣別し飲食洗沐して死に就くと。

【評論】此の篇、十六句八十字、候曉より以下、翡翠來に至る十句は、閩中の景を叙し、南中より以下の六句は、我が情懷を叙す、意境共に明白なり。胡元瑞曰く、宿雲鵬際落、殘月蚌中開、奇絶の語なりと。謝茂秦曰く、鬢髮俄成素、丹心已作灰、子美白髮千莖雪、丹心一寸灰、相類子美優と。子美優ると雖も、先驅の功は宋にあることを知らざるべからず。鐘惺は曰く、下筆宛轉不滯。又曰く、玩其點景、清新古絶、詩之俊品也と。

同錢楊將軍兼原州都督御史中丞

蘇頌

右地接龜沙。中朝任虎牙。然明方改俗。去病不爲家。將禮登壇盛。軍容出塞華。朔風搖漢鼓。邊月思胡笳。旗合無邀正。冠危有觸邪。當看勞旋日。及此御溝花。

右地龜沙に接し、中朝虎牙に任ず、然明方に俗を改め、去病家を爲さず、將禮壇に登りて盛んに、軍容塞を出でて華やかなり、朔風に漢鼓を搖かし、邊月胡笳を思ふ、旗合して正を邀ふること無し、冠危うして邪に觸るゝこと有り、當に看るべし勞旋の日、此の御溝の花に及ばん、

蘇頌傳、新唐書二百二十五。

【略傳】蘇頌、字は廷碩、雍州武功の人、壞が長子なり、父壞は太子少傅と爲りて卒す、頌は弱冠敏悟、一覽して千言輒ち覆誦するに至る、進士に第し、武后の時、賢良方正に擧げらる、馬載曰く、古、一日千里と稱す、蘇生是れなり、監察御史、中書舍人、王部侍郎、許國公と爲りて卒す、吐蕃征服に就いて意見を呈し、尤も重んぜらる、且性廉儉、奉稟悉く散じて諸弟親族に與へ、儲へ長貲無しと云ふ、集三十卷あり。

【句釋】同は朝廷の羣官と同じくなり。他人と同じくにはあらず、錢は送なり。楊將軍は未だ檢せず。兼原州都督、原州府の都督府は貞觀五年に置く所、甘肅省平涼府鎮原縣是れなり。都督は總監

なり。御史臺の長官は大夫と云ふ、從三品なり、次官を中丞と云ふ、正五品上なり、邦國の刑憲典章を持し、以て朝廷を肅正することを掌どる。右地は隴右道なり、即ち甘肅省の西端なり、霍去病が匈奴を右地に撃つと漢書に在り。接は接近なり。龜沙、奇沙とも書す、今詳悉ならざるも、土魯蕃の境ならんと李兆洛の説なり。中朝は中華朝廷なり。任虎牙、虎牙將軍は漢代の稱號なり、今借りて以て楊に用ふ。然明は後漢の張奐の字なり、桓靈二帝の間に三び邊將と爲る、身を正し、己を潔にし、威化大に行はる、復、武威の太守に拜せらる、其俗、迷信に墮する者多し、三月五月、子を産めば、悉く之を殺す、張奐示すに義方を以てし、嚴に賞罰を加ふ。風俗、遂に改まる、百姓爲めに祠を立つ、野蠻人の風俗が文明に化したるなり。去病不爲家、漢の武帝が霍去病の爲め第を治す、去病謝して曰く、匈奴未だ滅せず、何ぞ家を以て爲ん。將禮、大將に任ずる親任の禮式なり。登壇盛、漢の高祖は韓信を大將と爲すに特に壇を築き以て禮を具したる事を言ふ。軍容は軍の容表を言ふ。出塞華、塞内は中土なり、塞外は邊土なり、邊土に向つて中國の威容を堂堂と示すなり。朔風、朔漠の風に、搖漢鼓、漢朝の大鼓を鳴搖せしむ。邊月、邊地即ち塞外の月。思胡笳、胡人が笳を吹く哀音を思ひ遣る。旗合、唐の李靖は其の舅韓擒虎に兵法を習ひ、太宗を扶けて突厥を撃ち功を立つ、兵を説いて曰く三隊合するとき

李靖傳、唐書卷九十三。

は、旗相倚りて交へず、五隊合するときは兩旗交はる、兵散するときは合を以て奇と爲す、合するときは散を以て奇と爲す。無邊正、胡兵が漢兵を攻むる能はざることを言ふ、「孫子」に、無邊正正之旗とあり。冠危、御史の職は監察糾彈を掌るなり、故に冠は解豸と云ふ獸の毛で作る、此の獸は正を愛し邪を嫌ふ故なり。有觸邪、邪に向うては假借せず糾彈するの意なり、獬豸は鹿に似て一角、一名は神羊、前に辨じたる如し。當看勞旋日、凱旋日と同義、及此御溝花、宮城外の溝を御溝と云ふ、楊溝、禁溝、其の溝上の岸に植ゑてある花が開く時節に凱旋するが好しとの意なり。

【評論】此の篇、十二句六十字、多く楊將軍の人品を稱して、景は附隨するに過ぎず、亦是排律の一體なり、句として傑出せるものは朔風邊月の二句十字に在り。

奉和聖製途經華嶽

張說

西嶽鎮皇京。中峯入太清。玉巒重嶺應。緹騎薄雲迎。白日縣高掌。寒空映削成。軒游會神處。漢幸望仙情。舊廟青林古。新碑綠字生。羣臣願封岱。廻駕勒鴻名。

西嶽皇京を鎮す、中峯太清に入る、玉巒重嶺應じ、緹騎薄雲迎ふ、白日高掌に縣り、寒空削成に映ず、軒游神に會する處、漢幸仙を望むの情、舊廟青林古り、新碑綠字生ず、羣臣封岱を願ふ、駕を廻らして鴻名を勒す、

【句釋】張説の傳は前卷に出せり。奉和聖製途經華嶽、元宗が華嶽を過る際賦したる詩を和したるもの。西嶽は即ち華嶽、陝西省西安府華陰縣南に在る太華少華の二嶽なり、今太華なり。鎮皇京、嶽は靈秀の鍾まる所、乃ち皇京を鎮護すとす。中峯は華嶽に三峯あり、其中峯なり。入太清、天宮の名を太清と曰ふ、漸漸高くなり虚空に進入するの謂なり。玉鑾、玉製の鈴鑾即ち天子乗輿の飾具なり。重嶺應、鑾音が嶺に應じて響くなり。緹騎は天子が侍從の臣なり、緹は丹黄色、古の兵服の遺製、執金吾の官、我邦の警視の如き役人を言ふ。薄雲迎、執金吾輩の馬前には薄雲が迎へるなり。白日、正に是れ一天晴朗。懸高掌、華嶽の高掌に懸る、仙人の掌の如き處を高掌と言ふ。寒空は晴天を言ふ。映削成、山海經に太華之山、削成而四方其高五千仞、其廣十里とあり。軒游會神處、「封禪書」に華山黃帝之所常遊與神會者とある、黃帝の名は軒轅なり。漢幸は漢の武帝が其地に即いて宮殿を造り、歲時祈禱する事を言ふ。望仙情、不老長生の仙を希望したるなり、不老長生を欲したるは永く精力旺盛を欲したるなり、童顏鶴髮の老人たらんと希望したるにはあらず。舊廟、當時漢武の舊廟なり。青林古、華嶽の樹林は伐戕せず、古たる所以なり。新碑、行幸ありし事を記せし碑石を樹つ。綠字は綠色の字なり、「訓解」に綠苔と解す、笑ふ可し。羣臣、今隨從する羣臣なり。願封岱、岱は泰山一に東嶽と曰ふ、五嶽の長たり、管仲の曰く、古は泰山に封じ、梁甫（山名なり）に禪する者七十二家、皆命を受けて然る後封禪を得、昔無懷氏泰山に封じて禪云云、黃帝秦

山に封じて禪、亭亭、周成王泰山に封じて禪、社首、「唐書地理志」に云云、亭亭、社首、皆山名なり。と。廻駕は元宗の駕を廻らす事を言ふ、華山は陝西なり、泰山は山東なり、此の地より泰山の方へ駕を廻らさん事を羣臣が願ふなり。張説が傳に、説封禪の儀を唱へて受詔して諸儒と儀を草す、裁正する所多し、帝東封して還説に詔して封禪壇頌を撰し、之を泰山に刻し、以て成功に夸る。勅は記勅なり。鴻名は大名なり、「相如封禪書」に前聖之所下以永保、鴻名二而爲中稱首上者用此、此の封禪を用ふるを謂ふなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、西嶽の風景と、行幸の次第とを交錯して、一縦一横、隊伍整齊たり、軒游二句十字を句弱と評する者あり、三復其の弱處を見出す能はず、余輩は稱して五排の上乗と爲す、氣象寛大、從容不迫、神品と謂つ可し。

奉和聖製早度蒲關

張九齡

魏武中流處。軒皇問道迴。長堤春樹發。高掌曙雲開。龍負王舟渡。人占仙氣來。河津會日月。天仗役風雷。東顧重關盡。西馳萬國陪。還聞股肱郡。元首咏康哉。

魏武流れに中する處。軒皇道を問うて廻る、長堤春樹發し、高掌曙雲開く、

龍は王舟を負うて渡り、人は仙氣を占して來る、河津日月を會し、天仗風雷を役す、東顧重關盡き、西馳萬國陪す、還聞く股肱郡、元首康哉を咏ずるを、

【句釋】張九齡の傳は前卷已に出せり。奉和は分明なり。聖製は玄宗が東方征伐して還幸の時の詩なり。早度蒲關、山西の河西縣に蒲津關あり、一に蒲阪と名く、又陝西の朝邑縣の東、黄河の東岸に蒲津關あり、今秦の孟明が河を度り舟を燒く處の説に據り、山西を取る。魏武は三國の曹操にはあらず、戰國の魏の武侯なり。中流處、武侯が西河に浮んで下り、中流に顧みて吳起に謂つて曰く美なる哉山河の固と。軒皇は軒轅氏即ち古の黄帝なり。問道廻「莊子」に、黄帝が廣成子が空同の上在すと聞き往いて之に見え、至道の精を問ふと、二句天子を以て天子に比す、作法見るべし。長堤は黄河に沿うて有る。春樹發、桃李皆發く。高掌は華山を謂ふ、華山遠望すれば、掌の形を爲す。曙雲開、雲開くが故に高掌分明に見る。龍負王舟度、海龍が王舟を負護して度る、「竹書紀年」に禹王が方を省る、江を濟るに黃龍舟を負ふとある。人占仙氣來、萬人、氣を望んで其人の來るを占ふなり、函谷關の令尹が紫氣を望み、老子の來るを知る等の類、往往史乘に多し。河津會日月、天子の出づるや、日旗左に輅し、月旗右に輅す、左に龍旗九游を建て以て日を夾み、右に熊旗六游を建て、以て月を輔くるなり。天仗役風雷、風雷が天仗の爲め役せらるゝなり。東顧重關盡、東游

して關門を過ぎ盡すなり、行幸の郡縣殆んど遍きなり。西馳萬國陪、既にして西歸すれば萬國の諸侯悉く趨陪する。還聞股肱郡、漢の文帝が河東の守季布を召し、罷めて郡に歸るに至りて曰く、河東は吾股肱郡なり、故に特に君を召すと。元首咏康哉、「虞書」に、皐陶乃ち賡載し歌ふて曰く元首明哉、股肱良哉、庶事康哉と、元首は天子なり、元首の爲めに歌ふ。【評論】此の篇、十二句六十字、前の八句は蒲津の景を叙し、後の四句は正しく聖主其人を言ふ。胡應麟が曰く、初唐沈宋外、蘇李諸子、未見大篇、獨曲江なり、張九齡諸作、含清拔于綺繪之中、寓神俊于莊嚴之内、如下度蒲關、登太行、和許給事、酬趙侍御、同時燕許稱大手、皆莫及也。良に確評と爲す、氣象の俊偉なる、傑人の作たるを窺ふべし。

和許給事直夜簡諸公

未央鐘漏晚、仙宇藹沈沈。武衛千廬合。嚴扃萬戶深。左掖知天近。南窗見月臨。樹搖金掌露。庭接玉樓陰。他日聞更直。中宵屬所欽。聲華大國寶。夙夜侍臣心。逸與乘高閣。雄飛在禁林。寧思竊抃者。情發爲知音。未央鐘漏晚、仙宇藹沈沈。武衛千廬合、嚴扃萬戶深。左掖天の近きを知り、南窗月の臨むを見る、樹は搖く金掌の露、庭は接す玉樓の陰、

他日更直の、中宵所欽に屬せしを聞く、聲華大國の寶、夙夜侍臣の心、逸興高閣に乘じ、雄飛禁林に在り、寧ぞ思はん竊拊の者、情發するは知音の爲めなり、

【句釋】和は前の如し。許は姓。給事は官名。直夜は宿直の夜。簡は呈と略同じ。諸公は友人にも先輩にも用ふる字面なり、「直夜ニ和シ諸公ニ簡ス」と點したる本あり、今取らず。未央は宮名。鐘漏は時計なり、前卷に辨あり。晚は日暮なり。仙宇は未央の事を言ふ。藹沈沈、何とも言へぬ日暮の景色なり、宮庭深邃の貌なり。武衛は警護の役。千廬合、「周廬千列」と西都賦に出づ、廬は宿直を言ふ、合は油斷無きなり。嚴局、局は關門なり。萬戶深、戶戶悉く嚴重にして隙無きなり。左掖は右掖に對す、給事は門下省に屬する官、天子の詔命を承く、故に言ふ。知天近、天子の御座に近きなり。南窗見月臨、天近きが故に月の臨むも亦早し。樹搖金掌露、金銅を以て仙掌を造り、以て露を承る、雙び立つ金莖なり、樹も亦高く搖動する。庭接玉樓陰は玉樓天子の座所、門下省の庭が玉樓の庭に接續するなり。他日は許か宿直の詩を示されし時を言ふ。聞は下の句に被らしむ。宿直は宿直なり。中宵は今夜と見るべし。屬所欽、今夜が君の宿直に當りし事を聞くなり、欽は敬なり、「ツツシム」なり、其の友に謂ふ。聲華は許の名聲、盛華。大國寶、「大學」に、楚國は以て寶と爲す無し、惟善以て寶と爲す、亡人以て寶と爲す無し、仁親以て寶と爲す、許は國の寶なり。夙夜は

日夜なり、「詩經」に、夙夜匪懈とあり。侍臣心、侍臣の盡心なり。逸興は普通の面白と言ふにあらす、清逸の興懷を言ふ。乘高閣、湛方生が「風賦」に、轉濠梁之逸興とあり、高閣なるが故に乘するなり。雄飛は今日の語で言へば、積極的に當る、反對の雌伏は消極的なり、「國策」に、蘇代が秦王に謂つて曰く、足下雄飛と、許が事を言ふ。在禁林、門下省に在るなり。寧思は料らざりきと同じ。竊は人知らざるが故。拊者、手を拍つ者、手を拍つは古より善事に用ふ。情發、拊舞する情の發するは。爲知音、張が謂ふ僕の手を拍つて嘆ずるは畢竟知音即ち友人の爲なればなり、「曹植表」に、聞樂而竊拊者或有賞音而知道也と。

【評論】此の篇、十六句、八十字、前半四十字は禁中宿直の景、後半三十字は給事が人物を叙し、最後の十字は和して詩を作る自身の思を叙す。蔣一葵の評に、不拘不滯、唐律之高者と。鍾惺の評に層層闡發、神氣飛動と。黃家鼎の評に駸駸入盛と。胡元瑞の評に燕許大手筆莫及と。

酬趙二侍御使西軍贈兩省舊寮之作

石室先鳴者。金門待制同。操刀常願割。持斧竟稱雄。應敵兵初起。緣邊虜欲空。使車經隴月。征旆繞河風。忽枉兼金訊。非徒秣馬功。氣清蒲海曲。聲滿柏臺中。願已塵華省。欣君震遠戎。明時獨匪報。常欲退微躬。

石室先鳴の者、金門待制同じ、刀を操りて常に割かんことを願ひ、斧を持して竟に雄と稱す、敵に應じて兵初めて起し、邊に縁つて虜空しからんと欲す、使車隴月を經、征旆河風を繞る、忽ち兼金の訊を枉げ、徒らに秣馬の功にあらず、氣は清む蒲海の曲、聲は滿つ栢臺の中、己を顧み華省を塵す、欣す君が遠戎を震ふ、明時獨報せず、常に微躬を退かんと欲す、

【句釋】 酬は酬和。趙は姓。二は尊稱。侍御は官名。使西軍、西軍に慰問使と爲る。贈兩省、門下省と中書省となり。舊寮は僚友なり。石室は國家の祕書を藏する處、御史は圖書を主とす、故に代用す。先鳴者は趙を言ふ、鳴は名聲を馳るなり。金門は金馬門。待制同、詔を待す即ち及第は趙と張と同じ、所謂同官なり。操刀常願割、何事か業を爲さんと志すなり、「左傳」に、子皮が尹何をして邑を爲さしめんと欲す、子産曰く不可なり、未だ操刀する能はずして割かしむ、其の傷實に多しと。持斧竟稱雄、趙が事を言ふ、「漢書」に、暴勝が直指使者と爲り、綉衣を衣、斧を持し盜賊を逐捕し、命に従はざる者を誅す、威州郡に振ふと。應敵兵初起、仁義の兵は妄りに起たず、起てば則ち敵に應じて起つ、漢の魏相傳に、應兵者勝と。緣邊、蠻夷に向へば、虜欲空、風を望んで虜兵悉く逃去する。使車經隴月、隴は大坂なり、丘隴と成語する、隴頭の月。征旆繞河風、黃河の風に旆

影を繞らすなり。忽枉兼金訊、枉は賜はるなり、兼金は價の常に兼倍する金、「孟子」に、王餽三兼金一百と、晉の陸機が詩に、良訊代三兼金とあり、訊は訊問、趙が僚友に音信されしは、兼金より貴しとの意。非徒秣馬切、秣馬の功は軍人の功、即ち武勳を言ふ、趙の如きは詩賦金の如き價あり、徒らに武功を以て夸る者にあらず、文武兼備の英雄なり。氣清、氣氣が清澄と成る。蒲海曲、蒲昌海は一に鹽澤と名く、玉門陽關を去る二百里、其の水冬夏増減せず、皆以爲らく地下に潜行し、南積石に出で、中國の河と爲ると、「漢書」西域傳にある。聲滿栢臺中、栢臺即ち門下省中に名聲藉甚なり。顧己は張が自己を顧念する。塵は汚塵。華省、門下省や中書省の如き貴き役所を塵すと卑下する。欣は欣羨。君震遠戎、吾と反對に君は威名を單于に震動する。明時は昭代なり。獨匪報、吾は國家に報效する所無し。常欲退微躬、後進の進路を開かんと欲するが故に吾は退いて一身を保たんとなり、微躬は君主に對して官人が用ふる語なり、「ツマラヌ躬」と言ふ事なり。

【評論】 此の篇、十六句八十字、石室以下二十字は先づ趙の人物を稱し、應敵以下二十字は趙が使節の事を叙し、忽枉以下二十字は趙が消息の事を叙し、顧己以下二十字は趙が功を稱して、己の身を謙し以て結を取る、章法分明なり、「訓解」の評に、轉折走對、勢如輕舟順風、快哉と。譚元春の評に、多少雄壯とあるは、何等の愚評をや。

奉和聖製送尚書燕國公說赴朔方軍

宗臣事有征廟算在休兵天與三台座人當萬里城朔南方偃革河右暫揚
旌寵賜從仙禁光華出漢京山川勤遠略原隰軫皇情爲奏薰琴倡仍題
瑤劍名聞風六郡勇計日五戎平山甫歸應疾留侯功復成歌鐘旋可望枕
席豈難行四牡何時入吾君聽履聲

宗臣征有るを事とす、廟算兵を休するに在り、天は三台の座を與へ、人は萬
里の城に當る、朔南方に革を偃さんとし、河右暫く旌を揚ぐ、寵賜仙禁より
し、光華漢京を出づ、山川遠略を勤め、原隰皇情を軫す、薰琴の倡を奏する
が爲めに、仍て瑤劍の名を題す、風を聞いて六郡勇み、日を計して五戎平ら
ぐ、山甫歸る應に疾かるべし、留侯功復成る、歌鐘旋て望む可し、枕席豈行
き難からんや、四牡何れの時か入り、吾が君履聲を聽かん、

【句釋】奉和は前の如し。聖製は玄宗なり。尚書燕國公説は張説なり。赴朔方軍、張は兵部尚書と爲りて朔方の節度大使と爲る。宗臣は人の爲めに尊宗せらるゝの臣、蕭何曹參一代宗臣と「漢書」

に在り、事有征、使臣と爲りて赴く事を言ふ。廟算は内閣の謀算。在休兵、王者は戰鬪を欲せざるなり。天は天子なり、與は附與せらる。三台、三台に六星あり、西、文昌に近き二星を上台と曰ふ、次の二星を中台と曰ふ、東の二星を下台と曰ふ、三公の位は即ち三台の位に同じ。座は即ち位なり、張は三公の一人なり。人當萬里城、張が價の貴きこと、萬里長城も遂に及ばざるなり、「宋書」に、檀道濟が功を前朝に立て、威名甚だ重し、朝廷之を疑畏す、矯詔して收めて廷尉に付す、道濟憤を脱し地に投じて曰く、乃ち汝が萬里長城を壞つと。朔南、朔地の南方、偃革、偃は倒なり、伏なり、革は甲なり。兵を休めるなり。河右は即ち朔南なり。暫揚旌、兵を休むるに先づ我が威を示す必要あり、暫時旌を揚ぐる所以。寵賜恩、寵賜の物あり。從仙禁、天子に仙字を用ふ、萬歳を意味する。光華は日光を云ふ、譬へて以て張の威光を言ふ。出漢京、長安の都城を出づるなり。山川勤遠界、遠方を經略するの謂なり。原隰は、「毛詩」小雅に、原隰哀矣とある、野原隰邊を云ふ。輪は動なり。皇情、皇情の至らざる所なきなり。爲奏薰琴倡、「帝紀」に、舜が五絃琴を弾じ、南風の詩を歌ふて曰く、南風之薰兮、可三以解吾民之愠と、今此の歌を奏して送るなり。仍題瑤劍名、瑤は寶なり、「東觀漢紀」に尚書韓稜、郵壽、陳寵の三人俱に才能を以て屬望せらる、肅宗賜ふに寶劍を以てし其の名を署して曰く、韓稜楚龍泉、郵壽蜀漢文、陳寵濟南椎成と、稜は深沈謀有り、壽は明遠文章有り、寵は敦朴善外に見はれざるを以てなり、張に對する思寵亦同じとの意なり、聞風、威風を聞い

てなり、六郡は邊地に在るなり、「漢書」漢初に材官を郡國に置く、武帝の時、羽林期門の兵を増し、邊地六郡良家の子を以て羽林郎に補すと。勇は勇氣を出すなり。計日は豫定の如くなるを言ふ。五戎平、匈奴と穢貊と密吉と單于と白阜是れ五戎なり、平定する。山甫、周の宣王、仲山甫に命じて齊に城かしむ、尹吉甫詩を作り之を送る、仲山甫徂齊、式過其歸と、歸應疾、疾は過なり。留侯は漢の張子房なり、高祖曰く、籌策を帷帳の中に運らし、勝を千里の外に決するは子房の功なり、乃ち留侯に封ず。功復成、出入共に功あるを以て、二人を以て張に譬ふ。歌鍾は、「左傳」に晉の悼公が魏絳に女樂一八、歌鍾一肆を賜うて曰く、子、寡人に戎狄を和し、諸華を正すことを教ふ、今に於て八年、七たび諸侯を合し、寡人志を得ざることを無し、請ふ子と共に之を樂しまん、歌鍾は歌時に奏する所、凡そ鐘磬を懸る全を肆と爲し、半を堵と爲す。旋可望、凱旋して此の賜あるや必然なり。枕席、漢の趙充國が西域を肆し威を千里に信ぶ、枕席の上より師を過す、橋梁成りて軍行安易、枕席上に過ぎるが若きの謂なり。豈難行、少しも行軍に困難ならざるなり。四牡は四馬なり。何時入、中國へ入らんとなり。吾君、即ち玄宗なり。聽履聲、漢の哀帝の時、鄭崇尙書僕射と爲る、數ば謀諍す、上之を納れ用ふ、見る毎に葛屨を曳く、上笑つて曰く、我鄭尙書が履聲を識ると。

【評論】此の篇、二十句、百字、燕國公の人品を嘆するが主にて、朔方の状を言ふは客なり、古人を以て比する者、尙書相當の人を以てし、其の權衡を取る。譚元春の評に同時明皇、羅從愿、張嘉

貞俱有詩、無此沈著、篇中休兵字最有深意、一結雍容と、此の深意あり、九齡の九齡たる所以なり。

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制

王維

萬國仰宗周。衣冠拜冕旒。玉乘迎大客。金節送諸侯。祖席傾三省。褰帷向九州。楊花飛上路。槐色蔭通溝。來預鈞天樂。歸分漢主憂。宸章類河漢。垂象滿

中州。

萬國宗周を仰ぎ、衣冠冕旒を拜す、玉乘大客を迎へ、金節諸侯を送る、祖席三省を傾け、褰帷九州に向ふ、楊花上路に飛び、槐色通溝に蔭す、來りて預る鈞天の樂、歸りて分つ漢主の憂、宸章河漢に類す、垂象中州に滿つ、

【句釋】王維の傳は前卷に出せり。奉和は前の如し。聖製は玄宗なり。暮春は三月。朝集使は外國人にして入朝し朝班に與かる者を曰ふ、日本の吉備公なども朝集使なり、此の名は漢より以來有り、唐の武德九年三月、朝集使を百福殿に宴す、天寶三載三月兩省五品以下に勅して、鴻臚亭にして朝集使を祖餞すと。歸郡は本郡に歸る。應制は天子の命に應ずるなり。萬國、別しては唐土一國なり、總じては世界萬國なり。仰宗周、宗周の名を藉り、以て唐室の天下を言ふ、赫赫宗周の「毛詩」が出典なり。衣冠は萬國の羣臣なり。拜冕旒、「禮記」に、天子の冕十有二旒、絲繩を以て玉を

貫ぬき、之を前後に垂る、之を旒と曰ふ。玉乘は、「周禮」に、王の五輅、一に玉輅と曰ふ。迎大客、天子親ら玉輅に乗じて迎へるとの意か、或は天子の乗る輅を以て大客を迎へるとの意か、前説はならん、「周禮」に、凡そ諸侯入れば王則ち畿に逆へ勞す、大客は則ち擯し、小客は則ち其の幣を受くと。金節、小行人なる役人、天下の六節を達するを掌どる、山國は虎節、土國は人節、澤國は龍節、皆金にて之を爲る、道路は旌節、門關は符節、都鄙は管節、皆竹にて之を爲る。送諸侯、諸侯が朝聘に赴くときは、金節を以て授け、行道の信と爲す。祖席、共工の子、修は遠遊を好み、舟車の至る所、足跡の達する所、窮覽せざるは無し、故に祀りて以て祖神と爲す。傾三省、傾は其の盛んなるを言ふ、尙書、中書、門下の三省なり。襄帷は後漢の賈琮は冀州の刺史と爲る、部を行る、御者に命じ其の車帷を襄げて曰く、刺史は當に遠視廣聽、善惡を糾察すべし、何ぞ反つて帷裳を垂れて以て自ら掩塞する有らん。向九州、東南の揚州、正南の荊州、河南の豫州、正東の青州、河東の兗州、正西の雍州、東北の幽州、河内の冀州、西北の并州是を九州と曰ふ。楊花飛上路、楊柳の花が飛ぶ時節正に二月なり、天子の行路を上路と曰ふ。槐色、青青たる槐樹の色。蔭は覆ふなり。通溝、南北に通ずる溝を曰ふ。來預、諸侯が來り預るなり。鈞天樂は鈞天廣樂と言ふ、天帝の樂なり、中央を鈞天と爲す、「列子」に出づ。歸分、諸侯が歸國後に分つなり。漢主憂、臣民の爲めに天子の憂を、諸侯が學ぶなり。宸章は天子の賦せし詩。類河漢、天の銀漢に比すべき徳あり。垂象は「易」に天垂象聖人則之とあり。滿中州、中國に滿つとなり。

賈琮傳、後漢書卷六十一。

【評論】此の篇、十二句、六十字、天子の事と、諸侯の事と、交錯して出し、最後に宸章の文字を以て遂に天子に歸す、壯麗無比、神品に近し、漢が二字あり、州の韻が二處にあり、排律の正法にあらすと思へども、一代の正宗王右丞の作、千秋亡びざるを以ても其の尊ぶべきを知る。

送李太守赴上洛

高山包楚鄧。積翠藹沈沈。驛路飛泉灑。關門落照深。野花開古戍。行客響空林。板屋春多雨。山城晝欲陰。丹泉通號略。白羽抵荆岑。若見西山爽。應知黃綺心。

高山包楚鄧を包み、積翠藹として沈沈、驛路飛泉灑ぎ、關門落照深し、野花古戍に開き、行客空林に響く、板屋春雨多く、山城晝陰らんと欲す、丹泉號略に通じ、白羽荆岑に抵る、若西山の爽を見れば、應に黃綺の心を知るべし、

【句釋】送李太守、李は姓、太守は縣知事なり。赴は行なり。上洛は縣名なり、陝西省西安府の商縣は唐天寶の初、上洛郡と爲す。高山、漢の四皓が隠れし山、一名楚山、又地肺山、商州の東南に

在り。包楚鄧、楚國の鄧州を圍むなり。積翠山の積翠、藹沈沈、春藹沈沈たり。驛路、山驛なれば路上に飛泉灑の奇景を見る。關門、上洛縣の西北に峽關あり。落照深、驛路の飛泉を見て、峽關に至る頃は早夕照の深からんとする時なり。野花、無名の野花。開古戍、昔は戍兵の居りし處、太平の世、戍兵は無し。行客は旅人なり。響空林、寂莫たる空林、旅人の脚聲が響くのみ。板屋は字の如く板屋なり、疎末な家なり。春多雨、夏の旱を窺ふ是れ側面の解なり、吳楚の間は半月餘も雨が續くなり。山城晝欲陰、山の氣候は變化多し、乍晴れ乍陰る、是を常態とす。丹泉は水名なり、洛の冢嶺山より出づる水。通虢略、虢略は縣名なり。白羽は地名、周に在りて申伯鄧州の封爲り春秋のとき楚に併す。抵荆岑、荆山に接するなり、荆山は西安府の富平縣に在り「登樓賦」に蔽荆山之高岑とあり。若見西山爽、西山は即ち商山なり、其の西山の爽氣を見るときは、應知黃綺心、黃公と綺公等四皓が心を知るべしとなり、四皓は皆行の潔なる人なればなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、南山より白羽に至る五十字、悉く上洛の景を叙し、若見の二句に僅かに本題の意を見る、備に山水を述ぶるは太守の意山水にあればなり、政治に就いて一言も言はざるは常套語を避けし爲めならん。鍾惺曰く、全篇叙行色、結句著三弔古意、詞多老成醇雅と。吳吳山の曰く、詩中複三泉字、三三山字、凡十二見地形、意無太守意、古人不以為病と。商山と山城と西山、飛泉と丹泉、其の他地名の多き知り易し、病と爲さずと云ふと雖も、緊嚴ならざるものと謂ふ可し、蓋し古調として見れば、亦傑製と嘆稱すべし。

送秘書晁監還日本

積水不可極。安知滄海東。九州何處是。萬里若乘空。向國唯看日。歸帆但任風。鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉樹扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。

積水極む可らず、安ぞ知らん滄海の東、九州何れの處か是なる、萬里空に乗ずるが若し、向國唯日を見、歸帆但風に任す、鰲身天に映じて黒く、魚眼波を射て紅なり、郷樹扶桑の外、主人孤島の中、別離方に異域、音信若爲が通せん、

【句釋】送秘書晁監、秘書監は職名、晁は名、邦國經藉圖書の事を掌どる、「唐日本傳」に開元の初、粟田復朝す、其の副朝臣仲滿、華を慕うて肯て去らず、姓名を易へて朝衡と曰ふ、左補闕儀王友を歴、該識する所多し、久しうして還る、天寶十二載、朝衡復朝す、上元中左散騎常侍安南都護に擢んづ、國史を案ずるに文武の大寶元年、粟田朝臣真人、遺唐執節使と爲る、是唐の長安元年に當る、元正の靈龜二年多治比真人縣守、遣唐使と爲る、是開元四年に當る、唐書に混じて粟田と爲す、

又留學生を誤りて副と爲す、朝臣仲滿は安部朝臣仲麻呂なり、蓋し朝臣を修して朝氏と爲す、朝の音界に通ずるなり、天平勝寶四年九月藤原朝臣清河を以て遣唐使となし、大伴宿禰古麻呂を副使と爲す、十一月吉備朝臣眞備を入唐副使と爲す、唐書の天寶十二載の使は是れなり、而して朝衡の名を見ず、東征傳に、天寶十二歲、日本大使特進藤原朝臣清河、副使光祿卿大伴宿禰胡萬副使秘書監吉備朝臣眞備衛尉朝衡を使すと、蓋し靈龜二年多治比唐に使用するなり、眞備年二十三、仲滿年十六、從つて入唐留學生と爲る、二人既に遷る、清河と再び入唐するなり、勝寶六年古麻呂眞備唐より歸る、清河は則ち逆風に遭ひ、驩州に漂著す、賊に遇ひ、合船害せらる、僅かに身を以て免る、終に歸ることを得ず、大歷五年唐に卒す、朝衡亦大歷十四年を以て唐に卒す、承和三年詔し曰く故留學問從二品安部朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正二品一と。積水は滄海を言ふ。不可極、際涯を知る可らざるなり。安知、極む可らずと言へば、安んぞ知らんや。滄海東、何にも無き様ではあるが積水の東には一國が存在する。九州は日本の九州を指すにあらず、單に唐土以外の國を言ふ。何處遠、日本は何處ぞや。萬里若乘空、「列子」に乘空苦履實とある、遠望海上の景状を言ふ。向國唯看日、目的とするものは唯日影のみ。歸帆但任風、順風を祈り、逆風を畏れし所以なり。鰲身、鰲は如何なる魚なるか未詳、「爾雅」には巨龜とあり、「列子」に渤海の東に五山あり、仙人の居所、五山の根、連著無く、潮に隨つて上下す、帝西極に

流れんことを恐れ、策強に命じ巨鰲十五して首を擧げ之を戴かしむ、始めて動かす。映天黒、巨鰲が水上に浮ぶ状を言ふ。魚眼射波紅、「隋書」に、日本に如意寶珠あり、其の色青く大さ鶏卵の如し、夜光あり魚眼精なりと。郷樹扶桑外、「十洲記」に扶桑木は碧海の中に在り、樹の長さ數千丈、三百餘圍、兩樹同根更に相依倚す、故に稱して扶桑と爲す。主人孤島中、我邦の主上を指す、日本は東海の孤島なり。別離方異域、一衣帶とは言はずして、異域と云ふ。萬里乘空の意を失はず。音信若爲通、若爲は若何と同じ。【評論】此の篇、十二句六十字、積水より主人に至る五十字悉く海上の景、末二句僅かに離別の情を叙す、此の中、積水の十字、鰲身の十字は千古の名句として人口に膾炙する所。皇甫子の曰く、積水不可極、安知滄海東、可謂工於發端一矣、謝靈運の莫辨洪波極、誰知大壑東、此の詩の本づく所。

送儲邕之武昌

李白

黃鶴西樓月。長江萬里情。春風三十度。空憶武昌城。送爾難爲別。銜杯惜未傾。湖連張樂地。山逐泛舟行。諾謂楚人重。詩傳謝眺清。滄浪吾有曲。寄入棹歌聲。

黃鶴西樓の月、長江萬里の情、春風三十度、空しく憶ふ武昌城、爾を送りて別を爲し難し、杯を銜んで惜んで未だ傾けず、湖は張樂の地に連なり、山は泛舟の行を逐ふ、諾は楚人の重きを謂ひ、詩は謝眺が清きを傳ふ、滄浪吾曲あり、寄せて棹歌の聲に入らん、

【句釋】李白の傳は前卷に出せり。儲邕は「唐書」に傳無し。之は赴なり。武昌は湖北省鄂州府、三國の吳、都を置きし處。黃鶴西樓月、武昌府城西南の隅に黃鶴樓あり、仙人子安が昔、黃鶴に乗じて登天せし所なるを以て名く、西樓は南樓と對す、南樓は一名庾公樓、庾亮が月を賞せし樓なり、二樓誤らざらんことを要す。長江、即ち楊子江なり城下を流れて東海に入る。萬里情を引く所以なり。春風三十度、春風に逢ふこと三十年、此の三十年來、黃鶴樓の游を思ふなり。空憶武昌城、勝地游意頻なるも遊ぶ能はず、空しく憶ふのみなり。送爾、儲邕は太白の後輩ならん。難爲別、別れんと欲して別れる能はざるの情なり。啣杯惜未傾、盃を口まで持つてゆき而かも飲むに堪へざるなり、別れる時刻を長うするなり。湖連張樂地、「莊子」の黃帝が咸池の樂を洞庭の野に張るに出づ、晉の謝眺は、洞庭張樂地、瀟湘帝子游の詩あり。山逐、洞庭湖上の山、鳳凰山も赤壁山もあり。泛舟行、山が儲邕が行舟を逐ふもの、如きを言ふ。諾謂楚人重、武昌城に住する人は、皆信を重んず

人のみなりとの意、楚人の諺に黃金百斤を得んよりは、季布が一諾を得るに如かずと、季布は楚人なり、武昌は古の楚地なり。詩傳謝眺清、「南史」九 謝眺字は元暉、少うして樂を好み、美名あり、文章清麗、五言詩に長ず、沈約梁人常に云ふ、二百年來此の詩無し、眺が宣城太守と爲りし詩あり、餘霞散成綺澄江淨如練と、太白は終生此の人を追慕せしなり。滄浪吾有曲、古に滄浪歌あり、吾も亦滄浪曲あるとの謂なり、「漁父詞」に、漁父樵を鼓して去り、歌つて曰く、滄浪之水清兮、可三以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可三以濯吾足と、江水荊州の東南に出て、滄浪の水と爲る。寄入棹歌聲、吾が滄浪の曲を、漁父の歌の如く、權歌に入れて以て歌うて呉れと云ふ意味なり、漢武帝が「秋風詞」に、簫鼓鳴兮發棹歌の句あり。

【評論】此の篇、十二句六十字、黃鶴以下の四句、別に就いて先づ吾意を叙し、送爾の二句は正しく別恨を叙し、湖連の二句は地の佳を叙し、諾謂の二句は人の美を叙し、滄浪の二句、全首を包んで結を取る、章法分明なり、蓋し他人の排と異なり、對句に拘拘せず、沈歸愚曰く、以古風一起法、運作長律、太白天才、不拘拘繩墨乃爾と。鍾惺は曰く、行雲流水、飄然不羣と。黃家鼎の曰く、音韻鏗鏘、儷偶參錯、排律之變態、同時唯孟襄陽有之、然不可無一、不可有二と、洵に然り。

陪張丞相自松滋江東泊渚宮

孟浩然

放溜下松滋。登舟命楫師。寧忘經濟日。不憚迥寒時。洗幘豈獨古。濯纓良在茲。政成人自理。機息鳥無疑。雲物吟孤嶼。江山辨四維。晚來風稍緊。冬至日行遲。獵響驚雲夢。漁歌激楚辭。渚宮何處是。川暝欲安之。

溜に放つて松滋を下らんとし、舟に登つて楫師に命ず、寧ぞ忘れん經濟の日、憚らず迥寒の時、幘を洗ふこと豈獨古ならんや、纓を濯ふこと良に茲に在り、政成りて人自ら理し、機息みて鳥疑ふこと無し、雲物孤嶼に吟じ、江山四維を辨ず、晚來風稍緊しく、冬至日行に遅なり、獵響雲夢に驚き、漁歌楚辭を激す、渚宮何れの處か是なる、川暝うして安くに之かんと欲する、

【句釋】孟浩然の傳は前卷に出せり。陪は隨陪なり。張丞相は張九齡なり。自松滋江、湖北の荊州府に松滋縣あり、岷江が下流分れて三派と爲る、下流三十里復合して一と爲り江陵に達す、即今の川江是なり。泊渚宮、荊州江陵縣故城の東南に渚宮あり、楚の襄王が驪宮、宋玉が故宅の在る處。放溜、溜水は鬱林に出づ、是は別の解釋なり、今は流の意味なり、舟を流れに放つて、下松滋、江を下らんとするなり、是を以て、登舟命楫師、東下せん事を舟人に命ずる。寧は何なり。忘經濟日、經濟とは錢の勘定を爲す事にはあらず、經世濟民と云ふ事なり、張九齡は尙書右丞相、即ち國の

大臣なりしも、李林甫の爲めに危うせられ、既にして周子諒が事に坐し、荊州長史に貶せらる、此の間一日も經世濟民の志を忘れし事無しとの意。不憚は畏れざるなり。迥寒、迥は陰氣が堅固にして、閉塞通せざるなり、乃ち嚴寒の時を言ふ。洗幘は吾が狂迂なるを言ふ、楚の狂士陸通、松間に高臥して以て霞氣を受く、幘即ち頭巾を松頂に掛く、鶴啣んで水濱に去る、通之を洗うて因つて鶴と同じく去る。豈獨古、陸通のみならず、余も亦同じとの意。濯纓は屈原が纓を濯ひし處、即ち荊州府なり。良在茲、屈原の故宅は歸州の北に在る、孟が自志を叙するなり。政成は張の事を叙す、「左傳」に、政以て民を正す、是を以て政成りて民聽くと。人自理、蒼生を處理する。機息、「莊子」に機事ある者、必ず機心あり、吾は爲さざるなりと。鳥無疑、鳥類と雖も、人の機心を知る、己れを捕へんと欲する念の無き人は之に傍うて飛ぶ、毫も疑はず、人を治め、以て鳥に及ぶ。雲物は窮愁の日、即ち冬至を言ふ、「左傳」に凡分至啓閉必書雲物と。吟孤嶼、吟の字を冷又は凝に作る本あり、良工の苦心を没却する、吟の字を以て妙と爲すなり、嶼は水中の洲上に山石あるなり。江山辨四維、晴日なるが故に四維即ち四方の隅を分明に辨知するを得、四維は「淮南子」に出づ。晚來は黄昏を言ふ。風稍、稍は漸なり。緊は急なり、糾なり。冬至は三冬の半に當る、是日より一陽が回ると云ふを以て、日行遅なり、行は「ユク」と訓するより「マサニ」方の意味が可なり。獵響、獵する者が楚の土地を過ぎ、響は下の歌に對す。驚雲夢、雲夢澤即ち巴丘湖の大に驚く

なり、驚く者は客なり。漁歌、漁父の歌。激楚辭、激は動激なり、滄浪歌は屈原が激して作りしもの、以て前句の濯纓の句に對す。洛宮何處是、何處であるか、泊處なるが故に問ふ。川暝、川上は暝色、東西を辨つ可らず。欲安之、楫師が舟を泊せんとする所は何處なりやとの意。

【評論】此の篇、十六句八十字、放溜の二句は江に下る事を叙し、詎忘の二句は丞相の事を叙し、洗幘の二句は從來丞相の事を言ふと解してある、余は陸通が狂士と稱せらるゝより、是は孟自身の事を叙すと見る、政成の二句は丞相にも係り、又泛爾に他にも通ずる、雲物以下八句は松滋江の景色を叙す。明の蔣一葵の評に、極有ニ雅致、非ニ思索所及と。劉會孟曰く、工處渾然不似深思者一と。

送柴司戸充劉卿判官之嶺外

高適

嶺外資雄鎮。朝端寵節旄。月卿臨幕府。星使出詞曹。海對羊城闊。山連象郡高。風霜驅瘴癘。忠信涉波濤。別恨隨流水。交情脫寶刀。有才無不適。行矣莫徒勞。

嶺外雄鎮を資く、朝端節旄を寵す、月卿幕府に臨み、星使詞曹を出す、海は羊城に對して闊く、山は象郡に連なりて高し、風霜瘴癘を驅り、忠信波濤を

渉る、別恨流水に隨ひ、交情寶刀を脱す、才あれば適せざる無し、行矣徒に勞する莫からん、

【句釋】送柴は姓司戸は官名、唐の諸州諸縣、各司戸あり、典公曰く、星使出詞曹の句を以てするに、司戸を稱して詞曹と爲す可からず、按ずるに當時節度使觀察の判官、大底は尙書郎中或は員外郎を檢校す、則ち司戸は戸部の誤か、尙書郎、文書起草を主とす、故に詞曹と言ふなり。充は部下に配當せらる。劉卿は節度使と爲る。判官は劉に隨行する役、柴を言ふ。之嶺外、嶺外は唐の嶺南道、廣東廣西の地總て是れなり。嶺外、此の外の字を以てせらるゝ地、悉く邊境と知る可し。資は憑なり、頼なり。雄鎮、中國の雄鎮として資る處。朝端、朝は朝廷、端は正端、立派な朝廷の意。寵節旄、凡そ命を以てする者、必ず節を持して信と爲す、上下相重んず、象を竹節に取る、因て名けて節と曰ふ、毛を以て之を造る、故に節旄と云ふ、牛尾、竿頭に結著す、今の幢なり、特に寵命あるなり。月卿、「洪範」に卿士惟月とある。臨幕府、大將軍の幕中に臨む、是は劉を曰ふ。星使、天に使星あり、因て使臣を稱して星使と曰ふ。出詞曹、尙書省の詞人なり、是は柴を曰ふ。海對羊城闊、五羊城は廣州南海縣に在り、五仙人、五色の羊に乗じて城に至るを以て此の名あり、趙佗之を築く、後黃巢が焚く所と爲る。山連象郡高、象郡は本の桂林郡武德四年に置く、象山あり、其の形象に似り、因て郡名と爲すと、「唐書地理志」にあり。風霜は烈風嚴霜、即ち劉を讚して言ふ、

驅は驅逐するなり。瘴は瘴氣、癘は癘風、風土病と稱するものあり。忠信は柴を讀して言ふ、孔子家語に、孔子、衛より魯に反る、駕を河梁に息うて觀る、懸水三千仞、圓流九十里なるあり、一丈夫あり、方に之を厲らんとす、孔子人をして涯に並んで之を止めしむ、丈夫以て意と爲さず、遂に度りて出づ、孔子問うて曰く、子道術ありや、丈夫對へて曰く、始吾の入るや忠信を以てす、吾の出づるに及び、又從ふに忠信を以てす、忠信吾軀を波流に措く、吾敢て以て私を用ひず、能入り而して復出づる所以、孔子、弟子に謂つて曰く、二三子之を識せ、水且猶忠信を以て成身之を親しくすべし、況んや人か。涉波濤、意味上の如し。別恨隨流水、水に隨つて滅すと云ふにあらず、流水の如く長き恨を言ふ。交情脫寶刀、漢の費禕が吳に使す、孫權、手中常に執る所の寶刀を以て之に贈る、禕曰く、刀は不庭を討し、暴亂を禁ずる所以のもの、願くは大王勉て功を建て業を立て、同じく漢室を輔けよ。晉の呂虔寶刀あり以て長史王祥に授けて曰く、苟くも其の人に非ざれば、刀反つて殃を爲す、君令徳あり、之を佩ぶ可しと。有才無不適、柴の如きは乃ち費禕や呂虔の如く才の縦横なる者なり。行矣莫徒勞、兎や角と嶺外瘴癘の事など心配せず、行くが可なりと此の行を壯にするなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、嶺外の二句は任を受けたる事を叙し、月卿の二句は其の人を稱し、海對二句は嶺外の風土を叙し、風霜の二句は復二人を稱し、別恨以下四句は送者の情を叙して結を

取る、月卿の二句は鴛鴦對なるもの、月卿の五字は雌句にて、星使の五字は雄句なり。蔣一葵の曰く、宋人用忠信字、便酸、那復得此。

陪竇侍御泛雲靈池

白露先時降。清川思不窮。江湖仍塞上。舟楫在軍中。舞換臨津樹。歌饒向晚風。夕陽連積水。邊色滿秋空。乘興宜投轄。邀歡莫避驄。誰憐持弱羽。猶欲

伴鷓鴣

白露時に先だつて降る、清川思窮まらず、江湖仍塞上、舟楫軍中に在り、舞は換る津に臨む樹、歌は饒し晩に向ふ風、夕陽積水に連なり、邊色秋空に滿つ、興に乗じて宜しく轄を投すべし、歡を邀へて驄を避くること莫かれ、誰か憐まん弱羽を持して、猶鷓鴣に伴はんと欲することを、

【句釋】陪は隨陪なり。竇は姓。侍御は官名。泛は舟を泛べ遊ぶなり。靈雲池は甘肅の涼州に在り、塞外へ備へる爲めの軍を置く、無事なる時は宴游以て興を遣る、山には亭臺、水には舟楫、之以て常と爲すなり。白露先時降、普通露降の節は八月なり、邊地早寒なれば七月なるべし。清川は

靈雲池を指す。思不窮、情思の多きを言ふ。江湖も靈雲池を指す。仍は「ヤハリ」と言ふ意。塞上、邊塞の上なり、尋常郷土にあらず。舟楫、此の舟中の宴も亦、在軍中にして普通の堂中にはあらず、江湖にして塞上、舟楫にして軍中、亦悲しむべく、塞上にして江湖、軍中にして舟楫、亦娛しむべし、反覆意深とは典公の解、工なり。舞換臨津樹、唐汝詢の解に従へば、舞態目を炫し、津に臨むの樹換るが若くなるを覺ゆと、尙他に解あるべし、姑く疑問とす。歌饒向晚風、歌聲物を動かし晩に向ふの風、益す饒かならしむるなり。夕陽連積水、目の届く所の水、悉く夕陽連なるなり。邊色滿秋空、滿空の秋色、亦邊土の興趣深きなり。乘興宜投轄、前漢の陳遵酒を嗜み、大飲毎に賓客堂に滿つ、趣ち門を關し、客の車轄を取り、井中に投ず、急ありと雖も、去るを得ず。邀歡莫避驄、邀へる字と避くる字とが字眼である、後漢の桓典が侍御史に爲りし時、常に驄馬に乗る、京師之を畏憚し、行行且止、避驄馬御史と、今其の反對を言ふ、愛敬あるなり。誰憐持弱羽、高が自分の如き小才の者がと云ふ意、弱羽は小鳥の羽、小鳥の如き人間がと云ふ意味。猶欲伴鷓鴣、鷓鴣は鳳凰なり、鴻は大鳥なり、以て大官に譬ふ、今侍御史に譬ふるなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、白露以下の四十字は游興の狀態を叙し、乘興以下の二十字は己が情思を叙し、以て結ぶ。鍾惺の評に、常侍なり、健而不甚整、獨此兩排律、堪與右丞敵と。右丞は王維なり。譚元春の評に、描寫殆盡、語云詩中有畫、信矣哉と。徐而菴の評に、說得變化、有二步驟而無二端倪と。

重經昭陵

杜甫

草味英雄起、謳歌曆數歸。風塵三尺劍、社稷一戎衣。翼亮貞文德、不承戢武威。聖圖天廣大、宗祀日光輝。陵寢盤空曲、熊羆守翠微。再窺松柏路、還見五雲飛。

草味英雄起、謳歌曆數歸、風塵三尺の劍、社稷一戎衣、翼亮貞文德、不承戢武威、不承武威を戢む、聖圖天廣大、宗祀日光輝、陵寢空曲に盤り、熊羆翠微を守り、再び松柏の路を窺うて、還つて五雲の飛ぶを見る。

【句釋】重經は再度なり、昭陵は唐の太宗の陵墓なり、貞觀十年、昭陵を九嶷山に置く、醴泉縣に在り、天寶九年杜公東都より復長安に歸る時の作。草味は開國の初を言ふ、「易」に天造草昧、草にして齊しからず、昧にして明ならず、隋末の昏亂を指すなり。英雄起、太宗李密が起れるを言ふ、謳歌は衆人が和するを言ふ、「孟子」に謳歌する者、堯の子を謳歌せず、舜を謳歌すと。曆數歸、「尙書」に天の曆數爾が躬に在り。惟天命歸す、天命が隋を去つて唐に歸するなり。風塵、世の昏亂を言ふ。三尺劍、漢の高祖の曰く、吾布衣を以て三尺の劍を提げ天下を取ると。以て太宗に譬ふ。社

稷は今日の國家の語に當る、「風俗通」に、社は土地の主、土地廣大、徧敬せず、故に土を封じて以て社と爲して之を祀る、稷は五穀の長、五穀衆多、徧祭せず、故に稷を立て之を祭る。一戎衣、「書」一戎衣にして天下大に定まる。翼亮は太宗が高祖を翼けて信を民に示したるを言ふ、「書經」に、予、有民を左右せんと欲す、汝翼けよ、又百揆に宅し、采を亮し疇に恵せしむ、亮は朗なり、信なり。貞文德、文王の德を貞にすと見るべし、貞一本真に作る。丕承は、「書經」に丕に承くる哉武王の烈とあり。戢武威、武王の如き威を戢められしを言ふ、戢は斂むるなり、太宗が高祖に於ける事を言ふ、聖圖天廣大、文武を兼ねて天下を計圖せられし事は、其の功宇宙に垂るとの意を言ふ。宗祀は光輝、廟食される事は千秋不滅なり、「荀子」に、日月亮ならざれば、光輝赫ならずと。陵寢は靈屋を言ふ、陵墓には園寢起居衣服象生の具有るを以てなり。盤空曲、山と山との間曲に廟が在るなり、熊羆は、「書經」に熊羆の士、二心あらざるの臣、陵寢を護る衛士を言ふ。守翠微、「爾雅」に、山未だ上に及ばざるを翠微と曰ふと、單に山を指すと見て可なり。再窺松柏路、再度此の陵に來て松柏の路を行く。還は重ねてより。見五雲飛、五彩の雲が纏うて、太宗の神在すが如しとなり。

【評論】この篇、十二句、六十字、草昧より以下八句は太宗が經歷と其の功德を叙し、陵寢より以下の四句、陵土の状と吾が敬念とを叙して以て結ぶ、「本集」に「行次昭陵」二十四句百字の詩あり、頗る雄篇とす、此の詩と斤量相俾し。何景明の評に、用「經史」入「詩」、絶不「見」斧鑿痕、使「他人道」之、未「免」拙滯」と。鍾惺の評に、陵廟之作、典故悲涼、說「功業」無「竹帛氣」、說「神靈」無「松杉氣」と。此の何景明の評を「集注」に鍾惺云とあり、誤謬なり。

王閩州筵奉酬十一舅惜別之作

萬壑樹聲滿、千崖秋氣高。浮舟出郡郭。別酒寄江濤。良會不復久。此生何太勞。窮愁但有骨。羣盜尙如毛。吾舅惜分手。使君寒贈袍。沙頭暮黃鶴。失侶亦哀號。

號

萬壑樹聲滿、千崖秋氣高し、浮舟郡郭を出で、別酒江濤に寄す、良會復久うせず、此の生何ぞ太だ勞せる、窮愁但骨あり、羣盜尙毛の如し、吾舅分手を惜しむ、使君寒うして袍を贈る、沙頭の暮黃鶴、侶を失して亦哀號す、

【句釋】王は姓、閩州は郡名、王が此の郡守なり、隆州を閩州とせしは玄宗の名を避けて云ふ、四川省の保寧府なり、子美が廣徳の初、梓州より暫く閩州に往く、時に吐蕃の亂あり、杜將に閩州を去らんとす、王が筵を設く、舅座に在り惜別の詩を作る、子美之に酬いたるなり。萬壑樹聲滿、劍溪の如き深谷あり、萬籟音を爭ふ。千崖秋氣高、大巴山や小巴山の如き峻峯あり、各秋氣の高きを競ふ。浮舟出郡郭、舟が郡郭を離れて、以て江に入るなり。別酒寄江濤、「江濤を」と訓したる本

あり、江濤を酒の名と見たるならん、今「江濤に」と訓ず、舟中に酒を寄贈せらるゝなり。良會不復久、此の良會を久しうせざるを言ふ。此生何太勞、此の人生は何事の爲に勞する、自身の奔走を嗟するなり、「莊子」に、大地我を勞するに、生を以てすと。窮愁は極愁なり。但有骨、愁ふる爲めに肉が瘦せ骨立する、「史記」に、虞卿、窮愁にあらざれば、書を著して以て自ら後世に見ること能はず。羣盜尙如毛、大なる國の賊、小なる人の賊、充滿するを言ふ、吾舅、舅は「シフト」女よりは夫の父、男よりは妻の父なり。惜分手、杜に別を惜しむ。使君は王を言ふ。寒贈袍、「史記」に、須賈が范叔に袍を贈り、其の寒を憫むとあり。沙頭暮黃鶴、鶴の高格に譬へるにあらず、鶴の瘦せたる失侶とに譬へたるなり。失侶亦哀號、失侶の鶴、哀鳴の鶴、共に古詩に在り。

【評論】此の篇、十二句六十字、一二兩句は王居の狀を叙し、三四兩句は吾に對する二人が情の深きを叙し、五六以下は吾と二人とを交錯して叙し、遂に吾に歸宿す、「本集」に自閬州領妻子却赴蜀山一行之詩あり、發閬州の詩あり、閬山歌あり、閬水歌あり、閬州は杜に於て忘る可からざる地なり。唐汝詢の評に、陶去綺靡、獨存清澹、排律中之朗秀者と。是れ字の上の評のみ、其の内容に至りては唐の辨知する所にあらず、此生何太勞、窮愁但有骨、何等の慘、何等の凄、他人文字の上に但塗澤するとは雲泥の相違あるなり。

春歸

苔徑臨江竹。茅簷覆地花。別來頻甲子。歸到忽春華。倚杖看孤石。傾壺就淺沙。遠鷗浮水靜。輕燕受風斜。世路雖多梗。吾生亦有涯。此身醒復醉。乘興卽爲家。

苔徑江に臨む竹、茅簷地を覆ふ花、別來頻りに甲子、歸到忽ち春華、杖に倚りて孤石を看、壺を傾けて淺沙に就く、遠鷗水に浮んで靜に、輕燕風を受け、斜なり、世路梗ぎ多しと雖も、吾生亦涯あり、此の身醒めて復醉ふ、興に乗じて卽ち家と爲す、

【句釋】春歸、春日に蜀の草堂へ歸るなり、廣徳の初とす。苔徑、苔の生じたる徑なり。臨江竹、草堂は浣花溪に臨んで竹を種う。茅簷、かやぶきののき。覆地花、滿地花亦發く。別來、草堂を離れてより。頻甲子、十干の首の甲と十二支の首の子とを合して甲子と言ふ、幾年月と云ふ事に成る。歸到、今日歸到すれば。忽春華、此の華は前句の花とは異なる、春の期節と云ふ意なり。倚杖看孤石、舊時坐せし孤石が尙依然たり。傾壺就淺沙、一壺の酒を傾けつ、淺沙に歩を移す。遠鷗浮水靜、淺沙上に見る所のものは、悠悠たる鷗たり。輕燕受風斜、堤上に見る所のものは翻翻たる輕燕なり、

水上堤上の春景を言ふ。世路、人世の行路。雖多梗、梗は山粉和名「ニレ」と云ふ樹なり、荒木たるを以て「荒レ」「塞グ」「害フ」などと轉用するなり、世路の荒塞多きなり。吾生亦有涯、世は憂ふべきも、考へて見れば、吾生も幾くあるにあらず、涯ある身なり、何ぞ必ずしも憂ふべけんやと、強ひて寛うする意なり。「舊唐書」に、杜の年は記載無きが、「新唐書」には卒年五十九とあり、「莊子」に、吾生は涯有り、而して知は涯無しと。此身醒復醉、此の醒めて復醉ふが爲め飲酒中に死したるなり。乘輿即爲家、杜甫の生地は、「唐書」に記載なきも、祖父審言と父閑との生地を以てすれば、湖北の襄陽なり、然らば此の家と爲す、蜀の浣花溪の草堂は要するに他郷にて故郷にはあらず、何處でも家と爲して興に乗するなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、昔徑より以下四十字は悉く艸堂の景と、時期を叙し、世路以下の二十字、吾が情思を叙す、章法分明なり。吳吳山の評に、遠字浮字靜字極生動、輕字斜字受字極飄逸と。沈歸愚も遠鷗以下の十字を圈破す。形容の妙、古今に獨歩すと謂ふ可し。

江陵望幸

雄都元壯麗 望幸歛威神 地利西通蜀 天文北照秦 風煙含越鳥 舟楫控吳人 未枉周王駕 終期漢武巡 甲兵分聖旨 居守付宗臣 早發雲臺仗 恩波起

涸鱗

雄都元壯麗、望幸歛威神、地利西のかた蜀に通じ、天文北のかた秦を照す、風煙越鳥を含み、舟楫吳人を控く、未だ周王の駕を枉げず、終に漢武の巡を期す、甲兵聖旨を分かち、居守宗臣に付す、早く雲臺の仗を發し、恩波涸鱗を起せ、

【句釋】江陵は湖北省荊州府なり、三國の初、蜀漢に屬し、後、吳に屬す、隋唐に江陵又南都と曰ふ。望幸、廣徳の初、吐蕃入寇す、代宗陝に幸して衛伯玉を以て荆南節度使に拜す、是の時、代宗江陵に幸する議あり、是の時の作とす。雄都は江陵を言ふ、大山を負ひ、長江を控へ、地形の雄、天下に甲たり。元壯麗、此の壯麗は宮闕を言ふにあらず、山河の壯麗を言ふ、「史記」に、以四海爲家、非三壯麗無以重威と。望幸、天子の幸を望むは他にあらず。歛威神で、雄都をして益す威神あらしめんと欲するなり、歛は忽と同じ。地利、「孟子」に天時不如地利の語あり。西通蜀、歸州の山を越ゆれば即ち蜀の夔州府なり。天文、謝靈運の詩に、列宿炳天文とある。北照秦、北は即ち陝西省に當る、秦の咸陽は陝西の西安府なり。風煙、風物煙華なり。含越鳥、鷓鴣の類多し、含は煙の字に對して云ふ。舟楫控吳人、長江を下れば古の吳國なり、秦蜀吳楚與に威神を望んで、

此の地に輻湊せざるは無しとの意なり。未枉周王駕は、「左傳」に、昔し穆王、天下に周行す、將に皆必ず車轍馬跡有らんとす、以て代宗の未だ枉駕せざるを言ふ。終期漢武巡、漢の武帝は天下を巡狩せし人なり、終には代宗の巡狩あるを期す。甲兵は甲冑の兵士。分聖旨、聖旨は天子の旨趣を分別する、是れ武人なり。居守付宗臣、「左傳」に、君行則居守と、天子は行幸するも、留守の政府は宗臣即ち大臣等が守る。早發雲臺仗、仗は器仗、天子行幸には騎兵の歩兵の旗や鋒やと武具が必ず随ふ、雲臺は宮中を云ふ。恩波起涸鱗、恩波をして此の江陵の民に濕はしめんとなり、「莊子」に、車轍の中、鮒魚あり、周之に問うて曰く、我且南吳越の王に遊び、西江の水を激へ、以て子を迎へんとす、可ならんか、鮒魚忿然色を作して曰く、吾斗升の水を得ば活きんのみ、君此を言ひ、早く我を枯魚の肆に索めんには如かず。

【評論】此の篇、十二句六十字、前半は江陵の雄秀なるを説き、後半は天子に對して幸を望む所以を叙し以て結ぶ、悲しむ所あり、喜ぶ所あり、杜の性格を窺ふに餘あり。蔣一葵の評に、中の四句、首尾に應ず、含字控字味ふ可し、後の六句次句に應ず。

奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江圖

沱水中座。岷山赴北堂。白波吹粉壁。青嶂挿彫梁。直訝杉松冷。兼疑菱荇

香。雪雲虛點綴。沙草得微茫。嶺雁隨毫末。川霓飲練光。霏紅洲葢亂。拂黛石蘿長。暗谷非關雨。丹楓不爲霜。秋城立圃外。景物洞庭傍。繪事功殊絕。幽襟興激昂。從來謝太傅。丘壑道難忘。

沱水中座に臨み、岷山北堂に赴く、白波粉壁を吹き、青嶂彫梁に挿む、直に訝る杉松の冷かと、兼ねて疑ふ菱荇の香かと、雪雲虚しく點綴し、沙草得て微茫、嶺雁毫末に隨ひ、川霓練光を飲む、霏紅洲葢亂れ、拂黛石蘿長し、暗谷雨に關するにあらず、丹楓霜の爲めならず、秋城立圃の外、景物洞庭の傍、繪事功殊絶、幽襟興激昂す、從來謝太傅、丘壑道忘れ難し、

【句釋】奉觀は字の如し。嚴鄭公は杜の恩人なり、嚴武を云ふ。廳事は官省を言ふ、縣廳なり、嚴武は蜀郡の知事なり、受事察訟於是とありて、聽の上に廣を加ふに至る。岷山沱江圖、何人が畫きしかは判然せず、武は收藏する人なり。沱水は四川省成都府新繁縣の西北なり、源は岷江に出づ、「禹貢」に、岷山導江、東別爲沱と。臨中座、沱水が座の真中に臨むが如し。岷山は成都府の茂州の南、蜀の山江に近き者、通じて岷山と爲す、連峰接岫、重疊險阻不詳、遠近「書經」にあり。赴北堂、北堂は廳中の北堂を云ふ、赴く如く疑はしむるなり。白波吹粉壁、沱水の線の工合が廳中の

粉壁へ吹き灑ぐが如し。青嶂挿彫梁、岷山の翠色が、應中の彫梁に挿むが如し。直訝、今日所謂直覺の感、訝かしく思ふ。杉松冷、冷は松や杉の氣を言ふ、兼は杉松冷を訝かる上にとなり。疑菱苳香、菱苳は水草、菱は和名「ヒシ」苳は和名「アサザ」香氣あるか、疑はしむ。雲雪は雪と雲にはあらず、同雲を言ふ。虚は空と殊なる、「チギレチギレ」の意。點綴、西に一點、北に一綴なり。沙草得微茫、微茫は微細なり、沙草の微細に至るまで畫き得たるなり。嶺雁隨毫末、筆尖の細なるを言ふ、毫末は眇小なり、嶺上を過ぐる雁は小なり。川霓飲練光、「夢溪筆談」に、虹能く溪に入りて水を飲む、霓の兩頭皆湖中に垂るゝを言ふ、練光は畫絹の名にも通するなり。霏紅は霓の紅色を霏すなり、洲葦亂、江端の草が散亂する貌、拂黛石蘿長、山に挂る石蘿翠色が拂亂する貌。暗谷非關雨、雨が下りし爲めに谷が暗きにあらず、深谷なれば暗なり。丹楓不爲霜、霜が下りし爲めに楓が丹きにあらず、深山なればなり。秋城玄圃外、崑崙の三角其の正面を玄圃と云ふ。景物洞庭傍、旋水の景物は洞庭の傍に在りて見る如く疑ふ。繪事は「論語」に繪事後素とある。功殊絶、畫の傑製なるを言ふ。幽襟は杜が情懷なり。興激昂、非常に興味の昂るを言ふ。從來は「モトヨリ」。謝太傅は晉の謝靈運なり、以て嚴鄭公に譬へる。丘壑道難忘、靈運の詩に未嘗廢丘壑とあるに依つて之を用ふ、丘壑の道を忘れざるものは、一面に於て人世の欲を忘れるなり。

【評論】 此の篇、二十句、百字、洵水と岷山とを交錯して、其の畫の巧妙なるを叙し盡くし、繪事

功殊絶の五字特に之を稱し、幽襟以下三句、杜が嚴に對する情を叙ぶ、眞に大手筆、一有りて二無し、杜が畫に對する眼の高き餘人の及ぶ所にあらざる事、畫馬圖引や山水圖歌や雙松圖歌にて知るを得、「詩醇」の評に、甫心繫國家、往往因懸闌入、今爲嚴武題畫而不及此、志將遠引、故語不旁及、其詩精嚴流麗、點睛在虚字、讀者宜細玩之。仇兆鰲の曰く、昔人論此詩、爲宋人咏畫之祖、但其分寫山水、亦本下謝靈運過始寧堡詩、杜用以咏畫、更較詳細精密耳と。虚字の箇處に○を付し其の翰淹の妙を知らしむ。

行次昭陵

舊俗疲庸主。羣雄問獨夫。讖歸龍鳳質。威定虎狼都。天屬尊堯典。神功協禹謨。風雲隨絶足。日月繼高衢。文物多師古。朝廷半老儒。直詞寧戮辱。賢路不崎嶇。往者災猶降。蒼生喘未蘇。指揮安率土。盪滌撫洪鑪。壯士悲陵邑。幽人拜鼎湖。玉衣晨自舉。鐵馬汗常趨。松柏瞻虚殿。塵沙立暝途。寂寥開國日。流恨

滿山隅

舊俗庸主に疲れ、羣雄獨夫を問ふ、讖は歸す龍鳳の質、威は定む虎狼の都、天屬堯典尊く、神功禹謨に協ふ、風雲絶足に隨ひ、日月高衢に繼ぐ、文物多

古を師とし、朝廷半老儒、直詞寧ぞ戮辱せん、賢路崎嶇ならず、往者災猶
ほ降り、蒼生喘未だ蘇せず、指揮率土を安じ、盪滌洪鑪を撫す、壯士陵邑を
悲しみ、幽人鼎湖を拜す、玉衣晨自ら擧げ、鐵馬汗して常に趨る、松柏虚殿
を瞻、塵沙暝途に立つ、寂寥たり開國の日、流恨山隅に滿つ、

【句釋】 行次は天寶五載天下に詔して一藝に通ずる者は京師に詣らしむ、公東都より西歸詔に
應ず、故に道、昭陵を経過すと、「本集」にあり。舊俗、唐以前の人民を言ふ。疲は疲勞に堪へざる
なり。庸主は凡庸の主、總じては近代の君主、別しては隋の煬帝。群雄は李密や建徳を言ふ。問獨
夫、「訓解」に獨夫は東昏侯なりと、大に誤る、是も煬帝なり、群雄が煬帝の罪を問ふなり。識は今
日の辭で豫言なり、太宗四歳の時、書生あり之を見て曰く、龍鳳の姿、天日の表、其の年幾んど冠
にして必ず能く濟世安民せんと。歸龍鳳質、天下は他の羣雄に歸せずして、遂に太宗に歸したり。
威定、武威を以て平定する。虎狼都、「史記」に、蘇秦曰く、秦は虎狼の國なり、太宗の天下を定む
る、先づ關中に據るを以てなり、關中は蘇秦の所謂、虎狼の國都なり。天屬は天然の附屬、高祖太
宗の父子なり。尊は尊敬なり、尊崇なり。堯典、高祖即位、太宗に禪る、堯典を尊ぶ所以。神功は
神の如き太宗の功勳なり。協禹謨、太宗の功徳、頌すべきこと禹の如し、故に禹謨に協ふと曰ふ。

風雲は「易」の雲從龍、風從虎とある、高祖に從つて起てる李靖等を云ふ。隨は隨從なり。絶足は
駿馬より來る語、乃ち君臣の際なり。日月、日は高祖、月は太宗なり。繼高衢、太宗が高祖より位
を繼ぎたるを言ふ、乃ち父子の際なり。文物多師古、乃ち古の善するものを擇んで師と爲す、「史
記」に、淳于越が曰く、事、古を師とせずんば、能く長久するものを聞かずと。朝廷は今日の語で
見れば政府に當る。半老儒、房玄齡の如き、魏徵の如き、政治家にして儒を兼ねる者、十八學士是
れなり。直詞は直諫なり、後漢鄧后紀に名賢戮辱とある。寧戮辱、諫を容れて戮辱せず、太宗の寬
量を言ふ。賢路不崎嶇、賢者を用ふるの路なり、決して崎嶇ならず、野に遺賢無き意、賢者を延く
なり。往者は陳隋時代を指す。災猶降、苛酷の租なぞ徵集する災の大なるもの、隋末には大水餓殍
野に滿つ。蒼生は人民なり。喘は息なり。未蘇、息つく間も無く勞苦する。指揮は太宗の指揮なり。
安率土、隅から隅まで安撫する、善政を敷くなり。盪滌は惡しき物を盪滌し去る。撫洪鑪、天下を
陶成すること洪鑪の如くなるを謂ふ。壯士、志士を謂ふ。太宗没後の勸王家の徒を言ふ。悲陵邑、
陵廟の寂寥たるを悲しむ、邑は付屬字にて重きを置かず。幽人は杜自身の謂なり。拜鼎湖「封禪書」
に、黃帝首山の銅を採り、鼎を荆山の下に鑄る、鼎既に成る、龍あり、胡髯を垂れて來り迎ふ、黃
帝上騎す、羣臣後宮從ひ上る者七十餘人、故に後世、因つて其の處を名けて鼎湖と曰ふ、今假り
て太宗の廟に用ふるなり。玉衣晨自擧は、陵墓に謁して其の神靈の在る如きを言ふ、「漢武故事」に、

高皇殿中の御衣篋中より出て殿上に舞ふと。鐵馬汗常趨、是れ當時の太宗在すか如きを言ふ、太宗が兄の建成と弟の玄霸、元吉の類とは異なり、馬に汗して戰場を往來したる事を叙す、子の高宗が先帝が愛する馬六匹の石像を造り昭陵闕下に置きし事も「唐會要」に出づ。松柏、天子の陵は、松と柏とを植うるなり。瞻は瞻仰なり。虚殿は人の無き殿。塵沙は陵前の地を言ふ。立隕途、松柏森森たる處即ち隕途なり、立つ者は杜なり。寂寥開國日、開國の日即ち武徳年の時を思へば今日は寂寥と爲るとの意なり。流恨滿山隅、流水恨むが如く山隅に滿つる嗚咽の音を言ふ。

【評論】此の篇、二十四句、百二十字、舊俗の首句より、盪滌に至る十六句は太宗が國を起して蒼生を安撫せし功を叙し、壯士より以下の八句は正しく昭陵に謁せる感想を叙し、古を嘆じて今を嗟するに結ぶ、此の詩は天寶五載の作とす、玄宗が楊國忠や李林甫を用ひて政治を執らしめ、民生を安んぜざる時なり、故に往者災猶降、蒼生喘未蘇は隋末の亂を言ふにあらず、時の失政を言ふのが本意なり、隋末と見て以て今の時を言ふと見て亦可なり、故に編次の順序としては「重次昭陵」を「詩醇」の如く此の次へ置かざる可らず、「詩醇」の評を譯して掲げん、氣象鬼峩、規模宏遠、華茂典重の中、沈雄悲壯の概あり、陸游云ふ所、清廟生民伯仲の間なり、貞觀の治、三代以後僅かに見る所、其の政を行ひ、人を用ひ、諫を納れ、賢を進む、亦後代及ぶ所にあらず、文物四句能く其の要を擧ぐ、特に此のみならず、明皇精を勵み治を爲す、開元政化上太宗に媲ぶれば盈を持し泰を

保つ能はず、宵小を任用し、聰明を蔽塞し、以て天寶禍亂を致す、向き以太の靈にあらずんば、則ち唐室墟なり、流離之餘、徘徊瞻眺時を撫し、往を傷み、流恨山隅開國の盛んを想ふ、亂を致す所以の故、言外に隱然たり、深廣端無く、波瀾萬狀今古詩人絶えて倫比無し、甫、房相を祭る文に云ふ、培塿滿地、崑崙無羣、取つて以て此の篇を評すべしと。

冬日洛城北謁玄元皇帝廟

配極玄都闕。憑高禁籟長。守祧嚴具禮。掌節鎮非常。碧瓦初寒外。金莖一氣傍。山河扶繡戶。日月近彫梁。仙李盤根大。猗蘭奕葉光。世家遺舊史。道德付今王。畫手看前輩。吳生遠擅場。森羅移地軸。妙絕動宮牆。五聖聯龍袞。千官列雁行。冕旒俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。紅梨迴得霜。風箏吹玉柱。露井凍銀床。身退卑周室。經傳拱漢皇。谷神如不死。養拙更何鄉。

極に配して玄都闕す、高きに憑りて禁籟長し、守祧具禮を嚴にし、掌節非常を鎮す、碧瓦初寒の外、金莖一氣の傍、山河繡戸を扶け、日月彫梁に近し、仙李盤根大に、猗蘭奕葉光る、世家舊史に遺し、道德今王に付す、畫手前輩

を看るに、吳生遠く擅場、森羅地軸を移し、妙絶宮牆を動かす、五聖龍袞を
聯ね、千官雁行に列す、冕旒俱に秀發、旌旆盡な飛揚す、翠柏深く景を留め
紅梨迴に霜を得、風箏玉桂を吹き、露井銀床凍る、身退いて周室に卑く、經
傳へて漢皇を拱せしむ、谷神如し死せずんば、養拙更に何の郷ぞ、

【句釋】 冬日洛城北謁玄元皇帝廟、開元二十九年、兩京及諸州に詔して各玄元皇帝の廟一所
を置く、東都即ち河南の河南府を紫微宮と爲す、此詩是れなり、廟の下、一本、有る吳道子畫五聖圖
の八字あり、五聖は高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗なり、玄元皇帝は老子なり、天寶の初、老子丹
鳳門の通衢に降り、靈符を賜うて尹喜が故宅に在りと告ぐ、上、使を遣り之を得、乃ち玄元廟を天
寧坊に置き、聖祖大道玄元皇帝と追尊せしなり、老子も李姓、唐亦李姓、尊崇する所以、配極、老
子を北極に配當する。玄都は仙人の住處、以て今の廟に譬ふ、闕は閉なり、閉ぢて人を入れざるな
り。憑高は山に憑りて在る。禁籙は禁苑の籙、竹を折り、以て繩を懸け、之を連ね、人の往來する
能はざらしむ。守祧、「周禮」に、分官守祧とあり、祧は廟なり、遠祖を遷すの廟、諸侯始祖の廟
を以て祧と爲す。嚴具禮、禮器禮法を嚴格に爲すなり。掌節は「周禮」に、掌節は邦節を守る、凡
天下と通達する者必ず節あり以て之を傳輔す、注に節は信なりと。鎮非常、此に出入する者符を以

て信とし、它盜の出入と非常とに備ふる也。碧瓦は廟の屋上。初寒外、初冬の霜なぞ降り瓦が碧色
を表はす。金莖は銅柱なり。一氣傍、銅柱が直立して紫の一氣がある、外と旁とは深き意味無し。
山河、此の郡中の山河なり。扶繡戸、彼の山河ありて此の廟の壯麗を扶ける。日月近彫梁、廟が高
地に有るを以て言ふ、眞に夸大の語とす、此の二語は兎嶺の東照祠を觀るが如し。仙李、仙家の李
樹、以て老子の李姓と歴代の唐室を表はす。盤根大、七十二年間も母胎に居り、李樹の下に左腋を
剖いて生ると云ふが老子なり、釋迦が母の右胸より無憂樹下に於て出誕すとある、佛説より偽造し
たるものが老子なり。猗蘭、猗猗たる芝蘭なり、以て唐室に譬ふ。奕葉光、累世光輝を失墜せざる
を言ふ、五聖を譬へたるなり。世家、「史記」に、老子不_レ作_二世家_一置_二於_レ列傳_一とあるに依つて、遺舊
史と述べ來る、實は唐室の始祖なるが、史官が之を遺漏したるなりとの意。道德付今王、玄宗を今
王と言ふ、老子の注解を著はせるが爲めなり。畫手看前輩、前輩も何程の事やあらんと心中に思へ
ども。吳生遠擅場、吳生は「歷代名畫記」に、唐の吳道子、陽翟の人、畫を攻め、丹青の妙、一時
に擅にすと、「東京賦」に、利觜長距、終得_二擅場_一と、第一一人之に超ゆる者は無し、森羅は森の如く
羅の如くと云ふ意味、草木禽獸皆此の中に收む。移地軸、世界も吳生の筆の中に悉く移されたるな
り。妙絶は絶妙の技術。動宮牆、宮牆が搖動する如く見える。五聖聯龍袞、「禮記」に、衣裳九章、
一を龍と曰ふ、天子の龍は一升一降、龍首卷く如く然り、故に之を袞と謂ふ、袞は「タツヲエガケ

ル衣」と訓したるは可し。千官列雁行、羣臣措紳の行列、雁行の如く次第あるを言ふ。冕旒、五聖頭上の冠。俱秀發、筆致の重巧を言ふ。旌旆、五聖の周圍に翻る。盡飛揚、翻翻として筆致の輕妙を言ふ。翠柏深留景、廟前の描寫なり、翠色深き柏が、日影を留める。紅梨迴得霜、梨花は白色なれども霜を得るが故に其の葉の紅と爲るを言ふ、迴の字深の字に對し工夫の極なり。風箏吹玉柱、風箏は檐鈴を言ふ、箏を制し、之を風際に挂く、風至るときは鳴り、殿閣檐稜の間に其音を聞く、露井は露地の井。凍銀床、此の銀床を井欄説と、輓轆架の説と二説あり、恐くは輓轆架の凍るならん。身退は「老子」に、功成名遂身退、天之道也とあり。卑周室、老子の生前は周の藏室の吏なれば、判任官で身分卑きなり。經傳、老子の身後は道德經を傳ふるを以て身分貴きなり。拱は「コマヌク」と訓じて又手するなり、佛語で言へば合掌するなり。漢皇に合掌させたるなり、漢の文帝老子の術を崇尚し、嘗て河上丈人の經を傳ふ、生前は周室の小吏、身後は帝王の大師と爲る。谷神は靈魂の意。如は若なり。不死「老子」に谷神不死、是謂玄牝と、今老子の語を用ひ來りて、反問する、不死の上に言の字を加へて「死せずト言ハバ」として見よ。養拙更何郷、「老子」説く所は恬澹に在り、養拙に在り、功名にあらず、富貴にあらず、然らば、其の死せざる谷神は拙を養うて今何處の郷に在らず、此の壯麗の殿閣中なるや、果して何の郷ぞやと反問する。

【評論】此の篇、二十八句、百八十字、配極より以下十二句は廟の模様を叙し、畫手より以下十二

句は吳生の妙手を稱し、身退より以下の四句は老子の身分を叙し、之に對して吾思想を以て反問を爲し、老子の老子たる所以は、壯麗の殿閣なぞ眼中に無き人なるを説き、暗に諷意を含む、章法分明なりと雖も、其の變化自在なり、吳生の畫聖に對して、此は詩聖の本領を發揮したる者なり。詩醇の評に、鉅麗冠冕、得三頌揚之體、擬三諸清廟明堂、其氣象似之、唐人崇祀老子、專屬三不經、貽三譏千古、甫爲三當時之臣、推崇固應、如レ此、其典重中帶三飄逸、精工中有三排宕、則大手異レ人也。李因篤が曰く、此篇乃公開手長律、鳳羽初舒、九苞煥采、宜其雄視一代也と。浦起龍が曰く、典重高華、據レ事直書、不參三議論、純是頌體、錢箋語語指斥意、非レ不善也、但學者不三善會レ之、偏三於譏刺一邊、看去則失レ之遠矣と。浦が評尤も能く少陵の心を得たるものなり。

聖善閣送裴迪入京

李頎

雪華滿高閣。苔色上勾欄。藥草空塔靜。梧桐返照寒。清吟可愈疾。攜手暫同歡。墜葉和金磬。饑鳥鳴露盤。伊流惜東別。灞水向西看。舊託含香署。雲霄何足難。

雪華高閣に滿つ、苔色勾欄に上る、藥草空塔靜かに、梧桐返照寒し、清吟疾を愈す可し、攜手暫く同歡す、墜葉金磬に和し、饑鳥露盤に鳴く、伊流東に

別るゝを惜み、灞水西に向つて看る 舊含香の署に託す、雲霄何ぞ難んずるに足らん、

【句釋】李頎の傳は前卷に出せり。聖善閣は洛陽の寺中に在り、朝廷母后の爲めに建つる所の説信に近し。送裴迪は關中の人、王維等と倡和せし人。入京、長安に入を送るなり。雪華滿高閣、雪後に裴迪が京に入るなり、離別する聖善閣には雪華玲瓏なり。苔色、雪滿と上にある、然るに下に苔色とある、雪滿の中に苔の見える筈なし、屋下の庭地なれば支障あらず。上勾欄、聖善閣の勾欄は曲欄なり。藥草は支那の寺院に植うるもの多し。空塔靜、冬なるを以て草も枯たる故、何となく階も靜寂なり。桐梧返照寒、夏日の梧桐なれば返照は寒からず、冬なるが故、梧桐に當つて返照の寒きを覺ゆ。清吟は裴迪が善詩人なればなり。可愈疾、魏文帝典論に、陳琳、檄草を作り、太祖に呈す、太祖、先より頭風に苦しむ、是の日疾發る、臥して琳が作る所を讀む、翕然として起つて曰く此れ我病を愈すと。攜手暫同歡、攜手の二字は友人より外通用せざる語と知るべし、「毛詩」の攜手同行、是れ友人と同行なり。墜葉和金磬、葉の落つる音が寺で叩く金磬の音と相和するなり、磬は樂器、石磬あり、銅磬あり、金磬あり、寺に缺く可らざる具とす。饑鳥は雪後粒無きが故。鳴露盤、此の露盤は武帝の承露盤の事にはあらず、塔上九輪を承くる臺を露盤と云ふ、饑鳥が此の露盤上に鳴くなり。伊流、洛水の南を伊水と曰ふ、源は河南府に出づ、流れて洛陽の偃師を経て洛に入

る。惜東別、洛陽に於て別るゝを言ふ。灞水は商州の上洛縣に出で北流して渭に入る。向西看、行いて西京に向ふを言ふ、乃ち洛陽と長安とを二句に述ぶ。舊は昔年なり。託は裴迪が託す、含香署は尚書省を言ふ、尚書郎は雞舌香を含んで事を奏す、漢の侍中刀存が年老口臭し、天子雞舌香を出して、之を含ましむ、遂に故事と爲す、裴は尚書省の役人なりしなり。雲霄は裴が高位に昇る事を言ふ。何足難、自ら求むる念あらば取る事は易易たるなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、雪華より以下の四句は景を叙し、青吟の二句情を叙し、墜葉の二句亦景を叙し、伊流の二句は別情を叙し、舊託の二句は裴の事を叙し以て結ぶ。鍾惺曰く、清骨自在、雅澹足レ貴と、又曰く、空塔貼レ靜字、返照接レ寒字、俱に妙と。

早秋與諸子登虢州西亭觀眺

岑參

亭高出鳥外。客到與雲齊。樹點千家小。天圍萬嶺低。殘虹挂陝北。急雨過關西。酒榼緣青壁。瓜田傍綠溪。微官何足道。愛客且相攜。唯有鄉園處。依依望不迷。

亭高うして鳥外に出で、客到りて雲と齊し、樹點じて千家小に、天圍んで萬嶺低し、殘虹陝北に挂り、急雨關西を過ぐ、酒榼青壁に縁り、瓜田綠溪に傍

ふ、微官何ぞ道ふに足らん、愛客且つ相攜ふ、唯郷園の處有り、依依として望迷はず、

【句釋】岑參の傳は前卷に出せり。早秋、七月なり。與諸子登虢州、河南府の陝州は周の虢州なり。西亭は城樓中の西亭なり。觀眺は觀望眺目する。亭高、亭の高きは高邱に在ればなり。出鳥外は飛鳥は低きに在るを謂ふ。客到與雲齊、客が雲の如く多く到ると注したる本あり、今は高處に在るが故に雲と齊しと見る。樹點千家小、城中の人家を下瞰したる實狀を言ふ。天圍萬嶺低、東西南北を周觀したる實狀を言ふ。殘虹挂陝北、陝州の北に當つて霓虹の挂るを見る。急雨過關西、函谷舊關の西に當つて急雨の過ぎるを見る。以上二句は共に遠景を言ふ。酒榼綠青壁、酒榼即ち酒壺を具へ山の青壁に縁つて飲む、亭が青壁に縁つてあること知る可し。瓜田傍綠溪、瓜を植る田が綠溪に傍うてある、以上二句は共に知友を言ふ。微官は小官、知事は小官にあらざるも、自身から言ふなれば微官と言ふ。何足道、貴とも賤とも道ふ價は無しとの意、愛客、此の亭に來る畢竟自身主人公なれば、他を客と言ふ。且相攜、此の中に酒を飲み、詩を賦することなり。唯有郷園處、岑の郷園は河南の南陽府なり、陝州の鄰國なるを以て。依依は「ボンヤリ」の意。望不迷、情に忘れざるが故に望亦迷はざるなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、亭高より以下瓜田に至る八句は、悉く西亭の景、微官以下四句は

情を叙す、慈恩寺の浮圖に登る五古と同一の意境なり、並せ讀むべき詩なり。

清明宴司勳劉郎中別業

祖詠

田家復近臣、行樂不違親。霽日園林好、清明煙火新。以文常會友、惟德自成鄰。池照窗陰晚、杯香藥味春。欄前花覆地、竹外鳥窺人。何必桃源裏、深居作

隱淪。

田家復近臣、行樂親に違はず、霽日園林好、清明煙火新なり、文を以て常に友を會し、惟德自ら隣を成す、池は照す窗陰の晚、杯は香ばし藥味の春、欄前花地を覆ひ、竹外鳥人を窺ふ、何ぞ必ずしも桃源の裏、深居隱淪と作るのみならん、

【句釋】祖詠の傳は前卷に出せり。清明は春分後十五日より、此の三日前、人家柳を檐前に挿み、上下等しく祝ふを吳中の風俗とす。司勳は官名、日本の賞勳局の如き役。劉は姓なり。郎中は司勳郎中、從五品なり、劉の字を真中に置き以て尊稱とす。別業は別莊なり。田家、劉が家即ち別業は田野郊外に在るなり。復近臣、天子に近き臣、劉其の人は、田に住するも貴し。行樂不違親、後漢の郭林宗が隱不違親と、隱棲しても親友と共に行樂することは違はずとなり、「論語」雍也第六に、

三月仁に違はずとあり。霽日園林好、春霽は人の氣も爽、園林好くば人の氣も好し。清明煙火新、清明の日榆柳の火を取つて以て近臣に賜ふと、清明前三日を寒食と稱し、家家に火を絶つ、清明の日に到りて、點ず、之を新火と言ふ。以文常會友は、「論語」顏淵第十二に、君子文を以て友を會し、友を以て仁を輔くと。惟德自成鄰、「論語」里仁第四に、徳孤ならず必ず鄰ありと。池照窗陰晚、晚日に日光と水光と相映するなり、故に照と言ふ。杯香藥味春、芍藥の根を製したる者を酒に混じて飲む、一種の咒なり。欄前花覆地は、第三句の園林好に對應する、花地を覆うて奇麗なり、是を以て園林逾よ好し。竹外鳥窺人は、第六句の自成鄰に對應する、鳥も人を窺ふ、徳の鄰を成す所以なり。何必桃源裏、秦時の人は亂を避けて、武陵桃源に一邨を作る、今此の園林好を見る、何ぞ桃源に入るを用ひん。深居作隱淪、桃源に生活せし人は皆隱淪なり、桃源に避けずして、此處に隱淪と作る。

【評論】此の篇、十二句六十字、田家より以下四句は別業の即目、以文以下の二句は劉が品性、池照以下の四句は園林の即目、何必の二句は其の情を叙す。殷璠の評に、祖詠が詩、剪刻省靜、思を用ふることも尤も苦しむ、氣高からずと雖も、調頗る俗を凌ぐ、霽日園林好、清明煙火新の如きは亦稱して才子と爲すべし。

奉使巡檢兩京路種菓樹事畢入秦因詠歌 鄭審

聖德周天壤。韶華滿帝畿。九重承渙汗。千里樹芳菲。陝塞餘陰薄。關河舊色

微。發生和氣動。封植衆心歸。春露條應弱。秋霜菓定肥。影移行子蓋。香撲使臣衣。入徑迷馳道。分行接禁闈。何當扈仙蹕。攀折奉恩輝。

聖德天壤に周く、韶華帝畿に滿つ、九重渙汗を承け、千里芳菲を樹つ、陝塞餘陰薄く、關河舊色微なり、發生和氣動き、封植衆心歸す、春露條應に弱なるべし、秋霜菓定んで肥えん、影は移行子の蓋、香は撲つ使臣の衣、徑に入りて馳道に迷ひ、行を分つて禁闈に接す、何か當に仙蹕に扈して、攀折恩輝を奉ずべき、

【略傳】鄭審は開元の時の人、大歴の初、祕書監と爲る、三年にして出でて江陵の少尹と爲る。

【句釋】奉使、宮廷の命令を奉ず。巡檢、巡遊檢察より。兩京路は長安と洛陽となり。種菓樹、實を持つ樹を果と言ふ、李樹や梅樹や、杏、桃、栗の類なり。事畢入秦、陝西の西安府に入る。因詠歌、此の詩を歌出せし也、唐の玄宗開元二十八年春正月、詔して兩京路及び城中苑内に皆果樹を種う。聖德、玄宗の徳。周天壤、天地に周遍する。韶華、韶光春華なり。滿帝畿、帝城を中心として、其の鄰國を言ふ。九重は禁中なり。承渙汗、承は侍臣が承ける、渙は水盛んなる貌、汗は「アセ」「易渙卦」に、渙汗其大號と、其の號令を散じて汗の出でて反らざるが如きを謂ふ、綸言と

渙汗くわんかんと同義。千里、兩京りゅうけいの間の路程、樹じゆは植ちゆううるなり。芳菲ほうひは桃ももや杏あんの類るみを言いふ。陝塞せんさいは陝西せんせいの塞さい上じやう。餘陰薄じやうは猶なほほ春寒しゆんかんなるを言いふ。關河かんがは函谷關かんこくかん河がなり。舊色きうしき微ゐ、十二月じふにがつの色いろ、即すなはち臘色らふしきの減少げんじゆうしたるを言いふ。發生はつせいは自然じぜんに發生はつせいする時節じせつを言いふ。和氣動わきどう、春はるの和氣わきが生動せいどうする、植ちゆうるし木きも根ねが就つくなり。封植ふうちゆうは樹根じゆこんへ土つちを盛もる事を言いふ。衆心歸じゆんしんきは人民じんみんの心こころ欣よろこぶを言いふ。春露しゆんろ條應弱じゆうてうじやく、條じゆうは枝條しじゆう、根こんが疲つかれたるゆゑ嫩弱なんじやくなるなり。秋霜しゆうしやう菓定肥くわていひ、秋あきに至いたり霜しもを経へば實み自ら肥こえん。影じゆうえいは樹影じゆうえい。移し行ぎ子こ蓋がい、街路がいろうを往來わうらいする者の蓋が、即すなはち「カサ」なり。香かう撲ま使し臣衣しんい、巡檢じゆんけんする役人やくにんの衣ころもに花香はなかうが撲うつ、恩おん香かうも亦また兼かねるなり。入徑にゅうけい、花徑はなけいに入いるときは。迷馳道みちだう、馳道ちだうは御幸みゆきの街道かんだうを言いふ、花はなが満みつる故ゆゑに馳道ちだうと小徑こみちとを辨べんせざるなり。分行ぶんぎやう、東ひがしと西にしとを分わかつ。接禁闈せつきんねい、路みちの兩側りやうがはに連つなりて、宮門きゆうもんまで接せつ續ぞくするなり。何當なにたじは他日たじつの事を言いふ。扈こしやうは扈從こしやうなり。仙蹕せんしやくは天子てんしの車くるまを言いふ。攀折ぱんせつ奉恩輝ほうおんき、栽培さいはい宜よろしきを得え、枯死こしせず、攀折ぱんせつする如ごとく生育せいよくして以もつて恩輝おんきを奉ほうせんとなり。

【評論】此の篇、十六句、八十字、起句より結句に至る、聖徳を簡短に叙し、多く果樹の事を叙し、結末二句僅かに其情を叙す、明の譚元春の評に、切而不浮、轉而不滯と。切にして浮ならざるが、作詩上の要訣と爲す。

行營酬呂侍御

劉長卿

不敢淮南臥。來趨漢將營。受辭瞻左鉞。扶疾拜前旌。井稅鶉衣樂。壺漿鶴髮迎。水歸餘斷岸。烽至掩孤城。晚日當千騎。秋風合五兵。孔璋才素健。早晚檄書成。

敢あへて淮南わいなんに臥ふせず、來きたりて漢將かんしやうの營えいに趨はしる、辭じを受うけて左鉞さゑつを瞻あみ、疾やまひを扶たすけて前旌ぜんせいを拜はいす、井稅せいぜい鶉衣じゆんい樂たのしみ、壺漿こしやう鶴髮かくはつ迎むかふ、水歸みづかへりて斷岸だんがん餘あまり、烽ほう至いたりて孤城こじやうを掩おほふ、晚日ばんじつ千騎せんきに當あたり、秋風しゆうふう五兵ごへいに合あつ、孔璋こうしやう才素健さいそけんなり、早晚いづつか檄書げきしよ成ならん、

【句釋】劉長卿の傳は前卷に出せり。行營は行軍中の陣營を言ふ、呂は姓。侍御は官名、劉長卿の自注に、時に尙書、罪を襄陽に問ふ、軍漢東の境上に次る、侍御、舟賊境に鄰り、復水火有り征稅に迫るを以て、詩以て喩さると、劉と呂は同じく幕府に在り、劉が隨州の知縣たる時の作ならんと。不敢淮南臥、淮水は南陽の平氏縣の胎簪山より出づ、南流するもの汝寧を徑て隨州に至る、安閑として任地に臥せずと自ら謂ふ。來趨漢將營、行營の指揮官は尙書なり、誰なるやは分明ならず。受辭は辭令書を受くるなり。瞻左鉞、「書經」に、王左仗黃鉞とある、大將の風采を瞻るなり。扶疾は劉が持病を自ら扶けて。拜前旌、行營の前旌を拜する。井稅は田租なり、田租を軽くするが故

に。鶉衣、即ち貧民が樂しむなり、貧者の衣服は敝れて鶉の如くなればなり。壺漿は「孟子」の語なり、王師を慰問の爲め壺漿を持して、鶴髮、即ち老人が迎へるなり。水歸は水が漲るゆゑ一方へ流奔せざるなり。餘斷岸、漲水の痕を言ふ。烽至は兵火が侵し來るなり。掩弧城、弧城を掩ふは襲ふなり。晚日當千騎は、下の秋風合五兵と倒裝句法なる詩の作法、「五兵ハ千騎ニ當リ、晚日秋風合ス」の意なり、千騎は字の如し、五兵は矛戟弓劍戈の五戎なり。孔璋は後漢末の人、陳琳の字なり、今以て呂侍御に譬ふ、曹操の軍參謀と爲りて草檄を掌どる、曹丕が吳質に與ふる書に孔璋書表殊健とあり。才素健、呂の健筆は陳琳に同じとなり。早晚は「イツカ」。檄書成、必ず檄書成る事を豫言する、陳琳が檄書は敵をして感嘆せしめたるなり。

【評論】此の篇、十二句六十字、不敢以下の四句は劉自身の事を叙し、井税の二句百姓の事を叙し、水歸以下四句は軍中の景を叙し、孔璋二句は我が呂に對する情を叙す、章法排律の正體を得、不敢來趨の四字を嘆する者あり、水歸の十字を稱する者あり、所見各異なるも、水歸の十字は千古の名句として異論無し。

送鄭說之歙州謁薛侍御

漂泊來千里。謳歌滿百城。漢家尊太守。魯國重諸生。俗變人難理。江傳水至

清。船經危石住。路入亂山行。老得滄洲趣。春傷白首情。嘗聞馬南郡。門下有

康成。

漂泊千里に來り、謳歌百城に滿つ、漢家太守尊く、魯國諸生重し、俗變じて人理め難く、江は傳ふ水の至清なるを、船は危石を経て住まり、路は亂山に入りて行く、老いて滄洲の趣きを得、春は傷む白首の情、嘗て聞く馬南郡、門下に康成ありしを、

【句釋】劉長卿の傳は前卷に出せり、鄭說は劉が知る諸生ならん。之は赴なり。歙州は江南道に屬す。謁は刺を通ずるなり。薛侍御は歙州の刺史即ち知事ならん。漂泊は「オチブレ」なり、鄭說の事、來千里、餽口を求めて千里に來る。謳歌は漂泊の反對、歡迎せらるゝ事。滿百城、人が祝する歌聲が百城に滿つ、薛侍御の事。漢家は朝廷を言ふ。尊太守、刺史は二千石、高官の部に屬す、薛の事、魯國は孔夫子の生地、叔孫通の傳に魯の諸生を徵して共に朝儀を起す。重諸生、是は鄭の事。俗變、風俗が悪變化する。天寶の戰亂を経てからなり。人難理、薛が一縣を治めるに容易ならぬ事を叙す、江傳は江水の傳流を言ふ、歙州を指す。水至清、政治の清きは水の清き如しと譬へる。船經危石住、鄭が舟行する景。路入亂山行、鄭が陸行する景。老得滄洲趣、俗塵外の趣味を得る事、劉が自身の

志を言ふ。春傷白首情、自分も危石亂山の間を漫遊したき情はあるが、傷しい哉、白首此の老人と爲つて行く能はず。嘗聞馬南郡、後漢書卷九に、馬融字は季長、南郡の太守と爲る、才高く博洽にして世の通儒爲り、諸生を教養す。門下有康成、鄭玄字は康成、馬融に師事す、融召して樓上に見る、玄因つて従つて諸の疑義を質す、問畢つて辭して歸る、融喟然として門人に謂つて曰く、鄭生今去る、吾道東すと、姓鄭なるを以て説に比す。

【評論】此の篇、十二句、六十字、第一は鄭、二三は薛、四は鄭、五六は薛、七八は薛、九十は作者自身、十一十二は鄭の事に歸宿す、景あり情あり、而して字字明快、畫の及ばざる所、尤も誦すべきを覺ゆ。胡元瑞が、七言律中、唐無過文房と評してあるが、余謂ふ七言律のみならず、五排も亦以て中唐に冠冕たるべしと。

國譯唐詩選卷四終

國譯唐詩選卷五

七言律

七言律は五言律の變化したるものなり、故に其の選詩の法、五言を先にし、七言を後にする、周弼が「三體唐詩」を選する、七言を先にし、五言を後にす、選法を誤れるものと謂ふ可し。唐以前、便ち漢に於て七言の詩はあり、而かも對仗整正、前後紊れざる底の調を爲すは、唐人を以て祖と爲さざるを得ず、其の作法、五言の上に單に二字を加へたるもの如きは、到底七律の面目は無きなり、拙工の七律は二字を除去し五律と改め以て可なるものあり、其法門を知らざるに由る、七字當に一串して、一字と雖も、泛なるものあるべからず、若し泛なるものあるときは、作家の域に到達せざるものと知る可し、其の法、一二は起、三四は承、五六は轉、七八は結、絶句と毫も異ならず、以て景情を離るべからず、景情を錯綜して變化を此の間に求む、七律の至難と爲す所以なり。

古意

沈佺期

盧家少婦鬱金香。海燕雙棲玳瑁梁。九月寒砧催木葉。十年征戍憶遼陽。白狼

河北音書斷。丹鳳城南秋夜長。誰爲含愁獨不見。更教明月照流黃。
盧家の少婦鬱金香、海燕雙比棲む玳瑁梁、九月寒砧木葉を催し、十年征戍遼陽を憶ふ、白狼河北音書斷え、丹鳳城南秋夜長し、誰が爲めに愁を含んで獨見ず、更に明月に流黃を照さ教ん、

【句釋】沈佺期の傳は前卷に出せり。古意は樂府の題、怨思として婦人が情を叙せし詩三十五曲あり、古意は其の一なり、今其の古に擬して作る。盧家少婦は洛陽に莫愁と云ふ女子あり、十五にして盧姓の家に嫁し、十六にして子を生ましも、其夫戰場に出でて家に返らず、是に於て盧家の富よりも、東家の王姓の賤しきに嫁せざりしを恨むと、梁武帝「河中水歌」の詩意を今用ふ。鬱金香は盧家が富むゆゑに此の貴重の香を備ふ、此の香は大秦國即ち今の羅馬より出づるもの、一本に香を堂に作る、大典師は堂を可とせるが、下の梁字に對するが爲めなり、余も堂が可ならんと思ふ。海燕雙棲、雌雄相和するは鴛鴦のみならず、燕子の如き亦然り。玳瑁は俗の瑤瑁と同じ、玉の名、珽長四寸、天子執之と注すれども、婦女の簪にも用ふ、梁は「堂ノハリ」なり、玳瑁の梁に二匹の燕子が彫刻してあるを言ふ、其れを見て婦が孤棲を恨む。九月は晩秋なり。寒砧、冬の用意に家家砧を打つ。催木葉は木の葉の墜落を催すなり、婦の居る所。十年は十年間なり。征戍、一昔の間も夫は戰地に

在り。憶遼陽、夫の居る處、遼陽は即ち今の遼東なり、從來中國人より指して邊地と稱せられし地。白狼河、山東省の青州に白狼河あり、北流して海に入る。北音書斷、夫の方より消息が斷絶す。丹鳳城は長安を言ふ。南秋夜長、婦の方は秋夜特に長し。誰爲、夫爲と言はずして誰爲と言ふ、妙處此に在り。含愁、夫を思ふが爲め、獨不見、夫は見えざるなり。更は其の上にと言ふ意義を帶ぶ、但愁ふる其の上に、教明月照流黃、明月が目に映じ一層、愁を深うする。流黃は種種の説あり、婦が織る所の黃黑の間色、即ち屏帷の色を言ふ。

【評論】此の篇、少婦が懷夫の情を叙して、其の微に入る。明の楊用修が曰く、嚴滄浪は崔顥が黃鶴樓詩を以て唐人七言律の第一と爲す、近日何仲默、薛君采は沈佺期が此の篇を以て第一と爲す、二詩優劣し易からず。余曰く、崔詩、賦體多く、沈詩比興多し、畫家の法を以て之を論ずるに、沈詩は披麻皴なり、崔詩は大斧劈皴なり。胡元瑞は曰く、起句は千古の驪珠、結語は幾んど蛇足なりと。胡は明月に對し愁を含みし事無き人なり、唯此の蛇足、千載に情思を垂るる蛇足なることを學者知らざる可らず。

龍池篇

龍池躍龍龍已飛、龍德先天天不違、池開天漢分黃道、龍向天門入紫微、

第樓臺多氣色。君王鳧雁有光輝。爲報寰中百川水。來朝此地莫東歸。
龍池龍を躍らして龍已に飛ぶ、龍徳天に先ちて天違はず、池天漢を開いて黄
道を分ち、龍天門に向つて紫微に入る、邸第樓臺氣色多く、君王鳧雁光輝あ
り、爲めに報ず寰中百川の水、此の地に來朝して東歸すること莫かれ、

【句釋】龍池篇、則天武后の時、長安の隆慶坊南の民家、井溢れて大池と成る、彌互數十頃、丞
相王子、第を其の北に列ぬ、氣を望む者言ふ鬱鬱として帝王の氣ありと、神龍五年中宗舟を池上に
汎べて羣臣と宴し、號して龍池と曰ふ、即ち隆慶池なり、後玄宗即位し、隆慶坊の舊邸を以て興慶
宮と爲し龍池樂舞を作る、姚崇佺期等共に樂章十章を作る、此れ第三章に係るものなり。龍池躍龍
龍已飛「易」の乾卦に、初九は潜龍用ふること勿れ、九四は或は躍りて淵に在りと、玄宗を龍に譬
へて飛騰の氣あるを言ふ。龍徳先天天不違「易」の乾卦に、九五は飛龍天に在りと、「易傳」に、天
に先つて天違はず、天に後れて天の時を奉ずと、「杜詩注」に、玄宗蜀に幸する前一夕に及んで龍躍
然として空に互り西南を望んで去ると、徐而菴云ふ龍は其の變化を取る、聖人の徳、變動拘はらず、
六虚に周流す、故に龍徳と稱す、玄宗未だ天子と爲らずして龍見はる則ち是れ天に先だつ、後果し
て天子と爲る、天違はざるなり。池開天漢、「詩經」に、維天有漢と、詩は天漢を開くが如しとなり。

分黃道、「天文志」に日の行く所を黃道を曰ふ、光道も中道も皆同じ、天子の行くべき道を行きつつ
ある意なり。龍向天門入紫微、是れ玄宗が、九五の位に登るを言ふ、紫微宮は天帝の宮、即ち以て天
子に譬ふ。邸第樓臺、龍池の池邊に在る「ヤシキ」を言ふ。多氣色、言語の上に表現出來ぬ瑞氣が
多きなり。君王鳧雁は、上の邸第樓臺と對句を作す、「說苑」に、君之鳧雁食以三菽粟とあり。有光
輝、鳧雁の類に至るまで光輝を蒙ると云ふ意なり、君王鳧雁の四字は極めて陋なり亦病ありと評す
る者あり、上は君王、下は鳧雁の意ならんも、邸第樓臺との對とすれば、縱令陋ならざるも巧妙に
はあらざるなり。爲報、我が彼の爲めに報ずる。寰中は國中なり。百川水、黄河も楊子江も收まる
と知るべし。來朝此地莫東歸、水は此の龍地に來朝し、人は此の玄宗の長安に來朝して東歸する
莫れとなり、「尙書大傳」に、大水小水、東流歸海とある語より來る文字なり、東海は便利上之を
言ふ、西海も北海も皆歸る莫れの意なり。

【評論】此の篇、句句、經語を挾入して以て一篇を爲す、詩法としては絶句の拗體を二首合併した
るもの如し、而して起句は全く古詩の法なり、是の故に律とするより、寧ろ古と爲したる方可な
らんと思ふ。鍾惺の評に、用經語入詩、非化工手段、未易融合と。蔣一葵の評に、五龍四天兩
池、律詩下字重者、唯此爲多、分明故意、是亦一法と。此の評實に我が心を獲たり。

侍宴安樂公主新宅應制

皇家貴主好神仙。別業初開雲漢邊。山出盡如鳴鳳嶺。池成不讓飲龍川。妝樓

翠幌教春住。舞閣金鋪借日懸。敬從乘輿來此地。稱觴獻壽樂鈞天。

皇家の貴主好神仙、別業初て開く雲漢の邊、山出て盡く鳴鳳の嶺の如く、池成

りて譲らず飲龍川、妝樓の翠幌春をして住まらしめ、舞閣の金鋪日を借りて

懸く、乘輿に敬從して此の地に來る、觴を稱げ壽を獻じて鈞天を樂せん、

【句釋】侍宴、字の如し。安樂公主は中宗の女なり、中宗房陵に遷りて、武崇訓に降嫁す、帝位に

復す、光艷天下を動かす、侯王柄臣多く其の門に出づ、太平等の七公主と皆、府を開く、而して主

府の官屬尤も濫なり、臨川公主の宅を奪つて以て第と爲す、天子親幸して近臣を宴すと、是れ「唐

書」公主傳の記する所なり、公主は我邦で言へば、天子生む所の子、内親王を言ふ。皇家は蔡邕が

「述行賦」に、皇家赫として天居彰はるとあり。貴主は公主を言ふ、公主を貴主と稱する語あるが

故に近時我邦の詩人、子爵や伯爵の者を稱して貴爵と書すが、何の理由も無き事なり。好神仙は

公主の風采を言ふ、漢武以來のみならず、支那の貴族は渾て神仙を好む、神仙は陽物が勇健で而か

も長命するからなり、愚物も此に至りて極まれり、蓋し此の句は神仙を好むと訓むにあらず。別業

初開雲漢邊、地形の高處を擇んで建築したるを以て雲漢邊と言ふ、今古異ならぬ馬鹿者なり。山出、

此の山は人造の山、即ち假山なり。盡如鳴鳳嶺、鳳翔府に鳴鳳山あり、公主又昆明池を請うて私第

を爲さんと欲す、許されざるを以て自ら定昆池を鑿して延袤數里、定は之に抗すべきを言ふ。池成

不讓飲龍川、池は定昆なり、飲龍川は渭水を言ふ、嘗て黑龍あり南より出でて渭水を飲む、此の渭

水にも劣らぬ廣池なり。妝樓翠幌は公主の化粧室と見て可なり、仙女が棲む美麗な處を擬して以て

公主の室に譬ふ。敬春住、時節に拘らず李花や桃花が開きてあるが、仙人の住居なれば、公主も亦

同じく春を室内に住めるなり。舞閣金鋪、今日の搢紳が自分の邸内に能樂堂を造りてをるが、是は

公主の能樂堂、又音樂堂なり、金鋪は俗に金隠と言ふもの。借日懸、日は天子なり、父王中宗の力

を借りて以て懸と言ふ、春や日の字は皆仙人の貴ぶ文字なり。敬從の從は平仄兩用にて、「異同辨

には、冬韻宋韻異とあるが、宋韻にも景從と記し、冬韻にも景從と記し、何の異なる所がある、隨

從するを言ふ。乘輿は中宗の駕なり、中宗の駕に沈が侍從する。來此地、字の如し。稱は舉なり、

觴は杯なり。獻壽、祝ふなり。樂鈞天、鈞天を樂しむと言ふにあらず、樂は音樂なり、鈞天の樂を

奏するなり。

【評論】此の如き詩は、俗の俗なるものにて何等の感興も引かざるなり、陽に揚げて隠に抑へたり

紅樓院應制

紅樓疑見白毫光。寺逼宸居福盛唐。支遁愛山情漫切。曇摩泛海路空長。經聲
 夜息聞天語。爐氣晨飄接御香。誰謂此中難可到。自憐深院得徊翔。

紅樓疑見白毫光。寺は宸居に逼りて盛唐を福す。支遁山を愛する情漫に
 切に、曇摩海に泛べる路空く長し。經聲夜息んで天語を聞き、爐氣晨に飄つ
 て御香に接す、誰か謂ふ此の中に入る可き難しと、自ら憐む深院に徊翔を得る
 を、

【句釋】

紅樓院は長安嘉獻觀の中に在り、我邦で宮中に佛を安置する道場ありしが如し、内道場是
 れなり、中宗の神龍元年、義淨三藏に詔し、内道場に於て、「孔雀咒王經」を譯せしむと、「唐書」に
 記載無きも、「佛祖統紀」志盤に記載せり。應制は天子の命に依つて詩を作る。紅樓は院名、蓋し朱色
 を以て四面を塗りしものならん。疑見白毫光、佛陀の面上に有する光を白毫と言ふ、毫は毛即ち髮
 なれば、此の髮が光を有して白珠を放つなり、佛陀が說法するときは、必ず此の毫より白光を放つ
 て東方萬八千土を照すと云ふ、佛像を院に安置することを言ふ。寺逼宸居、天子の居と接近して在
 る寺なり。福盛唐、佛の福は白毫に包むとあるより、此の福字が出でしより、唐の宗室を幸福する

を言ふ。支遁は晉の僧、剡東の岬山を愛して深公に就いて之を買はんとす、深公笑つて曰く、未だ
 巢由が山を買うて隠れしを聞かすと。愛山情漫切、此の支公と云ふ坊主は大金持でありしかば、己
 が煩惱の爲めに山が買ひ度て我慢が出来ざるなり、布施成金の坊主なり。曇摩は印度の高僧、曇摩
 迦羅を略稱す、魏の嘉平二年に洛陽に至り、諸の大乘經典、殊に律部を多く翻譯したる大高僧
 なり、達磨と注したる本多し、一笑すべし。泛海路空長、漫の字と空の字、工夫の存する所、此の
 二師は折角骨折りしが不幸にも宸居に逼らず、内道場の講主と爲らざりしと嘲笑するなり。經聲夜
 息、紅樓院の坊主が天子の爲め祈禱する經聲が息みしなり。聞天語、天子がイヤ御苦勞であつたと
 坊主に禮を言ふなり。爐氣、香爐の煙なり。晨飄、香は晝夜焚くが、夜の字に對して、晨と用ひし
 のみ。接御香、天子の室の香と、佛前の香と相接近するなり。誰謂此中、此の貴き天子の内道場中、
 難可到、普通人の到る所でない誰か謂ふぞ。自憐は俗の有り難いと云ふ事。深院得徊翔、自分は
 此の内道場中を徊翔するを得と。

【評論】 應制の作、大抵此の如きものなり、結句の自憐は切ならず、又徊翔は扈從の語にあらざ
 と論ずる者あり、仔細に讀めば、可も無く、不可も無き詩とす。

再入道場紀事應制

南方歸去再生天。内殿今年異昔年。見關乾坤新定位。看題日月更高懸。行隨香輦登仙路。坐近爐煙講法筵。自喜深恩陪侍從。兩朝長在聖人前。

南方より歸り去つて再び生天、内殿今年昔年に異なり、見に關ける乾坤新に位を定め、看に題せる日月更に高く懸る、行は香輦登仙の路に隨ひ、坐は爐煙講法の筵に近し、自ら喜ぶ深恩陪侍從、兩朝長く聖人の前に在ることを、

【句釋】再入道場、二度目の時、唐汝詢の曰く、此詩疑ふらくは、武氏則天既に崩じて中宗位に復する時の作、故に宇宙一新の語あり、接するに神龍元年中宗位に復し、佺期驩州に流さる、尋で召し還し、修文館學士に拜す、此の詩、是の時の作ならんと、「訓解」の説、信に近し。紀事の二字無用に近し。應制は前の如し。南方は驩州、長安より南に當る。歸去、去は來の意なり。再生天、朝天と言はずして、生天と言ふ、佛語を用ひしなり。内殿今年異昔年、昔年は武后の時を言ふ、見は現なり。關は開なり。乾坤新定位、中宗の即位。看題は羣臣の題があるなり。日月更高懸、是も中宗の即位を言ふ。行隨香輦登仙路、天子が内道場へ入る香輦に陪從する。坐近爐煙講法筵、前句は行なり、此の句は坐なり、行は輦に接し、坐は筵に近し、天子の傍を離れざるを言ふ。自喜は權喜なり。深恩陪侍從、此の句を「侍從ニ陪シ」と訓したる本あり、惡るし、侍從に陪するにはあらず、自身が陪侍從なり。兩朝は武后と中宗の兩朝なり。長在聖人前、此の前は韻字なるが故に用ふ、實は近き意味なり。

【評論】此の詩も前作と同様、特に稱する價值は無し。「訓解」の評に、辭極めて淺陋、本探るに足る無しと。

遙同杜員外審言過嶺

天長地闊嶺頭分。去國離家見白雲。洛浦風光何所似。崇山瘴癘不堪聞。南

浮漲海一人何處。北望衡陽雁幾羣。兩地江山萬餘里。何時重謁聖明君。

天長く地闊うして嶺頭分る、國を去り家を離れて白雲を見る、洛浦の風光何の似たる所ぞ、崇山の瘴癘聞くに堪へず、南漲海に浮ぶ人何れの處ぞ、北衡陽を望めば雁幾羣ぞ、兩地の江山萬餘里、何れの時か重ねて聖明の君に謁せん、

【句釋】遙は遠方なり。同は和するなり。杜は姓。員外は官名。過嶺、嶺を過ぎる題にて杜審言が詩を沈佺期に寄せられしなり、沈は給事考功郎たりしが、張易之が黨派と爲るを以て、驩州に放逐せらる、杜も亦易之と通ずるを以て峯州に流貶せらる、並に嶺外の地なり、湖南の南嶽は周回八

百里之嶺と謂ふ。天長地闊、普通に天長地久なぞの意は善の方に用ふるが、此の天長地闊は慘の意に用ふ、遠方相離るる意なり。嶺頭分、沈も杜も放逐せられて都を去る、而かも、嶺頭にて分る地は各異なる。去國離家、京城を離去する。見白雲、此の白雲と云ふ字は親を慕ふの意味を帯ぶ、暮雲の友を慕ふに區別するもの如し。洛浦は洛水、京城に屬す。風光何所似、五嶺外の風光と洛浦の風光と似たる所有るや否やとなり。崇山は嶺南道驩州に屬す、雲南と安南との境なり。瘴癘は惡病、虎烈刺の類なり。不堪聞、聞くも堪へざる所、況んや此に向ふに於てをや。南浮漲海、此の海は今日の所謂支那海、福建の厦門やら、廣東の澳門やら通ふ海中を言ふ、即ち南海なり。人何處、杜審言の事を言ふ。北望衡陽雁幾羣、湖南の衡州には回雁峯が在る、雁衡陽に至りて則ち過ぎずとある、峯州が極めて南方に當ること知るべし。兩地は峯州と驩州なり。江山萬餘里、電話も無し、電信も無き時代何の消息も爲す能はず。何時重謁聖明君、中宗は暗愚なれば、他聖明の君に謁せんかと言ふにはあらず、再度中宗に謁するは何れの時ぞと言ふ。

【評論】此の篇は、前二首に比較すれば、稍佳なるものなり、然れども山は二字あり、何は三字あり、律の正調として見るべからず。胡元瑞は沈宋陳杜は格を以て勝ると評して居るが、此の篇の如きは如何、後生一概に唐人を以て此等の詩を讀んで以て準據と爲さば、大に笑はる可きなり。

興慶池侍宴應制

韋元日

滄池滂沆帝城邊。殊勝昆明鑿漢年。夾岸旌旗疏輦道。中流簫鼓振樓船。雲峯四起迎宸幄。水樹千重入御筵。宴樂已深魚藻咏。承恩更欲奏甘泉。

滄池滂沆たり帝城の邊、殊に昆明漢年に鑿せるに勝れり、岸を夾む旌旗輦道を疏し、中流の簫鼓樓船に振ふ、雲峯四に起つて宸幄を迎へ、水樹千重御筵に入る、宴樂已に深うして魚藻を咏じ、恩を承けて更に甘泉を奏せんと欲す、

【傳略】 韋元日は京兆萬年の人、進士に擢げらる、東阿の尉に補し、左臺

韋元日傳、新唐書二百二。

御史に遷る、張易之と姻あり、易之敗るるに及んで感義の尉に貶せらる、俄かに召して主客員外郎と爲る、中書舍人に遷る、舅陸頌が妻は韋后が弟なり、元旦懣つて以て復進すと云ふ、弟は妹なり。

【句釋】 興慶池は沈佺期の龍池篇に於て記せり。侍宴、玄宗の宴に侍す。應制は前に述べし如し。

滄池は水の色を以て言ふ、池名にはあらず。沆は深大なるを言ふ。帝城邊、城下に在る。殊勝、ただ上に在るを言ふ。昆明は七古帝京篇の詩の注に述べしが如し。鑿漢年、武帝が年なり、昆明は人造なり、故に劣る、龍池は天造なり故に勝る、唐を揚げ、漢を抑へる。夾岸旌旗、兩岸を夾んで

旌旗を樹つ。疏は疏通なり。輦道は行幸道を言ふ。中流は池の中央を言ふ。簫鼓、或は簫或は鼓。振樓船、頗る賑やかなるを言ふ。上は陸上、此は池上なり。雲峯四起迎宸幄、天子の幸を四方の峯雲まで迎へるが如し、宸幄は假帳を言ふ。水樹千重入御筵、水邊の樹色が悉く御筵中に朝するが如し、以上二句共に舟中より見たる景を言ふ。宴樂は酒宴と遊樂となり。已深魚藻咏、「毛詩」小雅の仕に、魚在り藻に在り、頌たる其の首あり、王在すこと鎬に在り、豈しみ樂んで酒を飲めりと、今詩を作るは此の周王の詩に倣ふと言ふなり。承恩は天子の命。更欲奏甘泉、甘泉は山名なり、揚雄に「甘泉賦」あり、漢宮室を此の山に造り、甘泉宮と言ふ、陝西の西安府に在る、楊雄は流連荒亡することを諷したるが、此の篇も、餘りに歡樂を承け、歸ることを忘るゝに至るを諷するか。

【評論】 此の篇、前の沈佺期の詩に比すれば、其の句格、其の氣魄、遙かに上頭に在り、晚唐の許渾や劉滄は此等の詩を學んで咏古一體の妙を得たるものなり。明の鍾惺の評に、音律調暢、駢麗精工、初唐壓卷とあるは、實に我が心を得たり。

侍宴安樂公主新宅應制

蘇頌

駸駸羽騎歷城池。帝女樓臺向晚披。露灑旌旗雲外出。風迴巖岫雨中移。當軒半落天河水。遶徑全低月樹枝。簫鼓宸游陪宴日。和鳴雙鳳喜來儀。

駸駸たる羽騎城池を歴、帝女の樓臺晚に向つて披く、露旌旗に灑ぎて雲外に出で、風巖岫を廻らして雨中に移る、軒に當つて半落つ天河の水、徑を遶つて全く低る月樹の枝、簫鼓宸游陪宴の日、和鳴雙鳳來儀を喜ぶ、

【句釋】 蘇頌の傳は前卷に出せり。侍宴安樂公主新宅等の題意は、沈佺期の詩注に於て辨じ置きたり、蘇も沈と共に招かれしものならん。駸駸は「毛詩」に載馳駸駸とありて、馬行の疾速を言ふ。羽騎、騎馬の者、羽翼あるかと疑ふ、是れ馬を疾驅する。歷城池、二重橋の御溝を通過する如きをみて知るべし。帝女、公主は天子の子なれば帝女なり。樓臺は即ち新宅を言ふ。向晚披、晩餐會を開くなり、披は門が披くなり。露、夜露已に降りて旌旗に灑ぐ。雲外出、公主の親の中宗が幸を護して此の騎兵の旌旗が雲外に翻るなり。風迴巖岫雨中移、風が巖岫の路に移るに隨ふを言ふ。當軒、新宅の軒前に當つて。半落天河水、瀑布が落下するを天河の水に譬ふ。遶徑、新宅の周圍の徑を言ふ。全低月樹枝、月中の桂を言ふ、桂樹の枝が雨の爲めに低く垂る。簫鼓宸游陪宴日、天子の游に陪宴する。和鳴雙鳳、雌雄の鳳が和鳴するは、天子夫妻が和鳴するに譬ふ。喜來儀、來り舞うて容儀あるを喜ぶとなり、來儀の字は「尚書」に出づ。雙鳳の字は潘岳の「笙賦」に出づ。

【評論】 此の篇、沈詩に比するに句格自然勝るものと思ふ。蔣一葵は、三四は沈に及ばず、五六は之に過ぐと言ふ。鍾惺は曰く、妙は半落全低に在り、結、俗に似たりと。題目が題目なり、俗に流

るるは當然なり。

奉和春日幸望春宮應制

東望望春春可憐更逢晴日柳含煙。宮中下見南山盡城上平臨北斗懸。細草偏承回輦處。飛花故落舞觴前。宸游對此歡無極。鳥弄歌聲雜管絃。東望春を望めば春憐む可し、更に晴日に逢うて柳煙を含む、宮中下見して南山盡き、城上平臨して北斗懸る、細草偏に承く回輦の處、飛花故らに落つ舞觴の前、宸游此に對して歡極まり無し、鳥は歌聲を弄して管絃を雜ふ、

【句釋】奉和、天子の作に和するを言ふ。春日幸望春宮は天子が作られし詩題なり、宮は灑水の西岸に在り、隋の文帝建、煬帝改めて長樂宮と曰ふ、唐は望春と名く。應制は前辨の如し。東望望春可憐、望二字、春二字、用ひ得て自然、未だ望春宮に到らず先づ之を望む。更は其の上。逢晴日、春は雨日も可憐なり、まして晴日は更に好し。柳含煙、楊柳が晴煙を帶ぶ。宮中下見、望春より下し見るとすれば、宮が高邱に在ること知るべし。南山盡、終南山を眼中に見盡くすなり。城上平臨、城樓に上りて觀るときは。北斗懸、乃ち北斗の高きものが却つて城下に出づる若きを言ふ、此の十四字共に巨景又遠景を敘す。細草は宮庭なり。偏承回輦處、草の小なるものも亦恩幸を承くる。飛

花も亦幸を知るもの、如ければ、故は特なり。落舞觴前、酒宴の席上に傍うて飛ぶなり。此の十四字は小景又近景を叙す。宸游は天子の游、宸を何故に天子に用ふると言ふに、宸は「室之奧者」と注して深殿を云ふ、又帝は北辰の宮に居すと云ふ所より、心に從ひ、辰に從うて天子の獨用と爲す。對此、此の巨景細景に對し、歡無極、十分の歡樂を極む。鳥弄歌聲、春なれば柳あり、花あり、又鳥あるなり。雜管絃、無情も有情も一致して樂しむなり。

【評論】此の篇、應制の作として甚だ傑出せるものとす。明の楊用修が曰く、唐、貞觀より景龍に至る、詩人の作、盡な是れ應制、命題既に同じく、體製復一なり、其の綺繪餘有りて韻度に乏し、獨蘇頲が東望望春の一篇廻に羣英に出づ。蔣一葵は曰く、下盡平懸の四字遂に高俊を盡くし形迹を見ず、偏故の二字情あり。

奉和初春幸太平公主南莊應制

主第山門起灞川。宸游風景入初年。鳳凰樓下交天仗。烏鵲橋頭徹御筵。往往花間逢綵石。時時竹裏見紅泉。今朝扈蹕平陽館。不羨乘槎雲漢邊。

主第の山門灞川に起る、宸游の風景初年に入る、鳳凰樓下天仗交はり、烏鵲橋頭御筵徹たり、往往花間綵石に逢ひ、時時竹裏紅泉を見る、今朝扈蹕す平

陽館、羨まらず、槎に雲漢の邊に乗ずるを、

【句釋】 初春は一月なり。幸は高宗が幸するなり。太平公主は即ち則天武后の生む所、神龍年中の時、府を開きて宮屬を置く、睿宗の弟即位し、公主の權天下に震ふ、宰相七人、五は其の門に出づ、觀池を樂游园に作り以て盛集を爲すと唐書公主傳に在り。南莊は南方の別莊。主第、主は公主なり、第は私第なり、公主降嫁すれば、別に第舍を立つ。山門起灞川、灞水に沿て門を起てしなり、宸游は高宗なり。風景入初年、幸する時の節を言ふ、初年は即ち正月なり。鳳凰樓下、鳳凰の字樓の名なり。交は交錯する。天仗は鋒や槍の類を云ふ。烏鵲橋は庭池に架する橋。頭徹御筵、此の橋邊の亭にて高宗が酒燕を催す。往往は「タビタビ」と訓するなり。花開逢綵石、周の穆天子は采石の山に升り、是に於て采石を取ると、采は綵と同じ。時時亦「タビタビ」なり。竹裏見紅泉、紅は俗語の奇麗に當る、竹裏より奇麗なる泉が流るゝなり。今朝扈蹕、扈は後へに従ふを扈と云ふ、蹕は止「トバムル」なり。平陽館は、漢の孝景王后の長女、平陽公主となる、武帝灞上に被して還平陽主に過ぎ金千斤を賜ふと、今以て公主に譬ふ。不羨乘槎雲漢邊は、排律幸昆明池の詩に於て述べたり。

【評論】 此の篇、鳳凰と烏鵲と綵石と紅泉と雲漢との文字は色彩あり、他は朴雅の文字なり、却て誦すべき價值あるものなり。

幽州新歲作

張說

去歲荆南梅似雪。今年薊北雪如梅。共和人事何嘗定。且喜年華去復來。邊鎮

戍歌連日動。京城燎火徹明開。遙遙西向長安日。願上南山壽一杯。去歲荆南梅雪に似たり、今年薊北雪梅の如し、共に知る人事何ぞ嘗て定まらん、且喜ぶ年華の去つて復來るを、邊鎮の戍、連日動く、京城の燎火明に徹して開かん、遙遙西長安の日に向つて、願くは南山の壽一杯を上らん、

【句釋】 幽州は古の燕、今の直隸省なり。新歲作、五律の注に於て辨じ置けり。去歲荆南は湖北の荊州府を言ふ、中書令と爲る時、姚元崇と不平なり、罷めて岳州の刺史と爲る。梅似雪、梅花の勝地は無きも、側面は其の暖地を言ふなり。今年薊北、幽州は古の薊なり、幽州都督と爲りて此に在る。雪如梅、今年北地にて、其の寒の酷なるを言ふなり。共は荆南と薊北共に長安に在らざるを以てなり。知人事何嘗定、人事は皆偶然に出づ、初めより一定の禍福無し。且喜年華去復來、年華は定め有り、今年も生きて此の新歲に逢ふ、喜ぶ所以なり。邊鎮は幽州の都督即ち自分を言ふ。戍歌、戍卒等が歌ふもの。連日動、二日も三日も蠻歌を謳ふ聲が動く。京城は中央政府即ち長安なり。燎火は「カガリビ」新年に焚く火なり。徹明開、是れ京城の新歲を想像するなり。遙遙は遠方を言ふ。

西向長安日、日向ふ意は天子の方に向ふ意なり。願上南山壽一杯、蔭乍ら天子の爲め新歳の壽を上らん、君を忘れざる意を表するなり、君王は玄宗なり。

【評論】此の篇、新歳の景と情とを叙して、氣格渾厚なるものとす、長安日の三字を用ひし所、最も其の巧力を見る。晉の明帝の故事を知る者は、直ちに此の句の巧妙を知らるゝなり、但連日と安日と同字なり、連日は或は連夜ならんかと思ふ、荆南と南山はも律としては正法ならず、後世學ぶ可からざるなり。

澗湖山寺

空山寂歷道心生、虛谷迢遙野鳥聲。禪室從來雲外賞、香臺豈是世中情。雲間東嶺千重出、樹裏南湖一片明。若使巢由同此意、不將蘿薜易簪纓。

嶺千重出、樹裏南湖一片明。若使巢由同此意、不將蘿薜易簪纓。空山寂歷として道心生ず、虛谷迢遙たり野鳥の聲、禪室從來雲外の賞、香臺豈是れ世中の情ならんや、雲間東嶺千重出で、樹裏南湖一片明らかなり、若し巢由をして此の意を同じう使しむれば、蘿薜を將て簪纓に易へず、

【句釋】澗湖は湖南の岳州府に在り、沅湘澗泪の餘波なり。山寺は湖山上の寺ならん。空山は靜山の意に見よ。寂歷はさぶしき形容語。道心生、佛の道を信する心を生ずるなり。虛谷は人聲を聞か

ざる谷。迢遙はのんびりしたる形容語。野鳥聲、寂歷たる所以。禪室は坐禪の丈室なれども、單に寺と見て可なり。從來は、もとより。雲外賞、世を離れし境界なれば雲外の賞と云ふ。香臺、香刹梵臺なれども、單に寺と見て可なり。豈是世中情、全く人間の俗氣無ければなり。雲間東嶺、寺中より雲間に於て東嶺を見れば、千重出で嶺が幾處も重なり出づるなり。樹裏南湖、樹間に於て南湖を見れば、一片明、水なれば一片明と言ふ、亦實況なり。若使巢由は、巢父は堯の世の隱人、山居して世利を營みず、樹を以て巢と爲して其の上に寝ぬ、時人號して巢父と曰ふ、許由字は武仲、堯天下を許由に讓る、由受けずして逃去す、中岳潁水の陽箕山の下に遁暉す。同此意、我が意と巢由と同じきなれば、不將蘿薜易簪纓、此の蘿薜は隱者の冠、簪纓は搢紳の冠、言ふ意は我も巢由に従はんとなり。訓解に、蘿薜も簪纓も、一切皆幻なり、彼を以て此れに易へずと、論旨は明白、然れども此の詩意にはあらず。

【評論】此の篇、澗湖の山寺と、我心情とを描寫して、良に徹底せり、名篇にもあらざるが、又劣章にもあらず、雲の二字あるは推敲の足らざる所とす。

遙同蔡起居偃松篇

清都衆木總榮芬、傳道孤松最出羣。名接天庭多景色、氣連宮闕借氤氳。懸

池的的停華露。偃蓋重重拂瑞雲。不惜流膏助仙鼎。願將楨幹捧明君。
清都の衆木總て榮芬、傳へて道ふ孤松最も出羣、名天庭に接して景色多く、
氣宮闕に連なりて氤氳を借る、懸池的的として華露を停め、偃蓋重重として
瑞雲を拂ふ、惜しまず流膏仙鼎を助くるを、願はくは楨幹を將て明君に捧げ
ん、

【句釋】 遙は遠方から言ふ、面前にあらざるの謂なり。同は和なり。蔡起居、蔡は姓なり、起居は官名、起居郎二員、起居注を掌どる、天子の言動作法度を録し、以て記事の史を修す、從六品。偃は臥なり。松篇、松の老たるもの、偃蓋の如くなり、此を咏じたる篇。清都は城中を言ふ。衆木、都市に植ゑてある衆木は、總榮芬、發達して居るが、其の中で、傳道、人人道ふ所は、孤松は偃松を指す。最是前の總に對す、特別になり。出羣、榮芬中の榮芬なり。名接天庭、有名な松ゆる天子も亦知るとの意。多景色の三字は附けたるに過ぎず。氣連宮闕、松の佳氣。借氤氳、天子の目出度氣象を借りて發達するとの意。懸池的的、松の枝が池面に垂れ、翠色がキラキラする。停華露は、多景色の三字を承ける。偃蓋重重、玉策記に千載の松、披起して上杪長せず、望んで之を視れば、偃蓋の如きありと、影が重なるなり。拂瑞雲は借氤氳の三字を承ける。不惜流膏は、漢武內傳

に、藥に松脂の膏あり、之を服すれば以て延年すべしと、流膏とは松の油を取るなり。助仙鼎、松の膏を以て仙人の藥方を助けること出來無いとときは、願將楨幹、松の楨幹を以て自分の楨心に比するなり。奉明君、此の明君は玄宗なり、張が本集此の君の下に莫比冥靈楚南樹、朽老江邊代不聞の二句あり、有るも排律とすれば蛇足にあらず、單に律としては蛇足に屬す、自身の作は孰れか眞なるは判然せざるが、此の八句を以て完璧とす。
【評論】 此の篇、通篇比體を以て之を出し、表面は松にて裏面は己なり、渾雅咏物として上乘に屬す、總と最と衆と孤と俗人の所謂字眼なるもの、蓋し作者に在りては悉く字眼なり、千手千眼なり、一字片語のみ字眼ならんや。

奉和春日出苑矚目應令

賈曾

銅龍曉關問安廻。金輅春游博望開。渭水晴光搖草樹。終南佳氣入樓臺。招賢已從商山老。托乘還徵鄴下才。臣在東南獨留滯。忻逢睿藻日邊來。
銅龍曉關いて安を問うて廻る、金輅春游博望開く、渭水の晴光草樹に搖き、
終南の佳氣樓臺に入る、招賢已に商山の老を從へ、乘に托して還徵す鄴下の
才、臣は東南に在りて獨留滯す、忻ぶ睿藻の日邊より來るに逢ふことを、

【略傳】 賈會は河南洛陽の人、少うして才名あり、景雲中、吏部員外郎と爲る、玄宗太子爲りし時、會を以て舍人と爲す、數は諫疏あり、諫議大夫に徙り、蘇晉と同じく、制誥を掌どる、並に文を以て稱せらる、時に蘇賈と號す、事に坐して楊州の刺史に貶せらる、禮部侍郎に遷り卒す、年不詳。

【句釋】 奉和は前注の如し。春日出苑矚目は、玄宗が太子たりし時、此の題にて詩を作り賈に示されし者乃ち之に和して作る。應令、天子には應制、太子には應令、秦以來の法なり。銅龍は、門樓の上に銅龍あるなり、「漢書」に、元帝嘗て急に太子を召し龍樓門に出でて宴を張る、曰く、門樓の上銅龍あり、白鶴飛廉の名を爲すが若しと、是れ太子の門樓、天子の門樓にはあらず。曉闌、門扉を曉天に開き太子が出づるなり。問安廻は、父の睿宗の天機を奉伺して廻るなり、周の文王が世子爲りし時、王季に朝し、日に三鷄初鳴し衣服

賈會傳、新唐書一百十九、舊唐書九十中。

し寢門の外に至り、内豎に安否を問ふ、内豎曰く、安し、文王乃ち喜ぶ。金輅、「周禮」に王の五輅、金輅は鈎樊纓、金を以て輅即ち大車を飾る。春游は字の如く看花の遊樂なり。博望開、博望は漢の武帝が戾太子の爲めに造りし苑の名なり、廣博觀望の意味なり。渭水は隴西即ち甘肅より出て以て陝西の鳳翔地方に至る。晴光搖草樹、水光が搖くなり、樹を搖かすにあらず。終南は山なり。佳氣入樓臺、南山の鬱鬱たるは、朝する所、此の樓臺に在り、他にはあらず。招賢已從南山老、「漢書」留侯世家に、上、太子を廢せんとす、留侯曰く、此れ口舌を以て争ひ難し、願ふに上の致すこと能

はざるもの天下四人あり、今太子をして書を爲り辯士を使して固く請はしめば、宜しく來るべし、來りて以て客と爲らば則ち一助なり、是に於て此の四人を迎ふ、四人至り太子に従ふ、年皆八十有餘、上の曰く、彼の四人之を輔げば、羽翼已に成る。南山の老は此の四人なり、太子に従ふ者、此に類する人ありと譬ふ。托乘、乘は「ノリモノ」即ち或る物質を言ふときは仄用とす。魏の文帝の書に、文學後車に托乗すと。托は附なり。時に帝太子たり、故に文學後車に附載して以て從ひ行くなり。還徵鄴下才、天子の學者を徵するなり、「魏志」に、陳思王曹植、字は子建、西園を鄴に置き、王粲、應瑒、阮瑀、陳琳、徐幹、劉楨の諸才子と夜游詩を賦す、世に鄴下七才子と稱せらる、今太子は亦曹子建と同じきなり。臣在東周、周の平王東遷して來る處、即ち河南の洛陽、賈が此に獨留滯するなり。忻は喜なり。逢は接するなり。睿は聖の下に屬す、皇后や太子に用ふ。藻は作製の詩を言ふ。日邊來、長安即ち陝西の西安府西都より來る。

【評論】 此の篇、賈會が太子の侍從として太子の咏藻に對して和するもの、臣子の分極めて明明たり、太子なるが故に帝王と混同せざる典故を用ふる所、其の力を見る可きなり、鍾惺の評に、渭水の二聯色を生じ、把に堪へたり。黃家鼎は曰く、景華藻を極むと。僅かに此の一首亦以て千秋に傳ふべし。

奉和初春幸太平公主南莊

李邕

傳聞銀漢支機石。復見金輿出紫微。織女橋邊烏鵲起。仙人樓上鳳凰飛。流風入座飄歌扇。瀑水當階濺舞衣。今日還同犯牛斗。乘槎共泛海潮歸。
上鳳凰飛、流風座に入り歌扇を飄し、瀑水階に當りて舞衣に濺ぐ、今日還牛斗を犯し、槎に乗じて共に海潮に泛んで歸るに同じ、

【傳】李邕、字は秦和、揚州の人、李善が子なり、善が文選を注するに當り、父の業を扶けし事屢なり、李嶠其の才を愛し、之を朝に推薦す、

李邕傳、新唐書卷二百二、舊唐書一百九十中。

左拾遺に拜せらる、玄宗即位し、御史中丞と爲る、後法を枉げ獄に下る、死一等を減じて北海の太守と爲す、既にして宰相李林甫之を忌み、罪ありと奏して之を杖殺す、年七十、杜甫八哀詩を作りて之を痛む、「唐書」の評に、豪放にして細行を治むる能はず、敗游自恣以て自ら敗ると、今謂ふ自ら敗れずとするも、彼の李林甫の如き惡徒を如何せん。集七十卷と集注にある、未詳。

【句釋】秦和初春幸太平公主南莊應制は、前に出せる蘇頌と同時の作なり。傳聞、今見しにあらざれば傳聞なり、銀漢支機石、張華の「博物志」に、人あり、河源を尋ね、婦人の紗を浣ふを見る、

之を問ふ、曰く天河なり、乃ち一石を與ふ、還つて嚴君平に問ふ、君平曰く、此れ織女の支機石なり、公主を織女に比するなり。復見は傳聞の反對、今見るなり。金輿は天子の乘車、出紫微は天子平生の所居、其の所居を出て、南莊に幸するを言ふ、此の二句共に珍らしき事を言ふ。織女橋邊烏鵲起、銀漢の游を以て今の南莊の游に比す、此の「カサ、ギ」と云ふ鳥は、七月七日に織女橋を渡ると「淮南子」の説に見ゆ。仙人樓上鳳凰飛、前句は公主に係る、此の句は天子に係る。流風は風の吹く長きを言ふ。入座飄歌扇、此の酒燕席上の餘興に扇を以て歌ふ者あるなり。瀑水當階、階前に從從として瀑布が落下する。濺舞衣、餘沫が舞人の衣に濺ぐ。今日還同、今日と昔と同じき故に還の字を用ふ。犯牛斗、牛斗を倒用したる熟語、牛斗の間を犯して、乘槎共泛海潮歸、昔し槎「イカダ」に乗りて海に泛んだとの説を聞くが、今日も其と同じ様に思はるゝなり。

【評論】此の篇、仙人に關する文字を以て一篇を構成し、天子と公主と自己とを叙して、悉く故事に由る、蔣一葵の評に、小許公蘇頌と見たり難く、弟たり難しと。劉化蘭は曰く、起二句空より生出す、三聯絶えて煙火の氣なし。支機石を石支機に作る本あり、韻に叶はずとも、支機石を以て可とす。

和左司張員外自洛使入京中路先赴長安逢立春日贈韋侍御及諸公

孫逖

忽觀雲間數雁廻。更逢山上一花開。河邊淑氣迎芳草。林下輕風待落梅。秋憲
府中高唱入。春卿署裏和歌來。共言東閣招賢地。自有西征作賦才。

忽ち觀る雲間數雁の廻るを、更に山上一花の開くに逢ふ、河邊の淑氣芳草に
迎へられ、林下の輕風落梅に待す、秋憲府中高唱入り、春卿署裏和歌來る、
共に言ふ東閣賢を招くの地、自ら西征作賦の才あり、
【句釋】孫逖の傳は前卷に出せり、和は孫が和す。左司員外郎は官なり、張は姓なり。自洛入京、
洛陽より長安に入る。先赴長安、京即ち長安なれば、此の長安の二字疑はし、京城の傍の長安縣と
見れば可ならんか。逢立春日、立春は現今の曆では二月初旬なるが、古曆では正月に當る。贈韋
侍御は、贈る主意の人。及諸公は附隨の人なり、自洛以下の二十二字は司司張が原題なり、盛唐諸
公は長題を思ひ、二十八字もある題は此の外に無し。譚元春は云ふ、長題の祖と。蔣一葵は云ふ、
題妙婉曲法る可しと。忽觀、觀は見なり。雲間數雁廻、鴻雁は春に逢うて廻る。更逢山上一花開、
前句と對を爲す、雲と山、數と一、雁と花、何の山、何の花と定めたるにあらず。河邊は征路を言
ふ。淑氣は和氣なり、「ヤハラグ」なり。迎芳鳥、即ち黃鳥、暖に向はざれば、此の鳥は鳴く能はず、
今便ち鳴く。林下輕風、輕は前の淑と同じ、和風なり。待落梅、待は遇ふなり、梅花が落つるに遇

ふなり。秋憲、辭令を御史に與ふる立秋を以てす、風霜始嚴、鷹隼初擊に由る、故に御史臺を秋憲と
曰ふ。府中高唱入、韋待御が居る役所へ此の善詩が贈られし事を言ふ。春卿署裏、禮部に在勤する
諸公を言ふ、禮部を春官と曰ふ。和歌來、韋より轉じ他禮部の諸公から和作の詩が來る。共言は韋
も諸公もなり。東閣は内閣、高級の官署を言ふ。招賢地、張が長安に赴くは、内閣大臣に謁せんと
欲するなり。自有西征作賦才、晉の潘岳が長安の令と爲り、「西征賦」を作る、此れ張が東洛より西
都に赴いて詩を作るに譬ふ。
【評論】此の篇、輕妙の筆を以て、能く其の時景と、其の人とを表現すと謂ふ可し。蔣一葵は曰く、
雲間、山上、河邊、林下、府中、署裏、太だ犯すと。典公は此の評を輕視する如きも、是れ一種の
病なることを知らざる可からず。

黃鶴樓

崔顥

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。晴川
歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。煙波江上使人愁。

七 言 律

昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去復返らず、
白雲千載空しく悠悠、晴川歷歷たり漢陽の樹、芳草萋萋たり鸚鵡洲、日暮郷

關何れの處か是なる、煙波江上人をして愁へ使む、

【句釋】 崔顥の傳は前卷に出し置けり。黃鶴樓は湖北の武昌に在り、仙人王子安が黃鶴に乗つて此を過ぎ其より名く、荀環、道術を好む、嘗て東游、江夏の黃鶴樓上に憩ふ、西南を望むに物あり、飄然として霄漢より下る、乃ち鶴に駕するの仙なり、鶴石側に止まる、仙人席に就き、賓主驩對す、已にして辭去す、鶴に跨がり、空に騰り、渺然として烟滅す、「述異記」「武昌志」に、江夏の辛氏、酒を沽りて業と爲す、一先生來る、魁偉縵縵、從容に辛氏に謂つて曰く、飲酒を許さんやと、辛氏辭せず、飲ましむるに巨杯を以てす、既にして半歳、辛氏少しも倦色なし、一日先生辛に謂つて曰く、多く酒債を負ふ、汝に酬ゆ可き無し、遂に小籃の橋皮を取り、鶴を壁に畫く、乃ち黄色と爲す、坐する者、手を拍つて之を歌ふ、黃鶴蹠蹠として舞ひ、律に合し、節に應ず、故に衆人錢を費して之を観る、十年餘にして辛氏巨萬を累ぬ、後先生飄然として至る、辛氏謝して曰く、願はくは先生の爲め供結意の如くせん、先生笑つて曰く、吾豈此れが爲めならん、忽ち笛を取り吹くこと數弄、須臾にして白雲空より下る、畫鶴飛んで先生の前に至る、遂に鶴に乗じて雲に跨つて去る、此に於て辛氏樓を建て、名けて黃鶴と曰ふ、諸說種種に分る、要は此種の傳説なり。昔人は子安なり、先生なり。已乘黃鶴去、此の黃鶴を白雲に作る本あり、古今多く黃鶴の方を取る。此地は武昌城邊なり。空餘黃鶴樓、遺蹟は猶在り、人は空し。黃鶴一去不復返、起句は昔人に重きを置く、此の句

は黃鶴に重きを置く。白雲千載空悠悠、返らざる黃鶴は見る能はず、今日見るものは白雲の悠悠たるのみ。晴川歷歷、川が「ハツキリ」と見へる。漢陽樹、武昌の鄰府を漢陽とす、川も樹も共に能く見る。芳草萋萋鸚鵡洲、此の洲は江夏の西、大江中に在り、後漢末の黃祖が禰衡を殺せし處、禰衡「鸚鵡賦」を作りて黃祖を罵倒す、故に害に遇ふの地、此の名を得たり、今禰衡は見えずと感を寓す、北周の庾開府の詩に、藏船鸚鵡之洲の句あり。日暮鄉關、崔は杼洲の人、鄉關は遠し。何處是、見えざるなり。煙波江上使人愁、只今見る所は、此の樓と白雲と煙波、總て無情の物のみなり、彼の有情の仙人も黃鶴も禰衡も見能はず、以て吾が身跡を嘆ずるなり。

【評論】 此の篇、古今の絶唱と稱せらる、詩聖李白も及ばずと爲す、嚴滄浪の如きは唐人七言律の第一と嘆す。劉會孟は曰く、滔滔莽莽として疎宕の氣あり、故に巧思に勝ると、鍾惺は曰く、妙は寛然餘有り寫さざる所無きに在り、黃家鼎は曰く、古調を以て律詩に入る、亦一時意興の至る所、一起一束、人をして短咏悠然長思未だ罄さざらしむ。

行經華陰

岧嶷太華俯咸京。天外三峯削不成。武帝祠前雲欲散。仙人掌上雨初晴。河山北枕秦關險。驛路西連漢時平。借問路傍名利客。無如此處學長生。

岩堯たる太華威京に俯す、天外の三峯削るとも成らず、武帝祠前雲散せんと欲す、仙人掌上雨初めて晴る、河山北秦關に枕して險に、驛路西漢時に連なりて平なり、借問す路傍名利の客、此の處長生を學ぶに如くは無し、

【句釋】 行輕華蔭、旅行中に華山の麓を過ぎるなり、華山は五嶽の一、西嶽と稱す、岱山に次ぐ山なり。岩堯は高き形容。太華は少華に對す。俯威京、京兆即ち長安に俯伏する。天外三峯、芙蓉と明皇と玉女の三峯。削不成、巖然たる形、削れども及ばず。「華山記」には、其山削成とあり。武帝祠、漢の武帝なり、或は云ふ武帝が建てし仙人の祠と。前雲欲散、是に於て山の面目を見る。仙人掌は天露を承くる爲め武帝が造りし物。上雨初晴、銅掌の上雨晴れて又見るを得たり。河山北枕秦關險、關中に向つて河山が枕する如き形を爲し頗る險、今の潼關は秦關なり、山河四塞、形勝甲於天下は始皇が嘆稱したる處なり。驛路西連漢時平、岐州雍縣の南に漢の五帝の時あり、時は天帝を祭る所、靈の止まる所。借問は單に問ふなり。路傍名利客、名奔利走の俗客輩を云ふ。無如は及ばない意味。此處は華山を指す。學長生、「洞仙傳」に、茅濛字は初成、鬼谷先生を師とし長生の術を受け、華山に入りて修道し、一旦雲に乗り、鶴に駕して白日昇天すと。

【評論】 此の篇、二句より六句に至る迄、華山の事を叙し、後二句、我が想を叙す、削成の古語に

不の字を加へ、以て翻案し、秦漢二朝の事を叙し、以て華山に切ならしむ、巧妙にして亦雄渾、宜なり太白をして嘆稱せしめし事や、路の字二字あるは可惜。

登金陵鳳凰臺

李白

鳳凰臺上鳳凰游。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠成古邱。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

鳳凰臺上鳳凰游びしに、鳳去り臺空しうして江自ら流る、吳宮の花草幽徑を埋め、晉代の衣冠古邱と成る、三山半落つ青天の外、二水中分す白鷺洲、總て浮雲の能く日を蔽ふが爲め、長安見えず人をして愁へしむ、

【句釋】 登金陵は、今の江蘇省江寧府、建康も建業も同じ、明の南京應天府、楚の威王其地に王氣あるに依て金を埋めて之を鎮す、故に名く、三國の吳、東晉、宋、齊、梁、陳並に此に都す。鳳凰臺は江寧縣治の南に在り、宋の元嘉中鳳凰山に集まることあり、因つて臺を山上に起すと言ふ、白、黃鶴樓に登り詩を賦せんと欲せしも、崔顥が前題の詩あり、及ぶべからざるを知つて、去つて鳳凰臺に到り崔の調に倣うて此の篇を賦す、巧力相匹すと雖も、功は發明者に譲らざるを得ず。鳳凰臺上鳳凰游、昔年の事を叙す、鳳去臺空江自流、今時の事を叙す。吳宮、吳王夫差は西施と共に亡し。

花草埋幽徑、「吳越春秋」に、吳宮は墟と爲り、庭に蔓草を生ず。晉代、西晉の都は洛陽なれども東晉の祖元帝は金陵を都と爲せり。衣冠成古邱、東晉も十一代百二十年にして遂に亡ぶ。三山は金陵の西南五十七里に在り、下大江に臨み、三峯排列す、故に名く、晉の王濬、吳を伐つて三山に至ると即ち是れ。半落青天外、山の半分は雲煙なぞに隠れ、半分は天中に出づるを言ふ。二水中分白鷺洲、秦淮の源、句容の溧水兩山の間を出で、方山より合流し建康に至り、分れて二支と爲る、一支は城に入り、一支は城外を繞る、共に一洲を夾む、一洲は此の白鷺洲と爲す、一水に作る本は恐らくは誤る。總爲浮雲能蔽日、「陸賈新語」に、邪臣、賢を蔽ふ、猶浮雲の日月を障ふるが如し。又秦の符堅、慕容垂夫人を幸す、宦者趙整が曰く、雀來りて燕室に入るを見ず、但浮雲の白日を蔽ふを見ると。長安不見使人愁、「晉書」明帝紀の、目を擧ぐれば日を見る、長安を見ず、の意に依る。太白の意、邪臣を諷戒したるにあらず、但實景を叙するに、故典に據を求めたるのみ。

【評論】此の篇、太白集中に於て特に傑製に屬す、「詩醇」の評を譯載して見ん、崔顥詩を黃鶴樓に題す、李白之を見て去り、復作らず、金陵に至り、鳳凰臺に登り、乃ち此の詩を題す、傳ふる者、以て崔に擬して作ると爲す、理或は之れ有らん、崔詩直に胸情を擧げ、氣體高渾、白詩目を山河に寓し、別に懷抱あり、其の言皆心より發し、景に即いて成る、意象偶ま同じく、勝境各擅まななり、論者、其の高情遠意を擧げず、沾沾字句の間を吹索す、固已に蔽し、白實に之に擬し、以

て勝負を較し並に謬つて鶴樓を槌碎する等の詩と謂ふに至りては、鄙陋の談一喙に値せず、蕭士贇が曰く、懷古に因つて君を懷ふの思を動かし、抑も亦自ら譏廢帝郷を望んで見ざるを傷む、乃ち景に觸れて愁を生ず、亦哀しむ可きなり、明清以下の論評する者亦多し、今略す。

早朝大明宮呈兩省僚友

賈至

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯遶建章。劍佩

聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池上。朝朝染翰侍君王。

銀燭にて天に朝し紫陌長し、禁城の春色曉蒼蒼、千條の弱柳青瑣に垂れ、百轉の流鶯建章を遶る、劍佩の聲は玉墀の歩に隨ひ、衣冠の身は御爐の香を惹く、共に恩波に沐す鳳池の上、朝朝染翰君王に侍す、

【略傳】賈至字は幼鄰、洛陽の人、明經策より單父尉、起居舍人知制誥に

賈至傳、新唐書卷一百十九、舊唐書一百九十中。

至り、玄宗に従つて蜀に至る、肅宗登極す、至策を撰り藁を進む、帝曰く先帝の誥命乃父曾を言ふ之を爲り、今茲の命策、爾之を爲る、兩朝の盛典、卿父子に出づ、盛なりと謂ふ可し、至徳中小法に坐して、岳州司馬に貶せらる、寶應の初、故官を復す、大歴七年右散騎常侍を以て卒す、年五十五、禮部尙書を贈る、謚して定と曰ふ、集二十卷あり。

【句釋】早朝大明宮、此の宮は貞觀八年に置く、高宗の龍朔三年、始めて大に興葺し、蓬萊宮と曰ふ、長安元年復大明宮と曰ふ。兩省は中書省と門下省なり。僚友は宮友なり。銀燭朝天は自分が持つ燭の如く聞えるが實は禁中に點じてある燭なり、自分のものとすれば詩意は更に佳し、未明なること知る可し。紫陌長、朝天の途中を言ふ、都の衢を紫陌と言ふ。禁城は宮城なり春色曉蒼蒼、前句は未明なり、此の句は已に曉けたるなり。千條、條は枝なり弱柳垂青瑣、青瑣は省門刻して連環の文を爲り、之を青塗す、弱柳が門に傍うて垂るゝが曉に見えるなり、百轉流鶯、羣鶯が東西に轉じて鳴く。遠建章、柏梁臺が火に燒く、是に於て再造したるもの建章宮と爲す。劍佩聲隨は、武官等が帶劍が響く聲は、玉墀歩、天子に隨從して玉墀を上る度に聲がする、或は天子に隨ふにあらす、武官等が玉墀を歩する度に劍佩の音がすると見ても、妨げなし。衣冠身惹、文官等が身には、御爐香、天子に接近する故に宮中の香氣が我が身に移るを言ふ。共沐恩波鳳池上、鳳池は中書省なり、「通典」に中書省、地、樞近に在り、多く寵任を承く、是を以て人其の位を固む、之を鳳凰池と謂ふ。晉の荀勗中書監と爲る、尙書令に除す、人之を賀す、曰く、我鳳凰池を奪ふ、何ぞ賀するやと波の字は池の字あるより用ひし事知らざる可らず。朝朝染翰、詔勅の類は悉く中書省より出づるなり。侍君王、天子に咫尺するなり、令に正三品、侍郎は正四品、舍人は正五品上なり、賈至は舍人なり。

【評論】此の篇、題に早朝とある如く、一字一句早朝ならざるは無し、蔣一葵は曰く、前の四句早朝の時の景物、五六は早朝の時の事、末の二句僚友に呈する意あり、共沐二字の上在りて見る。鍾惺曰く那ぞ此の如く愷切、此の如く軒冕なることを得たる。徐而菴曰く、氣格雄深、句意嚴整、之に熟して寒陋を洗ふべし。黄家鼎曰く、早朝の詩山林の氣を帶ぶるを得ず、此の如く格律眞に是れ錦明霞燦電燦雷鳴、朝の字三字あり、亦病とす。

和賈至舍人早朝大明宮之作

王維

絳幘雞人報曉籌。尙衣方進翠雲裘。九天閭闔開宮殿。萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動。香煙欲傍袞龍浮。朝罷須裁五色詔。珮聲歸到鳳池頭。

【句釋】此の題は前注の如し、王右丞が和詩、原作に凌駕するも下にあらざること精讀の者は自ら知らん。絳幘雞人は平たく言へば番人が曉を報する役なり、絳は赤色なり、幘は頭巾なり、以て雞に象どる、蔡邕の「獨斷」に、幘は古の卑賤、事を執り、冠せざる者の服する所、漢官儀に、宮中

輿臺人並に雞を畜ることを得ず、夜漏未だ明けず、三刻雞鳴に衛士朱雀門に候し、絳幘を著け、
專ら雞唱を傳ふ、按ずるに雞人夜を掌どり、旦を呼ぶ、以て百官に囂ぶ、囂叫と通ず。報曉籌、東
坡の云ふ、余黃州に來り、人の歌を聞くに雞唱の如し、朝堂の中に聞く所の雞人漏を傳ふると、微
に相似たり、曉籌は五更の漏なり。尙衣は冕服を掌どる役なり。方進、天子に捧げ出す。翠雲裘、
天子の裝束を言ふ。九天闔闔、天の門の名、以て宮門を言ふ。開宮殿、闔闔の開くは即ち宮殿の開
くなり。萬國衣冠は、各國の大使や公使を言ふ。拜冕旒、天子に拜謁するなり。日色纔臨仙掌動、
曉日先づ高處より照映するを言ふ、銅掌は高ければなり。香煙欲傍袞龍浮、天子の坐邊に於て香煙
は最も盛んなり。朝罷は退朝後を言ふ。須裁五色詔、詔勅は五色の紙に書するを以てなり。珮聲歸
向鳳池頭、宮中より退はして舍人が中書省へ歸る、是定んで詔勅を書する爲ならん。

【評論】此の篇、賈至が早朝を和する詩に於て第一とす、前六句は大明宮の早朝を表はし、七八二
句賈が事に及ぶ、和の和たる正法、是に於て見る。顧華玉が曰く、右丞が此篇直に老杜と頡頏す、
後唯岑參之に及ぶ、他皆及ばず、蓋し氣象闊大、音律雄渾、句法典重、用字清新、備はらざる所無
きが故なり、或は猶ほ全美ならざることは、衣服の字を用ふること太だ多きを以てのみと、難き哉
詩を作るや。

和太常韋主簿五郎溫泉寓目

漢主離宮接露臺。秦川一半夕陽開。青山盡是朱旗繞。碧澗翻從玉殿來。新豐
樹裏行人度。小苑城邊獵騎回。聞道甘泉能獻賦。懸知獨有子雲才。

漢主の離宮露臺に接し、秦川一半夕陽開く、青山盡く是れ朱旗繞り、碧澗翻
つて玉殿より來る、新豐樹裏行人度り、小苑城邊獵騎回る、聞道甘泉能
賦を獻ずと、懸に知る獨子雲が才あることを、

【句釋】太常は官署なり、太常寺、邦國禮樂郊廟社稷の事を掌どる。韋は姓なり。主簿は從七品
上なれば、奏任官の末席なり。五郎は章を言ふ。溫泉は驪山の麓に温湯あり、唐時湯を治して池と
爲し、山を環つて宮を列すと。開元十年、溫泉宮を置く、天寶六載、改めて華清宮と爲し増す臺殿
を起し、山谷に環列す、明皇歲幸す、日本の函關頗る形狀を同じうすと云ふ。漢主離宮接露
臺、漢書に、文帝露臺を作らんと欲して百金の費を惜み、乃ち止むと。師古の注に、新豐縣の南
驪山の頂に露臺郷あり、極めて高顯と爲す、文帝、臺を作らんと欲する處に在り。秦川一半夕陽開
離宮の爲めに秦川は掩はれて見えざるが、夕日の半懸つて明開なるあり。青山盡是朱旗繞、朱旗を
以て青山の本色を奪ふ、天子扈從の盛んなるを云ふ、「周禮」に、司旗、旗物の藏を掌どる、三を朱

旗と曰ふ。碧湖翻從玉殿來、澗水を夾んで殿閣を建つ、故に澗水は玉殿中より出るかと疑はしむるなり。新豊は秦に臨潼と稱す、漢高が父の爲めに郷里の豊民を此に移して一市街を作り、郷里に在る如き觀念を爲さしめしなり。樹裏行人度、新豊城街を此の方から望んだ形容、新豊の賑かさを度と言ふ。小苑城、は宜春苑なり、本、秦の離宮なり。邊獵騎回、新豊と同様、小苑城も殷賑であるを言ふ。聞道甘泉能獻賦、甘泉賦は前にも述べし加く漢の揚雄が諷諫したる賦咏なり。今以て韋主簿に比す。懸は「ハルカ」と訓む、遠方と限らざるが、度の意味もある、「ハカリ知ル」なり。知獨有子雲才、揚雄字は子雲、韋の才は子雲に類す、定めし、天子に驕奢を勧める様な事は爲さざるべしとなり。

【評論】此の篇、漢主より以下六句は漢宮の事を叙し、寓目の意を寫し、聞道の二句和の和たる韋の事を叙し、雄麗にして渾雅、七律の究竟なり。蔣一葵は曰く、只面前の意思を拈して詩に別才あること此の如しと。鍾惺は曰く、小景を將て大氣象を寫し出すと。吳吳山は曰く、此の結子雲を以て韋郎に比す、前篇の賈舍人と和を寫すの意、皆渾然として露はさず、神致已に足る。楊用修曰く、唐、天寶に至り宮室盛ん、秦川八百里にして夕陽一半開くときは四百里の内皆離宮なり、謂ふ可し此の言、肆にして隱なりと。奢麗此の若くにして猶漢文露臺を惜しむを以て之に比す、謂つ可し反て諷すと。明の謝茂秦は、度と賦と同韻、此れ詩家の正法にあらずと。所謂病たるを免れざるなり。

蓋し珠玉を損せず。

大同殿生玉芝、龍池上有慶雲、百官共覩、聖恩便賜、燕樂、敢書即事。

欲笑周文、譎燕鎬、還輕漢武、樂橫汾。豈知玉殿生三秀、詎有銅池出五雲。陌上堯樽傾北斗、樓前舜樂動南薰。共歡天意同人意、萬歲千秋奉聖君。

笑はんと欲す周文の燕鎬を譎ふを、還輕んず漢武の横汾を樂しむを、豈に知らんや玉殿に三秀を生ずるに、詎ぞ銅池に五雲を出すこと有らんや、陌上の堯樽北斗を傾け、樓前の舜樂南薰を動かす、共に歡ぶ天意人意に同じきを、萬歲千秋聖君に奉ぜん、

萬歲千秋聖君に奉ぜん、

【句釋】大同殿は金門内北の北。生玉芝、靈芝草を生ず。龍池は前に叙してある。有慶雲、平常見ざる雲、嘉禾芝草は下瑞、景雲慶雲は大瑞、百官闕に詣して之を賀す、下瑞と餘瑞は以聞するに過ぎず、此の事は天寶中と云ふ。百官共覩、觀は古文の睹と同じ。聖恩便賜燕樂、賜餐并せて賜樂あり。敢書即事、即日此事を書したるなり。欲笑周文は、周の武王と見るべし。謳燕鎬、西周の都は鎬京、今の陝西西安府、此に殷を亡ぼし天下を治めし事を祝ふ、今其の事を笑ふ。還輕漢武、漢の武帝は河東に幸し、后土を祀り、帝京を視て忻然、中流にして群臣と飲燕し、以て「秋風辭」を作る、

「樓船を汎べて汾河を濟り、中流に横たはり素波を揚ぐ」の句あり、其の事を輕んずる。汾水は山西の太原より出づる水。豈知、此の知は本集に如に作る、典公は知を「ヨク」と訓ず、「ヨク」でも如の意味になる、及ばんやの意なり。玉殿生三秀、三秀は芝草を言ふ、「楚辭」に、三秀を山間に采るの語あり。詎は何なり。有銅出五雲、銅池は漢の宣帝元年に金芝九莖を産すとあるが、未だ慶雲即ち五雲を出せし事を聞かずとなり、銅池は遂に龍池に及かざるなり、下瑞あるも、上瑞はあらざるなり。陌上は市街の民家を言ふ。堯樽は酒なり、酒に衢尊と泰尊とあり、衢は堯にて、泰は虞なり、傾北斗、一斗を傾くと言はずして、北斗を傾くと言ふ、多く飲むことを形容する。樓前は大同殿の樓前なり。舜樂動南薰、舜は昔、五絃の琴を彈じて南風の詩を歌ひ、以て天下治る、南薰は人をしして生生の氣を起さしむ。共歡は百官と羣臣と共に歡ぶなり。天意は天子。同人意は人民、人民も天子も歡意は同一なり。萬歲千秋は支那の古代より用ふる語、「古樂府」に、千秋萬歲樂無極とあり、奉聖君、天子を壽し奉るなり。

【評論】 此の篇、周文漢武を抑へて、今の帝王を揚ぐ、今を是とし、古を非とする所、王の思慮深きを知る。明の金氏云ふ、之を讀む只蒿枝の輕拂するが如く相似たり、小儒其の平平奇無きを詬る、知らず此れ先生の眞奇たるを、余謂ふり、豈知の一聯大巧なり、且銅池を用ひ、玉殿の對を爲す、亦池の字を影取す、孰か平平奇無しと謂ふや。唐汝詢は曰く、盛唐の高調、七子の宗とする所、高廷

禮は曰く、宏麗にして亦雅、侈靡の氣象、一時君臣相ひ悦ぶ意を寫し出すと。王高士の意或は諷する所あらんか。

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

渭水自縈秦塞曲、黃山舊繞漢宮斜、鸞輿迴出千門柳、閣道迴看上苑花、雲裏

帝城雙鳳闕、雨中春樹萬人家、爲乘陽氣行時令、不是宸游玩物華。

渭水自ら秦塞を縈つて曲り、黃山舊漢宮を繞つて斜なり、鸞輿迴に出づ千門の柳、閣道迴看上苑の花、雲裏の帝城雙鳳闕、雨中の春樹萬人家、爲めに陽氣に乗じて時令を行ふ、是れ宸游玩物華を玩ぶならず、

【句釋】 奉和は前の如し。聖製は玄宗なり。從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望の十五字は玄宗が作りし詩題なり。之作應制は王に屬す、蓬萊は大明宮なり。興慶、宮は皇城の東南に在り。閣道中は普通街路に向はずして通行する天子の道、此の道に於て春雨の景狀を歌はれし詩を王維が和するなり。渭水は隴西今の甘肅の鳥鼠山より出づるなり。自縈秦塞曲、隴西より陝西、山西にかけて、秦の塞を尤も固めし所、渭水之に縈る。黃山は渭水の北に當る。舊繞漢宮斜、黃山宮は孝惠二年に起す、武帝、西は長楊五柞に至り、北は黃山を繞り、渭に瀕して東す、周表三百里、離宮七十所と、

鸞輿は玄宗の車を言ふ。廻出千門柳、蓬萊より興慶に向ふに禁中に此の如き多くの門を出るなり。閣道は複道なり。廻看は俗に言ふ、「フリカヘリミル」なり、秦の始皇は閣道を作り、驪山に至る八十里、人は橋上を行き、車は橋下を行くと「元和志」に出づ。上苑花、上林苑の花を看る、秦の舊苑を漢の武帝が建元二年に開く、周袤三百里、羣臣遠方各名花異卉三千餘種を獻せりと、「三輔黃圖」に出づ。雲裏帝城雙鳳闕、雲裏より帝城の雙鳳闕を看る。雨中春樹萬人家、雨中より樹間の萬人家を看る。爲乘陽氣、雨中に陰氣と言はず、陽氣と言ふ、變を化して正と爲す手段なり、立春の日は天子、春を東郊に迎へて行時令なり、令を和し、惠を施し、下兆民に及ぶなり。不是宸游玩物華、天子の春游は決して春の景色を玩弄するにはあらず、古の聖天子の如く國典を飭へ、時令を行はんが爲めなり。

【評論】此の篇、王韜川の集中に於て七律の上乗に屬するもの、是の故に古今此の詩を評する者實に數十家を下らず、五六の二句に至りては、萬口稱讚に異議を容れざる名句とす。吳吳山曰く、水曲山斜總て三宮道中紆廻の景を形容す。蔣一葵曰く、迴と曰ひ迴と曰ひ盛唐、字を用ふる此の如し、小家に類せず、五六畫も亦到らず。劉化蘭曰く、前六句眼前の光景に就いて拈出し、意致餘り有り、結二句甚だ歸重あり。田子秋曰く、方に扈從應制の體を得たり。

敕賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上欄。纔是寢園春薦後。非關御苑鳥啣殘。歸鞍

競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

芙蓉闕下千官を會す、紫禁朱櫻上欄を出づ、纔かに是れ寢園春薦めて後、御

苑鳥啣殘するに關するにあらず、歸鞍競ひ帶ぶ青絲籠、中使頻りに傾く赤玉

盤、飽食須ひず内熱を愁ふるを、大官還た蔗漿の寒ゆるなり、

【句釋】勅賜百官櫻桃、四月一日、内園櫻桃を進む、寢廟即ち先帝の廟に薦め訖つて百官に頒ち賜

ふ、各差あり、王維は此の時、文部郎中たり、櫻桃は「ユストラ」今日日本殊に山形縣などは盛んに

産出するが、昔時は極めて寥寥たるものなりしなり。芙蓉闕下、芙蓉は苑名、古の曲江、文帝其の

名を惡み、改めて芙蓉と爲す、其の水盛んにして芙蓉富めるを以てなり。會千官、駕常に幸す。櫻

桃園も亦其中に在る。紫禁、紫宸殿の紫と禁中又宮禁の禁とを合して紫禁と曰ふ。朱櫻出上蘭、

上蘭觀と名づく、一閣なり、觀は道士仙人の住處より名づけるなり。纔是、暫時の間に。寢園は

即ち寢廟、陵墓なり。春薦後、薦は供へる事なり。非關御苑鳥啣殘、其の日千官に賜はるのは鳥の

啣み殘せしものにはあらず。歸鞍は千官が宮中を辭去する。競帶は銘銘に攜帶する。青絲籠、籠を

青色の絲にて結ぶなり。中使は禁中の屬官等を言ふ、亦天子の私使を中使と云ふ。頻傾赤玉盤、漢の明帝羣臣を宴す、大官櫻桃を薦む、盛るに赤瑛盤を以てす、月下に之を視れば同一色なり、皆笑うて空盤と曰ふ、中使が他の大官等が持ち歸る爲めに盤中の朱櫻を傾け、籠へ入れる意なるか、或は中使が頂戴せし分を持ち歸ると云ふ意か、詩意分明ならず、余は姑く前説を主張して、古來の説を信せざる者なり。飽食、十分に食する。不須愁内熱、「莊子」我其内熱歟とあり、注に美を食する者は内熱すとある、内熱の超る事なぞ愁へざるなり。大官還有蔗漿寒、蔗漿は柘漿と同じ、砂糖水の寒冷なるを所持すれば、内熱なぞ何の愁ふる所あらんとあり。

【評論】此の篇、前半は宮禁の事を叙し、後半は賜櫻の事を叙す、紫、朱、青、赤等の彩色を以て全篇を飾る、亦是王宗の流麗を發揮して餘蘊無きものなり。胡元瑞曰く、韓退之も、此題の七律あり、王詩の渾然たるに及ばずと。鍾惺曰く、典にして雅、三四の句尤も本事を見る、蔣一葵曰く、纔の字、下句と照應あり、無を將て有と爲す、君恩餘り有るを見る。

酌酒與裴迪

酌酒與君君自寬、人情翻覆似波瀾。白首相知猶按劍、朱門先達笑彈冠。草色全經細雨濕、花枝欲動春風寒。世事浮雲何足問、不如高臥且加餐。

酒を酌んで君に與ふ君自ら寛うせよ、人情翻覆波瀾に似たり、白首の相知猶劍を按じ、朱門の先達彈冠を笑ふ、草色全く細雨を経て濕ひ、花枝動かんと欲して春風寒し、世事浮雲何ぞ問ふに足らん、如かず高臥して且つ餐を加へんには、

【句釋】酌酒與裴迪、裴迪は王と非常に親しかりし人なり。酌酒與君君自寬、此の意は世間の毀譽に頓著せず、唯酒以て天下を樂觀するが可し、「酌酒君自寬」は梁の鮑昭が詩なり、今二字を加へしのみ。人情翻覆似波瀾、水の波瀾は風に依つて起り、起伏定め無し、人情の翻覆は毀譽褒貶に依つて起り、初めより亦定め無し。白首は老年なり。相知は知己と爲りし人を云ふ。猶按劍、油斷せぬ事を云ふ、心を許さぬ事。朱門は富豪又は搢紳を言ふ。先達は先に進みし人、位に登りし人。笑彈冠、漢の「王吉傳」に、王陽位に在れば、貢公冠を彈すと、彈冠とは官に仕へんと欲する事、此の二句人情の常ならず、後進を引薦する心無き奴輩を言ふ。草色、無名の草の色。全經細雨濕、雨と云ふ貴きものの爲めに名も無き草が濕うて枯死せず、小人等の寵握に居るを譬ふ。花枝、草に反對貴きもの。欲動春風寒、春風も無情、花が發かんと欲する意あるも、如何せん料峭たる風に逢うて開く能はず、君子の身を安する能はざるに譬ふ、以上の二句も人情の翻覆なり。世事浮雲、此の如

く波瀾あるが、皆是浮雲の如し。何足問、問は語るなり、語るに足る價値は無きなり。不如高臥且加餐、是以て自ら寛うするなり。高臥は要するに獨歩なり、無名草の濕なぞ見るに足らず、朱門の先達なぞ管仲にも鮑叔にもあらず、二足三文の徒輩なり、コンナ者を相手とせず、加餐するに如かずとなり。

【評論】此の篇、拗體を以て成る、小人の態度を言ひ盡して全く餘蘊なし、裴にあらざれば此の詩を受く可らず、王にあらざれば、此の詩を作る能はず、一二と七八の四句は裴を教訓し、三四五六は小人得意と君子失意とを言うて、而かも表面は尋常一様の時景のみ、而して時景にあらざる事は亦彰彰たり、詩にして神品に入る、其れ此等の詩か、明人の評言の如き亦論するに足らず。

酬郭給事

洞門高閣霽餘暉。桃李陰陰柳絮飛。禁裏疎鐘官舍晚。省中啼鳥吏人稀。晨搖

玉佩趨金殿。夕奉天書拜瑣闈。強欲從君無那老。將因臥病解朝衣。

洞門高閣餘暉霽たり、桃李陰陰柳絮飛ぶ、禁裏の疎鐘官舎の晩、省中の啼鳥吏人稀なり、晨に玉佩を搖かして金殿に趨り、夕に天書を奉じて瑣闈に拜す、強ひて君に従はんと欲するに老を那んともする無し、將に臥病に因つて朝衣

を解かんとす、

【句釋】郭は姓。給事は官名、前卷に辨せり。洞門と高閣と相對する、洞は深を意味す、故に高と對する。霽餘暉、正に是れ夕陽に映じてキラキラする。桃李陰陰、桃陰と李陰なり。柳絮飛、楊柳の絮が飛ぶ、正に是れ晚春、禁裏は宮城なり。疎鐘官舎晚、退出の時刻を報する鐘、已に官舎も晩なり、給事は中書省の役人なれば言ふ。省中、中書省なり。啼鳥、宿鳥が省中の樹に啼くは即ち、吏人稀、官員は退出して多く在らず。朝搖玉佩趨金殿、夜を前に叙し、晨を後に叙す、此の意は前章に度度叙したり。夕奉天書拜瑣闈、瑣闈は即ち青瑣門を言ふ、門に對して拜するなり、日日此の如きなり。強は無理にも、欲從君、君は郭を云ふ。無那老、王が自身の老いたるを叙するなり。將因臥病解朝衣、老病官に在るは本意ならず、辭職の念が有ると云ふなり。

【評論】此の篇、郭給事が事を叙するが主にて、我が情は結尾二句に叙す、我が情も單に一身の感慨にて、些の不平を寓する無し、和平溫厚の作とす。東坡の所謂、王詩、詩中に畫ありと、此の篇亦然り。

過乘如禪師、蕭居士、嵩丘蘭若

無著天親弟與兄。嵩丘蘭若一峯晴。食隨鳴磬巢鳥下。行踏空林落葉聲。迸水

定侵香案濕、雨花應共石床平。深洞長松何所有、儼然天竺古先生。

無著天親弟と兄と、嵩丘の蘭若一峯晴る、食は鳴磬に隨ひ巢鳥下り、行いて空林を踏めば落葉聲る、迸水定んで香案を侵して濕し、雨花應に石床と共に平なるべし、深洞の長松何の有る所ぞ、儼然たり天竺の古先生、

【句釋】 過は訪ふ意味に見よ。乗如は僧名。禪師は尊稱なり。蕭は姓なり。居士は尊稱、亦自稱、自ら某子と稱し、他亦某子と稱する儒家の禮と同じ、有髮にして佛を學する者、大底此の稱を以てす、東坡居士、山谷居士の類、婦人にも亦罕に稱する事あり、多くは男子なり。嵩丘は嵩山なり。蘭若は梵語、阿蘭若處の略稱、譯して「無諍」「無諱」「遠離處」と云ふ、義を以て寺の代名詞とす。無著天親弟與兄、無著は譯名、本名を阿僧伽と曰ふ、佛滅後一千年に生れし人、印度健陀羅國の人、大乘經を鼓吹して、五印を周遊し、瑜伽論や莊嚴大乘經論等を彌勒大士より傳へし人なり、天親は譯名、本名は婆藪盤豆と曰ふ、無著の弟たり、天親は真諦の譯、唯識樞要には世親と譯す、大乘論五百部、小乘論五百部あるを以て世に千部の論師と稱す。弟與兄、此の無著と天親の兄弟を以て禪師と居士とに比するなり。嵩丘蘭若一峯晴、二公の住處の景色を言ふ。食隨鳴磬、僧は今の十二時前に晝餐を終へ、「サバ」と云うて多少饗を殘し、以て鳥や犬の類へ之を食はすが釋迦の正法と

す、磬の鳴音を聞いて鳥が已に聖得知するなり。巢鳥下、「カラス」が時刻を知つて巢を下りて來る。行路空林、「大寶積經」に、在空林中常行梵行と、經行と云ふ一種の修行なり。落葉聲、踏むが爲め聲を發す、靜寂を形容するなり、迸水定侵香案濕、迸る水波にて經案も定んで濕ふならん、梁の實誌大士寶積寺水無きに因つて錫を地に卓す、泉湧くこと數尺と。雨花應共石床平、「佛祖統記」に、梁の武帝、雲光法師と經を金陵に講ず、天花を雨らすと感ず、因つて雨花臺を築く、平は平等を意味す、差別を爲さざる佛敎の旨を示す、石床は嵩丘特に多きなり。深洞も嵩山に多かるべし。長松何所有、佛敎は空を説く、然るに何の有る所ぞや。儼然正嚴亂れざる態度を言ふ。天竺古先生、釋迦牟尼佛を稱して天竺古皇、又は古先生と曰ふ、「老子化胡經」なる書に出づ、佛敎の經典に出づる語にはあらず。

【評論】 此の篇、元明の詩人、佛典を解せざるが故に何の事やら知らざる者多し、洵に清澄空明一塵滓あるを見ず、強ひて其の失を論せは、起句に無著天親を出して、下の句全く無著天親と關係なき事のみ、一句のみにして句意斷絶するは、律として一串の氣を遣る法に背く、此に至りては王も亦、「俱舍論」を讀まざりし人なること分明なり、單に兄弟なるを以て此の二師を出し以て比したりとするは、何の意義も無し、後の詩人、冀くは佛典を讀誦せられんことを。

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

李愔

別館春還淑氣催。三宮路轉鳳凰臺。雲飛北闕輕陰散。雨歇南山積翠來。御柳遙

隨天仗發。林花不待曉風開。已知聖澤深無限。更喜年芳入睿才。別館春還りて淑氣催す、三宮路轉ず鳳凰臺、雲飛んで北闕輕陰散じ、雨歇んで南山積翠來る、御柳遙かに天仗に隨つて發し、林花曉風を待たずして開く、已に知る聖澤の深うして限無きを、更に喜ぶ年芳の睿才に入るを、

【略傳】李愔「愔音チヨウ」は并州の人、左氏春秋に通ず、明經の高第に擧げられ、天寶の末、東京の留守に遷る、祿山の爲めに執へらる、既にして害に遭うて死す、司徒を贈り、忠懿と諡す、所謂忠義の士なり。

李愔傳、新唐書卷一百九十一、舊唐書卷一百八十七上。

【句釋】別館は離宮を謂ふ。春還は循り來るなり。淑氣催、冬の寒氣去つて、春の和氣來る。三宮は蓬萊と興慶と望春との三宮なり。路轉鳳凰臺、「訓解」の説に、漢の宣帝の時、鳳凰上林に集まる、乃ち鳳凰殿を作り以て嘉瑞に答ふ、此に鳳凰臺と云ふは未詳と、建築の事、今日に於て分明ならずとも可なり。雲飛、雲影消滅する。北闕は宮城を總括して云ふ。輕陰散、分明に闕が見える。雨歇、

送魏萬之京

李頎

兩脚全休。南山は終南山。積翠來、山の積翠が襲うて此の方へ來るの觀あり。御柳、御溝の柳。遙隨天仗發、天子の儀仗に隨つて柳陰が開くを云ふ。林花、上林苑の花なり。不待曉風開、待つて開くは、其の恩澤にあらず、待たずして開く、以て恩澤の大なるを知る。已知、種種の景を見て已に知る。聖澤深無限、雲は消し、雨は歇み、柳は發し、花は開く、聖澤の深く限り無き所以。更喜、其の上喜ぶは、年芳入睿才、年芳が天子の詩の中に入るなり。

朝聞游子唱離歌。昨夜微霜初渡河。鴻雁不堪愁裏聽。雲山況是客中過。關城曙色催寒近。御苑砧聲向晚多。莫是長安行樂處。空令歲月易蹉跎。朝に聞く游子の離歌を唱ふるを、昨夜微霜に初めて河を渡る、鴻雁愁裏に聴くに堪へず、雲山況や是れ客中に過ぐるをや、關城の曙色寒を催して近く、

朝聞游子唱離歌。昨夜微霜初渡河。鴻雁不堪愁裏聽。雲山況是客中過。關城曙色催寒近。御苑砧聲向晚多。莫是長安行樂處。空令歲月易蹉跎。

朝に聞く游子の離歌を唱ふるを、昨夜微霜に初めて河を渡る、鴻雁愁裏に聴くに堪へず、雲山況や是れ客中に過ぐるをや、關城の曙色寒を催して近く、

御苑の砧聲晚に向つて多し、是れ長安行樂の處、空しく歲月をして蹉跎し易からしむること莫からんや、

【句釋】李頎の略傳は前卷に出し置けり。魏萬は、唐書に傳無し。之京、長安に之くなり。朝聞、字の如く朝、出發することを聞く。游子唱離歌、言はずして別宴を張り、以て其の離歌を唱ふるを聞く。昨夜微霜初渡河、昨夜河を渡り來つて今朝京に向はんと欲するなり、蓋し其の實狀を叙す。鴻雁は哀聲を帯ぶるを以て、不堪愁裏聽、尋常猶ほ聞くに堪へず、況んや離別の席に於てをや。雲山況是客中過、居人すら雁聲を聞けば悲し、況や之を客中に聞けば、尙更に悲しとの意。關城は宛も日本の西京より東京に來り、函根邊まで來るときは、曙色は樹色に作る本もあり、樹の方を可とす。催寒近、曙は寒に切ならず、吳吳山の説の如く微霜の後、樹色漸く變ず。故に寒を催す近きなり、客途の實況。御苑、已に京に入る。砧聲向晚多、城下の砧聲は田家の砧聲と異なり、家多く人多く、隨つ砧聲多き所以なり。莫是長安行樂處、都城繁華の地、目を奪ひ、魂を蕩かすもの多し、慎んで墮落する莫かれと訓戒する。空令歲月易蹉跎、蹉跎は失脚の貌、城下へ折角赴きしも功を爲さず、白首を贏ち得たる位に止まること勿れと訓戒するなり、

【評論】此の篇、王維と並稱せられて七律の正宗と于鱗が最も心服する李頎の作なり、清迴にして酸楚、別に他奇あらず、訓戒する所、婆兒を叱呵する底の事なきこと此の詩の取るべき所とす、況

是と莫是と聞と聽と頗る病多し、學ぶ者無からん事を欲す、

寄盧司勳員外

流澌臘月下河陽。草色新年發建章。秦地立春傳太史。漢宮題柱憶仙郎。歸

鴻欲度千門雪。侍女新添五夜香。早晚薦雄文似者。故人今已賦長楊。

流澌臘月河陽を下る、草色新年建章に發す、秦地の立春太史より傳へ、漢宮の

題柱仙郎を憶ふ、歸鴻渡らんと欲す千門の雪、侍女新たに添ふ五夜の香、早晚

か雄文似たりと薦むる者あらば、故人今已に長楊を賦す、

【句釋】寄は寄懷、又寄呈なり、盧は姓。司勳員外は官名なり、尙書省、即ち我邦の内閣に吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部の六部、我邦の局と云ふ者に當るなり、司勳員外は此中の吏部に屬す、從六品上とす、官吏の勳級を掌理する。流澌は氷の解けて流るゝなり、「楚辭」に出づ。臘月は十二月なり、臘は獵に通じ、獸を取り以て祖先を祭るより來る。下河陽、河南の河南府即ち河陽なり、別を送る時を言ふ。草色は陸地のもの、前句の水中和對を取る。新年は正月、前の臘月と對す。發は人が發するにはあらず、草色が發生するを言ふ。建章は宮名なり、京地に到る時を叙す。秦地は長安を言ふ。立春傳太史、「禮記月令」に、立春に先だつ三日、太史謁して曰く、某日立春す、盛

徳木に在り、天子期に至り、公卿を率ゐ、春を東郊に迎ふ。漢宮題柱は前にも叙してあるが、漢の田鳳が尙書郎と爲り容儀端正なり、靈帝が柱に題して、堂堂たるか張京兆田郎と。憶仙郎、盧を田鳳に比したるなり。歸鴻欲度千門雪、宮禁内の景色を言ふ、千門は普通民家の事に見るは誤る、宮中に限り用ふる字なり、盧が此の景を見るならんと云ふなり。侍女新添五夜香、盧の爲めに侍せる女が、盧の朝衣へ香を焚きて暁天の用意をする事なり、漢以來甲夜と乙夜と丙夜と丁夜と戊夜と一夜を五に分つ、一夏、二夏、三夏、四夏、五夏と同じ、五夜は乃ち暁天に近き時を言ふ。早晩は半必然の詞に屬す。薦は奏薦なり。雄文似者、漢書の揚雄傳に孝成帝の時、客、雄が文相如に似たりと薦むる者あり、雄を召し、承明の廬に待詔す、明年、帝大に胡人に誇るに禽獸多きを以てせんとて民を發し、南山に入り、熊羆豪豬虎豹豺獾狐兎麋鹿を捕へ、載するに檻車を以てし、長楊の射熊館に輸し、胡人をして之を手搏せしむ、帝親臨して觀る、揚雄從つて射熊館に至り、還りて「長楊賦」を上つり、以て諷す、今其の事を借りて以て李頎が廬に己を薦奏せんことを託するなり、者は暗に廬を指す。故人は李自分の謂なり。今已賦長楊、李が才は古の揚の如く長楊賦を作るの才ありと、奏上して推薦を依頼することなり。

【評論】 此の篇、第一句は別時、第二句は到時、對句を爲し、前後二聯は盧が事を叙し、尾聯は以て我が事を叙す、早晩の七字は語を成さずと議する者あり、又相如が名を用ひずして此の如くは太

工なりと評する者あり、余も後説を取る。徐而卷の曰く、清秀、格調中晩に落ちず。顧華玉曰く、七言律、後聯弱なり易く、結句疎なり易きを思ふ、此の起句の如き固より雄渾、後聯新たに結ぶ又鄭重、眞の傑作なり。胡元瑞曰く、頎五言を善くせず、七言を善くす、此の游漸臘月極めて雄渾にして笨ならず。

題璿公山池

遠公遁跡廬山岑。開士幽居祇樹林。片石孤雲窺色相。清池皓月照禪心。指

揮如意天花落。坐臥閒房春草深。此外俗塵渾不染。唯餘玄度得相尋。

遠公の遁跡廬山の岑、開士の幽居祇樹林、片石孤雲色相を窺ひ、清池皓月禪心を照す、如意を指揮して天花落ち、閒房に坐臥して春草深し、此の外俗塵渾て染まず、唯玄度を餘して相尋ぬることを得。

【句釋】 題は記「シルス」なり。璿公は僧なり、宗璿とか、玄璿とか稱する人の下の一字に公の敬稱語を付するが釋氏に對する禮とす。此の師傳は未詳。山池は山房前の放魚池ならん。遠公、晉の高僧惠遠は、廬山の東林寺に住し、淨業を修す、六十以後山を下らざりし人なり。遁跡は隱遁の棲跡なり。廬山は江西省九江府に屬す、古代に匡俗先生なる隱者が住し、晉には高僧惠遠が住して山

名を重からしむ、璿公も此に住するなり。岑は山の小にして高き處を言ふ。開士は僧に對する尊稱語、開明の達士、菩薩、大士、皆同じ、今璿公を指す。幽居は靜幽の閑居。祇樹林、印度に祇樹なる一國の太子なり、廣大なる園林を佛陀に供じて其の說法に便ならしめしを以て、寺の異名を祇樹林と稱するに到れるなり、經文には祇樹給狐獨園とある、祇陀は須達多と云ふ富豪に依つて佛陀に歸依するに至りし人。片石は庭前の坐禪石。孤雲は一斷雲なり。窺色相、雲の孤、石の片なる小物も形ある上からは、色相も亦窺ひ得らるる、天台の説に、一色一香中道にあらざるは無しと、此の理を示す。清池皓月、清池に印するの皓月にはあらず、清池も皓月もとの意を以つて片石も孤雲もと對する。照禪心、全く俗塵なき意味を此の七字に表はすなり、禪は元來靜の意味、喧噪は濁つて、靜寂は清むなり。指揮如意、此の如意は骨角竹木を以て刻る、柄の長さ三尺許を法とす、人の手指の形を作し、以て脊の痒きを搔抓す、故に名くと、道誠の説には文殊も之を執る、豈搔痒の爲めならんや、講僧の之を執る所以は多く節文を柄に記し、忽忘に備ふ、要時に執り、目に對す、意の如し、故に名く、此の後説可なり。天花落、如意を指揮して經を講じ、天花落ちし事は唐以前梁の光澤法師は眞に此の事ありしなり。坐臥、行住坐臥は佛家の「四威儀」と稱す、今二威儀を出す。閒房は一室を言ふ、閒坊は一寺を言ふ。春草深、開士は持戒、草木を伐らず、春草が自由に生ずる所以。此外を典公は這邊と訓ず、通ずと雖も、字の如く此外で既に可なり。俗塵不染、佛法

は不染を貴ぶ、心根も耳根も眼根も決して煩惱に染まざるなり。唯餘玄度、一人の玄度即ち作者は得相尋、得は許と訓ずる可なり、晉の許詢、字は玄度、支公の會下に參じて居士として佛理に通せし人、今以て李自身が玄度に比し、璿公を遠公に比せしなり。

【評論】 此の篇、巨景に起り、細景に承け、句句悉く璿公の事を叙し、結局七字のみ自身を叙す。胡元瑞は「幽は千載に獨歩す」と。此の評言太だ可なり、照字が妙、窺字が妙、片孤清皓が諦當なりと評する類は、此の詩の面皮を知つて、其の神髓を知らざる也。鍾惺は曰く、結局尋常套語と。凡夫の見地一笑すべし、唯此の套語千載に獨歩する也、相二字あるが使用法此の如し、以て妨げざる也。

寄綦母三

新加大邑綬仍黃、近與單車向洛陽。顧眄一過丞相府、風流三接令公香。南川粳稻花侵縣、西嶺雲霞花滿堂。共道進賢豪上賞、看君幾歲作臺郎。

新たに大邑を加へて綬仍黃なり、近く單車と洛陽に向ふ、顧眄一たび過ぐ丞相の府、風流三び接す令公の香、南川粳稻の花縣を侵し、西嶺雲霞の色堂に滿つ、共に道ふ賢を進むるは上賞を蒙ると、看ん君が幾歲にか臺郎と作らんを、

【句釋】 綦母は姓なり。三は敬稱、名は潛、字は孝通、開元中、宜壽縣尉より入つて集賢院の待制と爲る。「訓解」に宜壽より洛に徙る時の詩ならんと。新加大邑、宜壽より洛陽の縣令と爲る。綦仍黃、丞尉三百石皆黃綬、即ち黄色の綬「イト」長さ一丈二尺廣さ三尺、十二月一丈二と天地人三に法とる、佩印の組なり、仍は「ヤハリ」の和訓に當る。近與單車、近日に一人車に乗じて行く、從者無きなり。向洛陽、洛陽は前に屢ば辨じたり。顧昞は俗語の御機嫌伺の事。一過丞相府、内閣總理大臣の宮舎を言ふ。風流は清風高流なり。三接令公香、魏の荀彧、中書令と爲る、好んで香を重んず、其の坐處常に三日香し、人之を令公香亦令君香と稱す、今即ち丞相を比喩す。南川の邊はなり。粳稻は秬稻と同じ、「ウルゴメ」なり。花侵縣、一縣に花が溢れて在り、農政の善く治まるを言ふ。西嶺の邊はなり。雲霞色滿堂、嶺に挂る雲霞が朱紅の色を散じて公堂に送り滿つるを言ふ、公堂の能く靜かなるを言ふ。共道、兩人で語りし事。進賢蒙上賞、漢の關内侯鄂君曰く、蕭何常に關中を全うす、此れ萬世の功なり、上曰く、吾聞く進賢は上賞を受くと、蕭何功高しと雖も、鄂君を得て、乃ち益す明なり、是に於て鄂君を封じて安平侯と爲す、上官が綦母を進級させぬ事を慨す看君、不看と言ふべきを看と言ふ味、此に在り。幾歳作臺郎、尙書郎を臺郎と曰ふ、幾歳は「イツカ」なり、君が進級して親任官の大官に上るは尙遠からん、と暗に爲政者を罵るなり。

綦母潛は唐書に傳記無し。

【評論】 此の篇、前半は全く綦母三の事を叙し、五六は現象界と農治の登るを叙し、七八、進賢者の無きを慨して以て其の人を惜む。鍾惺曰く、此等の詩、但其の氣格一種高邁の處を看よ。

送李回

知君官屬大司農。詔幸驪山職事雄。歲發金錢供御府。晝看仙液注離宮。千巖曙雪旗門上。十月寒花輦路中。不觀聲名與文物。自傷留滯去關東。

知る君が官大司農に屬し、驪山に幸せんと詔して職事雄なり、歲ごとに金錢を發して御府に供し、晝看す仙液の離宮に注ぐを、千巖の曙雪旗門の上、十月の寒花輦路の中、聲名と文物とを觀ず、自ら傷む留滯關東に去ることを、

【句釋】 李回、本名は臚、字は昭回、武宗の諱を避けて改む。知君官屬大司農は、治粟內史、秦の官、穀貨を掌理す、邊郷の調度皆報給を爲す、

李回傳、新唐書一百三十一、舊唐書一百七十八。

景帝更めて大農令と名く、武帝更めて大司農と名く、我邦の農商務省なり。詔幸驪山職事雄、驪山は天子の游苑地、此に游幸する詔、出でしより、會計の道、多忙ならざるを得ず、職事雄は、要するに屬官等が多忙を極むるなり。歲は歲歲なり、故に「歲ゴトニ」と訓む。錢金錢供御府、租税として納むる金錢を大司農で受取り、以て宮内省へ供する。晝は日日なり、看は屬官なり。仙液は溫泉

を指す。注離宮、華清もあり、甘泉もあり、花萼もあり、長樂もあり、悉く溫泉即ち仙液を引く。千巖は驪山の周圍を言ふ。曙雪旗門上、旗は旌に作る、「周禮」に帷宮を爲り、旌門を設くと、雪が薄く帷門に下るなり。十月、新曆の十月は雪未だ下らざるも、古曆なれば、惟しき事なし。寒花輦路中、巡幸の路傍に寒花が寂寞として開くなり。不觀聲名與文物、「左傳」に、臧哀伯が曰く、徳儉にして度あり、文物以て之を紀し、聲名以て之を發すと、國家の威嚴は文章器物と聲名の盛なるに在り。自傷、觀ざるが故に傷むなり。留滯去、此の去は在の意味に見る。關東に去つて在るなり、新郷縣を指して關東と言ふ、此の地の尉なればなり。

【評論】此の篇、起句より六句に至るまで李回の事を叙し、七八二句我が情を叙す、七律の正法と爲す、譚元春の曰く、結語宕にして厚、悲にして老。鍾惺曰く、景を寫して秀拔と。

宿瑩公禪房聞梵

花宮仙梵遠微微。月隱高城鐘漏稀。夜動霜林驚落葉。曉聞天籟發清機。
蕭條已入寒空靜。颯沓仍隨秋雨飛。始覺浮生無住著。頓令心地欲歸依。
花宮の仙梵遠くして微微、月は高城に隠れて鐘漏稀なるに、夜霜林を動かし
て落葉驚き、曉天籟に聞えて清機を發す、蕭條として已に寒空に入つて靜か

に、颯沓として仍秋雨に隨つて飛ぶ、始めて覺る浮生住著無きことを、頓に
心地をして歸依せんと欲せしむ、

【句釋】宿瑩公、傳は未詳、禪房は寺を言ふ。聞梵は普通誦經の聲にあらすして、梵唄、聲を長く引いて經文を讚咏するなり、之を聲名と云ふ、曹子建が魚山で始めて傳へしものなり。花宮は禪房を言ふ。仙梵、仙と佛とは異なる點もある、同じき點もある、佛陀を大仙と稱するは其の同じ點よりなり、今瑩公の梵唄を言ふ。遠微微、始めの時は聲が大ならざるを言ふ、強ひて他の解を爲す莫れ。月隱高城は、曉天即ち五更に近き時を言ふ。鐘漏稀、未だ鐘漏は鳴らざるなり。夜動霜林、動かすものは梵音が揚がればなり。驚落葉、梵音の爲めに落葉が驚き飛ぶ。曉聞天籟、自然界の鳴く音を天籟と云ふ、今梵響が天籟の如くに聞えるなり。發清機、人をして清機を發せしむるなり。蕭條は「シヅカ」乃ち梵音が調子の下がるを言ふ。已入寒空靜、梵音が散ずる所は天中にして、已に響きが止む。颯沓は衆盛の貌、仍隨秋雨飛、已に響きが止むかと思へば、復秋雨の飛と伴うて起る。始覺、覺の字「オボユ」と訓する本多きも「サトル」と訓む方可なり、有の如く、無の如く、乍ち鳴き、乍ち寂、此の如き事を見たり聞いたりしては、覺らざるを得ず。浮生は人間界を言ふ。無住著は百年も千年も常住の者無しとの意、固定したるものは無きなり。頓令、直に令むるなり、漸漸の反對なり。心地は單に心を言ふ、地の字を附したるは、心は何物でも生ずと言ふ所より、之

を附したるなり。欲歸依、佛道をして信仰せしむるに到れるなり、佛教は佛と法と僧と三種より成立する、此の三種に依ることを三歸戒と言ふ、曰く歸依佛、曰く歸依法、曰く歸依僧なり。
【評論】此の篇、起句より颯沓に至る六句は本題の叙景、七八二句我が情を叙す、作法見易し、禪梵の咏吟として信に千古に卓出せるもの、其の神理味うて愈よ出づ、玩して愈よ清し。鍾惺曰く、細潤幽亮、靜理深心と。譚元春曰く、今人何ぞ必ず學を講せん、此れ真に學問と。顧華玉曰く、詠物絶唱、以て此れに踰ゆるは無し、起句景を帯び、其の富麗を欲し、兩聯梵聲を形容す、清切奇拔、結釋理に歸す、乃ち本色を見る。

贈盧五舊居

物在人亡無見期。閒庭繫馬不勝悲。牕前綠竹生空地。門外青山似舊時。悵望青天鳴墜葉。嶮帆枯柳宿寒鴉。憶君淚落東流水。歲歲花開知爲誰。

物在人亡して見期無し、閒庭馬を繋ぎて悲しみに勝へず、牕前の綠竹空地に生じ、門外の青山舊時に似たり、悵望すれば青天墜葉鳴り、嶮帆たる枯柳寒鴉宿す、君を憶うて涙は落つ東流の水、歲歲花開くは知んぬ誰が爲めぞ、
【句釋】贈の字、題字の誤書なり、或は未亡人に贈りしならんと想像もする、然らば贈字で可なり

舊居は死せし人の居を言ふ、舊棲んだ家と見るは不可なり。物在人亡、漢の劉向が「新序」に、鄒子、襄公に謂つて曰く、其器在、其人亡、君此を以て哀を思ふ、將た安くんが哀しまざらん。無見期、物を見る、人は見ず、見の字人に繋る。閒庭繫馬不勝悲、來り以て馬を繋ぐも、主人は迎接せず、友情豈悲しむに勝へんや。牕前、閒庭より牕前に移る、句法見るべし。綠竹生空地、非情物は主人の有無に没交渉、空地があれば、發生する、物は在るなり、門外青山似舊時、牕前を見終りて今度は門外を見る、青山は依然として青山なり、而かも之を見る主人は亡し。悵望、悵みの心を以て四方を望む。青は誤字ならん、青山青天と用ふる法無し。蒼天ならんと思ふ。鳴墜葉、此の音を聞く、悲しみに勝へざる所以。嶮帆は元來山に對する高峻なる形容字、今其れを枯柳に借用して枯柳の慘凄なる状を言ふ。宿寒鴉、鴉は鷲の類「トビ」なり、鷲と誤る勿れ、鷲は雞「ニハトリ」なり、人亡くして鴉あり、悲しみに勝へざる所以。憶君淚落東流水、東流の水を見ても、君の返らざるを憶ふ、東流の字は「春秋」に本づく。歲歲花開知爲誰、非情の花、人情を解せず、主人亡きに關らず、時節來れば則ち發く、畢竟誰に賞觀せらるゝ爲めぞや。

【評論】此の篇、起句より以下六句は舊居の景を叙し、七八二句我が情を叙す、作法前の如し。鍾惺曰く、此首妙にして人反つて稱せず、大要近人律を選ぶ、假の氣格を以て、眞の才情を掩ふ。此の評言甚だ當るを覺ゆ。吳吳山曰く、五六聯對、整ならず、又嶮帆を以て枯柳に屬して用ふ、只

所見の物に就いて、落落寫し來る、工拙を計るに暇あらず、更に其の悲を見る、唐汝詢曰く。風格を才情に藏するものは物在人亡の詩か。胡元瑞曰く、盛唐偶々、晚唐に落つる者あり、李頎が物在人亡の詩是れなり。余謂ふ胡は氣格を重んじ、情性を重んぜざるが故に此の評あり、平心に之を評すれば、逸品の部に屬し、神品の部には遠し、以て斷案と爲す、花宮仙梵の神品上に在るに於てをや。

望薊門

祖詠

燕臺一去客心驚、笙鼓喧喧漢將營。萬里寒光生積雪、三邊曙色動危旌。沙場

烽火侵胡月、海畔雲山擁薊城。少小雖非投筆吏、論功還欲請長纓。

燕臺一たび去つて客心驚く、笙鼓喧喧たり漢將の營、萬里の寒光積雪に生じ、

三邊の曙色危旌に動く、沙場の烽火胡月を侵し、海畔の雲山薊城を擁す、少

小投筆の吏にあらずと雖も、功を論じて還つて長纓を請はんと欲す、

【句釋】祖詠の略傳は前卷に出し置けり。望は眺望。薊門關は、古の燕、今の直隸省に屬す。燕

臺一去は、「燕臺ヲ一去」と見るにあらず、「燕臺ニ一來スル」事なり、長安より去つて此に來るなり、

小兒讀を爲すと大に誤まる。客心驚、平生想像外に遇ふ故驚くなり。笙鼓喧喧、娛樂の爲めに笙鼓

を吹く軍人が喧喧たり、笙と戎とを混する勿れ、此の如きは驚く所以、或は筋に作らば、娛樂の爲にあらず。漢將營、將校の陣營此の状態なり。萬里寒光生積雪、北方は陰山や燕山の山脈重疊して山の積雪が寒光を放ち、心膽を寒からしむ。三邊は南西、北所謂蒙古の沙漠邊を言ふ。曙色動危旌、ギラギラ光る曙色が旌影と共に搖動する、危は竿を言ふ。沙場烽火侵胡月、烽火が盛んに揚がり爲めに匈奴の天に上る月影を侵す。海畔雲山擁薊城、渤海灣の方面に當る雲山を言ふ、此の雲山が薊城を取り圍む。少小は今自身を云ふ、典公の「集註」少小ヨリと附す、「ヨリ」は無用なり、今老人にあらずるなり。雖非投筆吏、武人にあらずと雖もの意、投筆の吏は即ち武人なり、賀部員外郎が自分の職分。論功、字の如く、武功を論賞せらるる者。還は歸還してなり。欲請長纓、此の長纓は武人に限る、文人には無用のもの、然るに此の武人の盛んなる状態を見ては自分も亦武功を施し度き心が生ずとなり、功賞に預り度しと言ふにはあらず。

【評論】此の篇、燕臺より海畔に至るの六句、軍狀と四面の景狀とを撮影し、七八二句、自身の情

思を叙す、七律の正法見るべし。鍾惺曰く、調高語壯。又曰く、生動侵擁の四字頗る犯す。動詞の

ウルサキを言ふ、信に然るを覺ゆ。余今謂ふ、雪月共に入聲、是れ亦犯すを覺ゆ、驚心の結果の詩

或は此の犯を知らずに通過せしものか。

九日登仙臺呈劉明府

崔署

漢文皇帝有高臺。此日登臨曙色開。三晉雲山皆北向。二陵風雨自東來。關門令尹誰能識。河上仙翁去不回。且欲近尋彭澤宰。陶然共醉菊花杯。風雨東來。關門令尹誰能識。河上仙翁去不回。且欲近尋彭澤宰。陶然共醉菊花杯。

【句釋】崔署は宋州の人、開元十六年の進士、此の外に傳無し。九日は九月九日重陽なり。登仙臺、河南の陝州に屬す。呈は寄呈なり、面呈にはあらず。劉は姓。明府は縣令の尊稱語とす、刺史、太守、縣令、此の三官通じて明府と尊稱す。漢文皇帝有高臺、前漢の文帝の時、河上公が廬を河の濱に結ぶ、帝「老子」を讀み解せざる事あり、因つて其の菴に幸し、車を下り稽首す、公素書の老子章句二卷を授け、遂に所在を失す、帝、臺を築き以て之を望祭す、仙臺即ち是れなり。此日は九日を指す、是日ならんと思へども、文章にあらざる故、此日でも可ならん。登臨曙色開、青天白日なる事。三晉は山西省に當る、河南の鄰省とす、韓魏趙は本晉の六卿、晉を亡ぼして三晉と號すと、「孟子」の注に見ゆ。雲山皆北向、仙臺より望めば、山西地方は北方に當る。二陵は河南の永寧府に在り、

南陵は夏后阜の墓、北陵は文王の風雨を避けし所。風雨自東來、此の風雨は今日來ると見るにあらず。曙色開の字、遂に無用に歸す、昔時の風雨を想像して言ふ。關門令尹は老子に教を請うた喜を言ふ、陝州は即ち函谷關所在地なり。誰能識、今日令尹が周の大夫と爲つて内學を善くし、老子の教を聞き、俱に流沙に遊び、終る所を知らざる人、其の事を識る者は誰ぞや。河上仙翁去不回、河上公も去る所を知らざる人、再回せずと嘆嗟するなり。且欲は崔署自身が此の心を起すなり。近尋彭澤宰、晉の陶淵明は彭澤縣令と爲る、九日に逢うて酒無し、宅邊叢菊中に坐する久し、忽ち江州の刺史王弘、白衣の人をして酒を送り至らしむ、便ち此に於て忻然として獨醉ふ、今、令の字上に在るを以て宰とす、縣令は古の邑宰なればなり、今以て劉に譬ふ。陶然自樂、「陶然自樂」の詩より來る。共醉菊花杯、明府と二人にて酒を飲み、以て此の日を樂しまん、九日に菊花酒を飲むは人をして長壽ならしむとの傳説あり。

【評論】此の篇、漢文より以下六句は、他の想像を叙し、七八二句は我が情を叙す、七律の正法とす、神仙は期すべからず、唯酒以て佳節を共にせんとの意を以て結ぶ。蔣一葵曰く、慷慨中、意を寓す。中唐人此の氣骨無し。鍾惺曰く、七言最も後聯弱く、結語疎なるを忌む、此の作の如きは雄密と、顧華玉曰く、句律典重、通篇勻稱、情景分明、一意直下、固とに法と爲すに足る、但看る意律雅渾ならず、絶た中唐に似たり、蔣の爲めに破さる。

五日觀妓

萬楚

西施謾道浣春沙。碧玉今時鬪麗華。眉黛奪將萱草色。紅裙妬殺石榴花。新歌一曲令人豔。醉舞雙眸斂鬢斜。誰道五絲能續命。却令今日死君家。西施謾に道ふ春紗を浣ふと、碧玉今時麗華を鬪はしむ、眉黛奪將す萱草の色、紅裙妬殺す石榴花、新歌一曲人をして豔せしめ、醉舞雙眸斂鬢斜めなり、誰か道ふ五絲能く命を續ぐと、却て今日君が家に死せしむ、

【句釋】萬楚は「唐書」に傳無し、李白同時の人ならんと。五日は五月、端午の節日なり。觀妓、歌舞以て人の興を添へる女の職を妓と言ふ。西施、會稽縣の東に土城山あり、此に採薪の女あり、西施と名く、勾踐之に禮儀を習はしめ以て吳王に獻す、「吳越春秋」「震宇記」に出づ。謾道、エライ事の様に人が喋喋する。浣春紗、諸暨に浣浦あり、西施此に紗を浣ふと、詩意は此の如く謾に稱せらるゝ西施も遂に此の妓女には及ばずとなり。碧玉は宋の汝南王の妾、王の寵愛甚だし、或は人名とせず、奇麗なる妓を形容せしに過ぎずと、人名と見る方可。今時鬪麗華、妓女が容色と装態とを競争する形容を言ふ、「南史」に陳の後主の張貴妃、名は麗華、髮の長さ七尺、聰慧にして神彩あり、容色端麗、神仙の若しと。眉黛、黛を以て眉を「エガク」なり。奪將、二字で奪ふなり、將字

平用極めて輕し。萱草は一名宜男草、花、紅黃紫の三種あり、懷妊者之を帶ぶれば、多く男を生むとの俗説あり。色、便ち其の紫色を比す、宜男の色も及ばざるなり。紅裙は腰より下に著ける服。妬殺石榴花、石榴は花中で最も色なるもの、其の石榴をして顔色なからしむる程、裙色が紅なり。新歌一曲、紅唇を開きて流行歌を歌ふ。令人豔は、ツマリ人をして佳聲に酔はしむるなり。醉舞雙眸は一身の表情を言ふ、酒を聊か飲み面をホンノリとし千兩の目を以て人を見る。斂鬢斜、鬢のホツレを抑へて容に向ひ、表情を愈よ弄す。誰道、此の道字は起句の道とサハル。五絲能續命、五月五日吳中の風俗として五彩の絲を以て臂に繋ぎ之を續命縷と名く。却令今日死君家、命を續ぐ絲は即ち人を縊る絲と爲る。

杜侍御送貢物戲贈

張謂

銅柱朱崖道路難。伏波橫海舊登壇。越人自貢珊瑚樹。漢使何勞獬豸冠。疲馬山中愁日晚。孤舟江上畏春寒。由來此貨稱難得。多恐君王不忍看。

銅柱朱崖道路難し、伏波橫海舊と登壇、越人自ら貢す珊瑚の樹、漢使何ぞ勞せん
獬豸の冠、疲馬山中日の晩るゝを愁へ、孤舟江上春寒を畏る、由來此の貨
得難しと稱す、多に恐る君王の看るに忍びざらんことを、

【句釋】張謂の傳は前卷に出せり。杜は姓、侍御は官名、送は張謂に送寄し來るなり。貢物、屬國より本國の朝廷へ獻するものを總稱して貢物と云ふ、他人へ分配すべきものにあらず。戲贈、諷贈と書くべきなれども、露骨なれば、戲贈と爲したるもの。銅柱、後漢の馬援南方交趾を征し、漢土との境界を分たんと爲め、銅柱を建つ、分茅嶺上に在り。朱崖は即ち崖州、廣東省の最端、日本で言へば天鹽の宗谷岬の如き位置に屬す。道路難、遠國にて交通不便の地。伏波は馬援、即ち伏波將軍なり。横海の功有るが爲め、又韓説を横海將軍と言ふ。舊は唐代より漢代を指す、登壇、將軍に任せらるゝ親任式場に登る。越人、廣西廣東の人。自貢珊瑚樹、朝廷への獻上物は其の土地の名産に限る。海國は即ち珊瑚を以て第一の誇とす。漢使何勞、越人が珊瑚を携帶して貢するが故、此方より使者を遣はすの勞は無し。獬豸冠は前に辨じ置けり、今之を求めに行く勞は無し、古の伏波横海の二將軍は行いて之を求めしなり、獬豸冠は侍御史の戴く冠以て杜を諷す。疲馬山中愁日晩、此れは越人が貢し來る道中の心配を言ふ、寶物なれば、盜賊なぞの途中を愁ふ。孤舟江上畏春寒、風土

の異なるに依つて、此は身體を畏怖する、前は寶物を愁ふ。由來は「モトヨリ」なり。此貨稱難得、「老子」に得難きの貨を貴まざれば、民をして盜を爲さざらしむと。多恐は非常に恐るゝなり。君王不忍看、民意を憶ふ君王は、此の貨を看るに忍びざるなり、民をして盜を爲さしむる虞れあり、又遠方より貢し來る越人が辛勞を憶うて看るに忍びざる意なるか、余は前説を可とするものなり。
【評論】此の篇、一二は古の事を叙し、三四は侍御を諷譏し、五六は越人の心事を叙し、七八は我が身分に歸す、杜の面目を破却する事甚だ大なり。田子秬曰く忠君愛國の意を得たり。蔣一葵曰く、不レ忍レ看三字最佳と。鍾惺曰く、諷刺の體、深厚にして立言法有りと。難二字あるも共に存すべし、動かし難し。

送李少府貶峽中王少府貶長沙 高適

嗟君此別意何如、駐馬銜杯問謫居。巫峽啼猿數行淚、衡陽歸雁幾封書。青楓
江上秋天遠、白帝城邊古木疎。聖代即今多雨露、暫時分レ手莫躊躇。
嗟す君此の別意何如、馬を駐め杯を銜んで謫居を問ふ、巫峽の啼猿數行の涙、
衡陽の歸雁幾封の書、青楓江上秋天遠く、白帝城邊古木疎なり、聖代即今雨
露多し、暫時手を分つて躊躇する莫れ、

【句釋】 高適の傳は前卷に出し置けり。李は姓、少府は官名、少府監が總理にて、少監、丞、主簿、録事あり、收税を掌理する役なり、李と王とは少府監なりや、少監なりやを詳かにせず。貶は左遷なり。峽中は四川の夔州。長沙は湖南省なり。嗟君、二人が嗟くを言ふ。此別意何如、何故に此の離別を嗟き玉ふぞやと問ふ氣味也。駐馬啣杯、別燕の席を言ふ。問謫居、自分の謫せらるゝ地を他人に問ふ、巫峽、巫は山名、峽は山際を言ふ。啼猿蜀中の猿多きは他に無き所、此の啼聲を三度聞くときは、數行涙、覺えず斷腸涙を垂ると言ふ、「荊州記」に、漁者歌うて曰く、巴東の三峽巫峽長し、猿鳴三聲涙裳を沾すと、是れ李の方を云ふ。衡陽は湖南の衡州府の衡陽縣なり。歸雁、衡陽に回雁峯あり、雁衡陽に到るときは過ぎずと、或は峯勢雁に似たる故と、傳説は多く前説を取る。幾封書、音信の甚だ自由ならざるを言ふ、是れ王の方を云ふ。青楓江は長沙に在り。上秋天遠、長安と隔たり遠きを云ふ、是も王の方なり。白帝城は蜀の成都に在り。邊古木疎、秋日なれば春日以上に人をして景色が貶人を傷ましむるなり。聖代は玄宗にあらずして、肅宗の年を云ふならん。即今は只今と同じ。多雨露、雨露の霑は即ち二人が長安へ召還せらるゝ事を云ふ。暫時分手莫躊躇、早早行け、兒女の態を作す勿れと慰む、躊躇はグズグズすること。

【評論】 此の篇、一二の句は二人を叙し、三は李を叙し、四五は王を叙し、六は李を叙し、七八の句は二人に結歸す、一題にて二人を送る、何等の巧妙ぞ、作者自身は曾て蜀彭二州に刺史たるが故

に、地利特に記憶する所、問に依つて答ふること分明なり。譚元春曰く、語淡にして悲しと。盛唐の正音、此等の詩に於て見るべきなり。

夜別韋司士

高館張燈酒復清。夜鐘殘月雁歸聲。只言啼鳥堪求侶。無那春風欲送行。黃

河曲裏沙爲岸。白馬津邊柳向城。莫怨他鄉暫離別。知君到處有逢迎。

高館燈を張りて酒復清く、夜鐘殘月雁歸る聲、只言ふ啼鳥侶を求むるに堪へ

たりと、那ともする無し春風行を送らんと欲するを、黃河曲裏沙岸と爲り、

白馬津邊柳城に向ふ、怨む莫れ他郷暫く離別するを、知んぬ君が到る處に逢

迎有らん、

【句釋】 夜別は字の如し。韋は姓、司士は官名、參軍なり。高館張燈、離別の燕席は漢人の最も盛んにする所、一流の料亭は送別の爲めと謂つて可なり。酒復清、肴の第二義にて酒の第一義なる、日本と同様なり。夜鐘殘月、殆んど徹宵痛飲したるもの、四更の鐘西に傾く月に至る。雁歸聲、雁を以て別愁を添へる、彼の鳥は一年中住せざればなり。只言、韋が言ふなり。啼鳥は上の雁を指す、普通用ふる「毛詩」の黃鳥と見ては淺し。堪求友、「毛詩」の語なり、雁の如きは友鳥を愛すること強

し、一鳥打たるれば他鳥は其の屍を啣んで去らんとす、狩獵者の皆知る所、況んや人間に於て友を愛せざるものあらんや。無那、俗語の仕方が無いと云ふこと。春風欲送行、無情の青風之を止めずして之を送らんと欲す。黄河曲は黄河は崑崙より出でて萬里も流る、河千里毎に一曲すと「水經」の説に見ゆ。裏沙爲岸、岸は渾て白沙なるを言ふ。白馬津は漢の高祖が辛苦して守りし所、河南の衛州に在り。邊柳向城、津邊は悉く碧柳を以て圍む。莫怨他郷暫離別、舊知と分るゝと雖も、又新知あらん、故に怨む莫れと言ふ。知君到處有逢迎、司士參軍として他郷の人も權迎するならん。

【評論】此の篇、前半は送別の事を叙し、五六は韋が向ふ處を叙し、七八は特に慰諭の言を以てす。譚元春曰く、夜鐘の句、末語と限り無き深恩と。鍾惺曰く、只啼鳥春風柳城沙岸を以て別意を寫し出し、自から黯然を覺ゆ。七八二句は後世之に倣はゞ陳套に墮し、讀むに堪へず、唐人に在つては可、今人に在つては不可なり。

和賈至舍人早朝大明宮之作

岑參

鷄鳴紫陌曙光寒。鶯囀皇州春色闌。金闕曉鐘開萬戶。玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旗露未乾。獨有鳳凰池上客。陽春一曲和皆難。

鷄紫陌に鳴いて曙光寒し、鶯皇州に囀じて春色闌なり、金闕の曉鐘に萬戶を

開き、玉階の仙仗千官を擁す、花は劍佩を迎へて星初めて落ち、柳は旌旗を拂うて露未だ乾かず、獨鳳凰池上の客有りて、陽春の一曲和する皆難し、

【句釋】岑參の傳は前卷に出せり。和賈以下十二字の意は王維の詩注に於て辨せり。鷄鳴紫陌、鷄の字は「毛詩」に「女曰鷄鳴」とあるに本づく、紫陌は通過する街なれど、宮城へ向ふ路なり。曙光寒、昨夜の冷氣未だ全く去らず、寒き所以。鶯囀皇州、鶯は曙光を認むるが故に已に城中に囀す。春色闌、八分通り春色は過ぎたるなり、酣と闌と混ざるを許さず。金闕は宮中を言ふ。曉鐘、時刻を報ずる鐘聲に、開萬戶は、宮城内の萬戶に限らず、一般に開くなり、然れども宮城内の萬戶を主意とす。玉階仙仗、天子が歩する階の上下儀衛の具即ち旌旗の類を以て。擁千官、已に朝登する千官を圍繞する。花迎劍佩星初落、星の没する比に至り花色が始めて分る。柳拂旌旗露未乾、露の未だ乾かざる所以は、尙早朝なればなり。獨有鳳凰池上客は、即ち賈至舍人を指す。鳳凰池は中書省なること前に述べたり。陽春一曲和皆難、宋玉が楚王の問に答へて、客、郢中に歌ふ者あり、其の始め下里巴人と曰ふ、國中屬して和する者數百人、其の陽春白雪と爲る、國中屬して和する者數十人、其の曲彌よ高うして其の和彌よ寡なし。

【評論】此の篇、鷄鳴より以下六句は大明宮早朝の景色を叙し、七八二句は本題の賈至舍人に歸す、賈至が早朝詩成るや、王維、岑參、杜甫の三家以て之に和す、意を和して、韻を和せず、乾元二年

肅宗初めて鳳翔府より京に還る、時岑參補闕たり、杜甫拾遺たり、王維右丞たり、而して賈至は舍人たり、同時唱和其の詩並に此の選に收む。唐汝詢の曰く、岑と王とは矯矯として相下らず、舍人は雁行す、少陵は當に退舍すべし、蓋し尺も短とする所有り、寸も長とする所有り、一詩を以て優劣を議すべからずと。余按ずるに此の如き題目の詩は第一に字を選ばざるべからず、此の篇、全體先づ無難なり、只星落の二字、實事なりと言はば其れまでで論は無きが、選字の法として甚だ不可なるを覺ゆ、況んや落と客と同じく入聲、一種の詩病たるを免れざるに於てをや、善なる所は古人已に評せり、余は其の善ならざる所を言ふのみ。

和 祠部王員外雪後早朝即事

長安雪後似春歸。積素凝華連曙輝。色借玉珂迷曉騎。光添銀燭晃朝衣。

西山落月臨天仗。北闕晴雲捧禁闈。聞道仙郎歌白雪。由來此曲和人稀。

長安雪後春の歸るに似たり、積素凝華曙輝に連なる、色玉珂に借して曉騎迷ひ、光銀燭を添へて朝衣晃なり、西山の落月天仗に臨み、北闕の晴雲禁闈を捧ぐ、聞道く仙郎の白雪を歌ふを、由來此の曲和人稀なり、

【句釋】 祠部は祭祀に關する役を司とる。王は姓。員外は官名。雪後早朝即事の六字は、王の原題

なり、早朝は出勤の曉景を言ふ。長安雪後似春歸、白雪は一面に白花を開くが如き壯觀なるを以て、春歸と云ふ、歸は來なり。積素は白雪なり。凝華、樹樹華を凝す。連曙輝、雪華が曙輝と映發するなり。色借玉珂、雪の白色と、馬具の飾具と共に玲瓏。迷曉騎、孰れが雪、孰れが珂か見分け付かざるを迷と云ふ。光添銀燭、雪の光と燭の光と共に熒煌。晃朝衣、雪光と燭光との爲め、王が朝衣殊に晃らかに見ゆ。西山落月、殘宵の餘景を言ふ。臨天仗、白きを以て落月かと思ふ、諦視すれば是れ雪の白く天仗に臨むなり。北闕晴雲、禁中の晴雲と思ひしは晴雲にあらず、是れ晴雪なり、捧禁闈以て闕の高層なるを表はす。聞道は「キク」なり、道の字何等の意義もあらず。仙郎は王員外を云ふ。歌白雪、王が雪を詠じたる原作を言ふ。由來此曲和人稀、前首の和賈至の詩と意義全く同じ。

【評論】 此の篇、蔣一葵の評する如く、百鍊字を成し、千鍊句を成し、工言ふべからず。劉化蘭曰く、頷聯四の虛字妙、後聯雲月を借りて至尊の氣象自ら別なるを影出すと。四の虛字とは、借迷添晃の四字を言ふ。顧華玉曰く此の篇、題雪後の二字を添へて句句之を見る、用字溫麗音律雄渾其の中に行る、結故實を用ひ、天造に出るが如し、精金美玉、自ら瑕疵なし。諸家讀すること此の如し、然れども仔細に之を闕するに、結句は賈至に和したる語を再出し、落月は星落と殆んど同じ、大家として同題に對する手段は他にあるべきと思はるるなり、大家として變化の力なきは、大家の面目にあらず、落月晴雲を實事即ち字の如しと見たる者もあり、虛を借り實に對すと見たる者あり、

余は後説を取る。

西掖省卽事

西掖重雲開曙暉。北山疎雨點朝衣。千門柳色連青瑣。三殿花香入紫微。平
明端笏陪鵷列。薄暮垂鞭信馬歸。官拙自悲頭白盡。不如巖下掩荆扉。

西掖の重雲曙暉を開き、北山の疎雨朝衣に點ず、千門の柳色青瑣に連なり、
三殿の花香紫微に入る、平明笏を端して鵷列に陪し、薄暮鞭を垂れて馬に信
せて歸る、官拙にして自ら悲む頭の白盡するを、如かず巖下に荆扉を掩ふに、

【句釋】西掖省は中書省なり。卽事は思ひ生ぜし事を直ちに記すの意、岑時に官右補闕と爲つて、
西省に在り。西掖重雲開曙暉、西掖に居りて曉起以て曙暉の開くを見る。北山疎雨、此の雨は將に
霽れんとする雨、疎は小なり。點朝衣、點は俗語の「チヨット」なり、少し朝衣に當る。千門は宮城
内の千門なり。柳色連青瑣、青瑣闕まで柳樹が連接するなり。三殿は蓬萊殿、紫宸殿、含元殿なり。
花香入紫微、紫微宮まで花香が薰發する、紫微宮は天宮を指す。平明は地上一般に明らかに見える
時。端笏、端は正しくする、笏は象牙製と竹木製とあり、五品以上は象牙、六品以下は竹木なり、
岑は木製を持つ。陪鵷列、官僚の列に居る事を言ふ、鳳の黄色なるものを鵷と曰ふ。薄暮は地上

一般に暗くなる時。垂鞭、悠悠とするが故にムチを垂るゝ也。信馬歸、馬は路を能く知る動物なれ
ば、信すも迷はずして歸る、日日此の如く也。官拙、碌碌として俸に活くるのみ、故に拙と云ふ。自
悲頭白盡、官等も進まず、功も樹てず、而して老大に至る、悲しむ所以。不知は及ばざるなり。巖
下は自然を意味す、役所の不自然と反對なり。掩荆扉、退官して荆扉を閉ち自然を樂しむに及かず
となり。

【評論】此の篇、起句より、以下六句悉く對句を爲し、結末二句のみ散句とす、前半は官省の事を
叙し、後半は我が情を叙し、不平の意、顯然たり、夫れ在朝者は官等の高下に關せず、一意國家の
爲めに盡さん事を思ふが本旨なり、亦詩人の領地なり、然るに此の不平を漏らす、學問に乏しく、
詩章に富む、根本の出發を誤るの致す所、到底淵明の白日掩荆扉の遺意を得ざるなり。

九日使君席奉餞衛中丞赴長水

節使橫行西出師。鳴弓擲甲羽林兒。臺上霜威凌草木。軍中殺氣傍旌旗。預

知漢將宣威日。正是胡塵欲滅時。爲報使君多泛菊。更將絃管醉東籬。
節使橫行西出師、弓を鳴らし甲を擲く羽林の兒、臺上の霜威草木を凌ぎ、
軍中の殺氣旌旗に傍ふ、預め知る漢將威を宣ぶる日、正に是れ胡塵滅せんと

欲する時、爲に報ず使君多く菊を泛べて、更に絃管を將て東籬に酔へと、

【句釋】九日は九月九日なり。使君は知府、誰なるを知らず。奉餞、餞に奉を加ふ、尊稱の極なり。衛中丞も未詳、中丞は御史中丞の略、正五品の人。長水は河南省河南府の長水縣なり。節使は節度使即ち衛を指す、節を建て往使する義なり。横行は我が威を墜さざるを言ふ、畏怖して赴く者の反對なり。西出師、出征する事、孔明に「出師表」あり。鳴弓擐甲、強弓を張り甲を擐く力ある、擐は貫なり。羽林兒は兵士を言ふ、羽は驚撃の意、林は森木の意を以て武官を言ふ。臺上は御史臺なれば即ち衛に比す。霜威は衛の強威を言ふ。凌草木、霜一たび下れば草木悉く凋む如く、衛の威亦霜の如く、人間草木共に凌ぐとなり。軍中、正しく軍に臨めば。殺氣、敵に當る氣勢を言ふ。傍旌旗、旌旗の盛んなるは、強き所以。預知、出發の時から知る。漢將は衛を指す。宣威日、敵を降伏して城下の盟を爲さしむる日を言ふ。正是は斷定の辭なり。胡塵、匈奴の兵塵なり。欲滅時、我が威を宣ぶる時は、胡の滅する時、胡の滅する時は、我が威の宣ぶる時なり。爲報、爲の字は緣也と注して「ヨル」なり、其の故に報すと云ふ氣味。使君が今日送別の燕を開きし發起人なればなり。多泛菊、平常の九日より多くなり。更、其の菊を泛べた上に。將絃管、舞妓なぞを斡旋させて、醉東籬、此の日の燕を盛んにし、此の行色を壯にせんとなり。

【評論】此の篇、前六句は中丞が事を叙し、七八二句は使君に對して、我が希望を叙し、歸宿する

所、中丞に在り。譚元春曰く、老成淳雅と。九日を賀するは年年の例なり、然るに今日は特別であれば、多泛と勸め、爲報と言ひ、更醉と言ふ所以、嘉州前作に比すれば巧妙の作と謂つ可し、長水は誤謬にて天水ならんとの説、信に近し、甘肅省は古の隴西、漢代天水郡の地なり、河南にては胡塵と言へざるなり。

首春渭西郊行呈藍田張二主簿

回風度雨渭城西。細草新花踏作泥。秦女峯頭雪未盡。胡公陂上日初低。愁

窺白髮羞微祿。悔別青山憶舊溪。聞道鞦韆多勝事。玉壺春酒正堪攜。

回風度雨渭城西。細草新花踏んで泥と作る、秦女峯頭雪未だ盡きず、胡公

陂上日初めて低し、白髮を窺ふを愁へて微祿を羞づ、青山に別るを悔いて

舊溪を憶ふ、聞道らく鞦韆勝事多しと、玉壺の春酒正に攜ふるに堪へたり、

【句釋】首春は正月、渭西郊行は渭水の西郊を散策する。藍田は西安府、張は姓。二は尊稱。主簿は官名、從七品の下級なり。回風は「楚辭」に出づ、旋轉の風、強風の事なり。度雨は強雨なり。渭城西、古の咸陽、今の西安府なり。細草新花は柔艸と柔花なり。踏作泥、強風強雨の爲め狼藉せられ泥土と作る。秦女峯は西安府にあり、秦王美女を蜀王に獻ず、蜀王、五丁をして山を開き女

を迎へしむ、秦の女山に上り化して石と爲るとの傳説あり。頭雪未盡、東西千里に互る山、首春は猶寒し、雪の盡きざる所以。胡公陂は鄠縣に在り、旁に虞思胡公の廟あり。上日初低、夕陽已に逼らんとするなり。愁窺白髮羞微祿、前の西掖の詩、官拙にして自ら悲む頭白盡と殆んど同一意なり、白髮微官を非常に愁へ、念頭を去らざりし事明明たり。悔別青山憶舊溪、岑は南陽の人なれば、其の南陽故郷の青山を出て他郷に居るを悔い、其の舊溪の住處を憶ふとなり。聞道は前述の如し。輞川、藍田縣の輞川は岑が同時の王右丞が別莊を構へ八勝在る地。多勝事、紅塵と遠ざかり、景勝多きなり。玉壺は今日のガラス瓶と見れば可。春酒正堪攜、春酒を携帶して遊ばんと欲するが、主薄は我が游を許すや否やと問ふ氣味なり。

【評論】此の篇、前半景を描き、後半情を叙す、客觀と主觀と錯綜して甚だ工力を弄す、嘉州集中上乘なるものに屬す、然りと雖も、他首に叙せし意を、又此の首に於て反覆するは、變化縱横の才と稱し難し。蔣一葵曰く、愁羞悔憶の四字並に一聯の中に用ふ、大手筆にあらずんば能はずと。嘉州以て限す可し。

暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬

柳躡鶯嬌花復殷 紅亭綠酒送君還 到來函谷愁中月 歸去磻溪夢裏山 簾前

春色應須惜 世上浮名好是閒 西望鄉關腸欲斷 對君衫袖淚痕斑

柳躡鶯嬌花復殷たり、紅亭綠酒君が還るを送る、到來す函谷愁中の月、歸去す磻溪夢裏の山、簾前の春色應に須く惜むべし、世上の浮名好は是閒なり、西郷關を望めば腸斷えんと欲す、君に對して衫袖淚痕斑なり、

【句釋】暮春は三月なり。虢州は弘農郡、古の虢郡。東亭は送別の料亭なり。李は姓。司馬は官名。

扶風は鳳翔府即ち西都の扶風縣なり。別廬は別莊なり。柳躡、躡は垂下の貌。鶯嬌、嬌は媚びるなり。花復殷、殷は朱きなり。紅亭、朱塗の料亭。綠酒は美酒。送君還、好時節に君が還るを送るなり。到來の成語は到に重きを置く、來は意味なし、「到ル」なり。函谷愁中月、函谷關に上る月も愁中に見て歡中に見ざりし旅況を言ふ。歸去、重きは歸に在り、去は隨伴するに過ぎず。磻溪は鳳翔府寶雞縣の東南に在る、呂望の釣を垂れし所、函谷は河南靈寶縣の南に在り。夢裏山、平生夢にだも忘れざる山、今實に歸去するなり。簾前、紅亭の簾前なり。春色應須惜、惜むが故に柳垂れ鶯鳴き花殷たる所以。世上は簾前に及ばず。浮名は春色に及ばず。好是閒、等閒に付して可なり。西望郷關は、岑自身を言ふ、南陽の杜陵は扶風と鄰る。腸欲斷、情緒に堪へざるなり。對君、李に對して。衫袖は衣袖なり。淚痕斑、支那人は禮として泣く事もあり、泣く事を商賣と爲す者あり、痛惜の極

泣くもあり、要するに泣く事は自由自在なり。

【評論】此の篇、前六句は李が事に關し、七八二句は我が事を叙す、正法正宗なり。蔣一葵曰く、起語豔麗にして音切急に下面遂に寛緩。又曰く、到來歸去の二句は三昧の語最も頓悟を要すと。洵に然り、頓悟せずして鈍根の徒には此の意味解せざるなり、顧華玉曰く、此篇深厚婉轉、盛唐虚を用ふるの最も高き者、然れども亦略景事を帶ぶ、全虚を作さず岑嘉州に在りて傑製の部に屬す。

萬歲樓

王昌齡

江上巍巍萬歲樓。不知經歷幾千秋。年年喜見山長在。日日悲看水獨流。獼猴

何曾離暮嶺。鷓鴣空自泛寒洲。誰堪登望雲煙裏。向晚茫茫發旅愁。

江上巍巍たり萬歲樓。知らず經歷幾千秋ぞ、年年喜び見る山長へに在るを、

日日悲しみ見る水獨流るゝを、獼猴何ぞ曾て暮嶺を離れん、鷓鴣空しく自ら

寒洲に泛ぶ、誰か登望に堪へん雲煙の裏、晚に向として茫茫旅愁を發せん、

【句釋】王昌齡の傳は前卷に出せり。萬歲樓は江蘇省鎮江府城上西南の隅に在る、晉の刺史王恭が建つ。江上は鎮江上なり。巍巍は高層を言ふ。

王恭傳、晉書卷八十四。

萬歲樓、王恭が定皇后の兄として將軍と爲り、勢力に任せて建て、萬歲の名を以てせり。不知經歷

幾千秋、樓を建てし王恭は桓元の爲めに殺されしも、此の樓は其れ以來何年を経て居るぞ。年年喜見山長在、山色依然、喜見する所以。日日悲看水獨流、一去還らず悲看する所以。獼猴は猿猴の一種なり、俗に尾長猿と稱す、尾を以て鼻を塞ぐ。何曾離暮嶺、其の住家を離れざるを言ふ、離れざるは彼の幸福を意味す。鷓鴣は「シマツドリ」水鳥なり、溪谷の間に棲み、曾て卵生せず、口より其の雛を吐くと云ふ。空自泛寒洲、空しく寒洲に泛ぶは、彼の不幸を意味す。誰堪登望雲煙裏、萬歲の名は非常に善いと思つて登臨して見れば、風景は人を喜ばしめず、却て悲しましむ。向晚茫茫、向は「ナンナントシテ」と訓む、晩方ならんとする時。發旅愁、眼界が茫茫として郷山を見るに由無し、旅愁を發する所以。

【評論】此の篇、江上以下の六句は萬歲樓の景にして七八二句は我が情を叙す。蔣一葵曰く、起句輕率と。譚元春曰く、細かに看れば、亦遠神ありと。徐而菴曰く、調極めて平澹、幸に醜句無し。今謂く王江寧は七絶に長じて、七律に長せず、長せざる所を以てして此に至る、明人の論何ぞ輕重するに足らん、見と看の對の如きは、白璧の微瑕と見れば可なり。

題張氏隱居

杜甫

春山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。澗道餘寒歷氷雪。石門斜日到林丘。不貪

夜識金銀氣。遠害朝看麋鹿游。乘興杳然迷出處。對君疑是泛虛舟。

春山伴無獨相求。若木丁丁として山更に幽なり、澗道の餘寒氷雪を歴、石門の斜日林丘に到る、不貪夜識る金銀の氣、遠害朝に看る麋鹿の游興に乗じて杳然として出處に迷ふ、君に對して疑ふ是れ泛べる虚舟かと、

【句釋】張氏は分明ならざるが、魯中の諸生張叔明ならんと、張は徂徠山に隠れて李白等と交遊し、竹溪六逸の一人なり、氏は家の意なり。隱居、徂徠山の棲家を言ふ。春山無伴、一人で張を訪ふ。獨相求、其の隱居を求むる。伐木、樵父が伐木の聲。丁丁は木を伐る音の形容、「サウサウ」なり、「テイテイ」にあらず、山更幽、其の音を聞くと、何にも音がせざるより、更に幽靜を覺ゆ。澗道は谷間の道路なり。餘寒は寒期去つて後の寒を言ふ。歷氷雪、氷雪の消ゆること遅きが故に澗は春猶寒きなり。石門斜日、張氏が此の石門に夕日が中つて居る。到林丘、正しく張が住する場處を言ふ、到達したる時、早夕日なり、不貪は「フタン」と訓む。夜識金銀氣、左傳に、子罕曰く、吾不貪を以て寶と爲すと、「天官書」に、敗軍破國の墟下金寶を積む、上に皆氣ありと、貪らざるが故に其の金氣を識る、貪る者は識るを得ざるなり。遠害は、世間の利害名害に遠ざかるなり。朝看麋鹿游、動物中麋鹿は穩和なるものなり、仙の友とする所、張氏も此と相共に遊ぶなり。乘興、面白

宣政殿退朝晚出左掖

味に乗じて。杳然「莊子」の杳然と同じ、深きなり。迷出處、山深く入りてより遂に其出づる路に迷ふに至る、出は出て還ること、處は留まり坐すること。對君は張に對して。疑是泛虚舟、「莊子」に舟を方にして河を濟るに虚船あり來つて舟に觸る、褊心の人ありと雖も怒らず、人能く己を虚しうして以て游べば其れ孰か能く之を害せんと、俗に云ふ心置きせず、交際出来る人と云ふ意味なり、自分の身を虚舟かと疑ふなり。

天門日射黃金榜。春殿晴薰赤羽旗。宮草霏霏承委珮。爐煙細細駐游絲。雲近蓬萊常五色。雪殘鳩鵲亦多時。侍臣緩步歸青瑣。退食從容出每遲。天門日射黃金の榜、春殿晴薰す赤羽の旗、宮草霏霏として委珮を承け、爐

煙細細として游絲を駐む、雲蓬萊に近うして常に五色、雪鷓鴣に残りて亦多時、侍臣緩歩して青瑣より歸る、退食從容として出づること毎に遅し、

【句釋】宣政殿は含元殿の後に在る、之を正衙と謂ふ、朔望之に御す。退朝晚出左掖、杜は官拾遺なり、門下省に屬す、故に左掖と言ふ。天門は字の如く天の門なるが、借りて宣政殿を云ふ。日射、白日の影射る如きを言ふ。黄金榜、黄金で宣政殿の三字を記せる、標榜即ち「フダ」なり、額と見ても可。春殿も宣政殿なり。晴薰赤羽旗、日射の爲め赤羽旗が益す赤色を輝かす。宮草霏霏は菲菲の誤りなり、草の氣が勃勃として芳香を放つ貌なり。承は捧げる如く見える。委珮は、身に著ける勳章を言ふ、「曲禮」に主の珮垂るときは臣の珮委すと、地に委する也。爐煙は御爐の煙なり。細駐游絲、煙が游絲に接するなり、游絲は影弄と云ふもの、晴日にあり、雨日になし。雲近蓬萊、大明宮は即ち蓬萊宮なり。常五色、春日晴妍なるときは五彩の雲を見る。雪殘鷓鴣、鷓鴣觀上に猶ほ殘雪あり。亦多時、暫時の反對、其の意知り易し。侍臣は杜自身なり。緩歩はユルユル歩くなり。歸青瑣、青瑣即ち左掖より歸るなり。退食は食せん爲め家に歸る、「毛詩」の語なり。從容は「オチツキテ」と云ふ意。出每遲は、「毛詩」の委蛇委蛇たりと同義にて、ゆるゆるとして、せまらざるを言ふ。

【評論】此の篇、前六句は朝會の時を叙し、七八二句は晚出の事を叙す、寫景細緻にして句格高し、

良に「毛詩」召南の遺風を得たるもの。譚元春の曰く、淡にして味あり、玩すべしと。此の詩を評して淡と云ふ、何等の無識ぞや、淡にあらすして、精なるものなり。

紫宸殿退朝口號

戶外昭容紫袖垂。雙瞻御座引朝儀。香飄合殿春風轉。花覆千官淑景移。晝漏稀聞高閣報。天顏有喜近臣知。宮中每出歸東省。會送夔龍集鳳池。戶外昭容紫袖垂。御座を雙瞻て朝儀を引く、香は合殿に飄へつて春風轉じ、花は千官を覆うて淑景移る、晝漏聞くこと稀にして高閣報じ、天顏喜び有りて近臣知る、宮中より出でて東省に歸る毎に、夔龍を會送して鳳池に集まる、

【句釋】紫宸殿、大明宮の南より北を含元殿と爲し、又北を宣政殿と爲す、又北を紫宸と爲す、内便殿是れなり、之を上閣と謂ふ、日之に御す。退朝口號、退くに當り、咏吟するを口號と曰ふ。戶外は天子の室外を言ふ。昭容は九嬪の一、正二品、天子朝に坐する時、宮人引いて殿上に至るなり、昭儀と昭容と昭媛と修儀と修容と修媛と充儀と充容と充媛是れ九嬪なり。紫袖垂、字の如く紫色の衣袖が垂れる、雙瞻は二人の昭容が内に向ひ却行するなり。御座、孔雀座の方へ眼を注ぐなり。

引朝儀、天子を御座へ引くなり。香飄合殿、衆多の殿閣に此時香煙が飄散する。春風轉、風の轉ずるが故に香が飄ること知る可し。花覆千官は、合殿外の景色、上は内なり、此は外なり、朝する千官を言ふ。淑景移、日光が漸漸移りゆくなり。晝漏、晝間の時計。稀聞、時計の音が「コツコツ」と鳴る「セハシク」音がせざるゆゑ、聞く稀と言ふ、遲日の實況なり。高閣報、時計外に高閣即ち上閣より報する時刻なり、時牌を回章する。天顔は天子、龍顔と同じ。有喜、天子が機嫌能きなり。近臣知、杜も亦近臣の内なり、杜は近臣にあらずと注したる本あり、誤まる。宮中毎出歸東省、東省は左拾遺の住する門下省なり、歸る度毎に、會送、見送るなり。夔龍は官僚を言ふ、本是れ二臣の名、今借用するなり。集鳳池、中書省に集まるを送り出すなり。

【評論】此の篇、戶外より天顔に至る六句は入朝の景を叙し、七八二句は退朝の事を叙す、七律の正法、一毫も紊れず。鍾惺曰く、三四春容富麗と。范元實曰く富貴の詞と。

曲江對酒

苑外江頭坐不歸。水精宮殿轉霏微。桃花細逐楊花落。黃鳥時兼白鳥飛。縱飲久拚して人共に棄て、懶朝眞に世と相違ふ、吏情更覺滄洲遠。老大徒悲未拂衣。飲久拚人共棄。懶朝眞與世相違。吏情更覺滄洲遠。老大徒悲未拂衣。苑外江頭に坐して歸らず、水精宮殿轉霏微、桃花細かに楊花を逐うて落ち、

黃鳥時に白鳥と飛ぶ、縱飲久拚して人共に棄て、懶朝眞に世と相違ふ、吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、老大徒らに悲しむ未だ拂衣せず、

【句釋】曲江は長安に在り、前卷に之を辨せり。對酒は飲酒と同じ。苑外は芙蓉苑外なり。江頭、曲江頭に、坐不歸、酒を飲み盡さずんば内省へ歸らず。水精宮殿、閭闔が水精宮を構へて、尤も珍性を極む、皆水府より出づと、「述異記」に在る、天上を言ふと見るべし。轉霏微は暮色に逼らんとするなり。桃花細逐楊花落、實事を叙して、以て比する所あるなり、細字工夫の有る所亂飛せず、是を以て細なり。黃鳥時兼白鳥飛、是も實況を叙し、以て比する所あるなり。縱飲は大酒飲と言ふに當る。久拚は楚人凡そ物を揮棄する之を拚と謂ふ、自暴氣味で何事も放棄するなり。人共棄、杜と云ふ人間は酒ばかり飲み、困まる奴だと云うて人が棄て、顧みない、自身先づ棄つるのであるに由つて其の字を用ふ。懶朝、内省へ出勤するに懶きなり。眞與世相違、世人と順せず其れに反對なり。吏情は官吏氣質を言ふ。更覺滄洲遠、滄洲は仙人の國、官吏と爲ると、一種の俗氣が身に著き、仙人とは益す遠くなり、仙俗の離れ甚だしくなるを慨す。老大徒傷、官吏はイカヌと老大に至るまで傷む心はあるが、徒らにして實行せず。未拂衣、常に退官に志し而かも斷然として決行せず、遂に隱者と爲る能はざるなり。

【評論】此の篇、公が至徳二年洛陽に在つて作る所、前半は曲江の叙景、後半は自身の述懐なり、

桃楊真白は自對格の法。徐而菴曰く、或は疑ふ公是の時、房琯を救うて論徒さる、故に是非ありと。然れども論徒の時、安んぞ從容酒に對することを得ん、意ふに公別に謂ふ所あらん、公方に一官を得て、曲江の諸作暫時と曰はざれば即ち暫酒と曰ふ、懶朝と曰はざれば即ち拂衣と曰ふ、亦以て公人に合せずして、朝に安んせざるの意を見る可し。李商老曰く、徐師嘗て老杜が墨迹を見る、其の初に云桃花欲共楊花語、自ら淡墨を以て三字を改去す、乃ち知る古人の詩改むるを厭はざることを。

九日藍田崔氏莊

老去悲秋強自寬。興來今日盡君歡。羞將短髮還吹帽。笑倩傍人爲正冠。

藍水遠從千澗落。玉山高並兩峯寒。明年此會知誰健。醉把茱萸仔細看。
老い去つて悲秋強ひて自ら寛うす、興來りて今日君が歡を盡くす、短髮を將て還帽を吹かれんことを羞ぢ、笑つて傍人を倩うて爲に冠を正す、藍水遠く千澗より落ち、玉山高く兩峯を並べて寒し、明年此の會知誰か健ならん、酔うて茱萸を把りて仔細に看る、

【句釋】 九日、九月なり。藍田は山名、一名玉山、又覆車山と名く、陝西の藍田縣の東南三十里に在り。崔氏が別莊に赴き咏じたる詩なり。老去悲秋、國を憂へ家を憂へ、秋益す悲し、而かも、強

自寬、悲い哉、秋の氣たるなれど、此の如く悲しんではイカヌと強ひて「クツロゲル」なり。興來、少しく元氣が出で來る。今日盡君歡、崔氏が招待に應じ其の馳走を受けるなり、辭退せざるは興來ればなり。羞將短髮還吹帽、晉書「卷九十八叛逆傳に、桓温が荊州を鎮す、孟嘉參軍爲り、九日宴に龍山に從ふ、風來りて嘉が帽を吹き落す、蓋し醉倒せし也、帽が落つれば、人に短髮を見らるゝを羞づるなり、短髮は老人なればなり。笑倩、倩は壻即ち「ムコ」の義と、使即ち「ツカフ」の義あり、今は使の義なり。傍人爲正冠、落ちて羞を顯はさん様に人を雇うて冠絲を堅く結ばせるなり、君子衣冠を正しうすは、「論語」の語なり。藍水は藍田縣に洲あり方三十里、其の水北流して溪谷の水を合す、之を藍水と言ふ。遠從千澗落、其の水源の深く且遠きを言ふ。玉山は即ち藍田山の異名。高並兩峯寒、玉山が頂上二峯に分れあるを言ふ、泰山華山の兩峯なりとの古注は非なり。明年此會知の知は「シル」にあらす知己の「チ」なり、知人を言ふ、知人中で誰か明年健在なりやとなり。醉把茱萸、俗に「グミ」之を茱萸と言ふ。仔細看、九月九日に茱萸と菊花酒を飲めば渾ての邪惡を辟けると云ふ俗説が、唐以前より有るなり。

【評論】 此の篇、杜律中缺くべからざる作とす、細かに之を検すれば、崔氏が別莊の景としては五六の二句に在り、其餘は杜自身の事のみ叙す、馳走の禮詩としては不足の感あるも、杜の面目も亦此に存するやも知れず。蔣一葵曰く、三四流水對、七言に在りて尤も難し、按ずるに帽と冠と相

犯すに似たれども、但吹帽故事を假りて言爾と。落の字寒の字に應ず、結句達人の言、子細は方言にして雅と。鍾惺曰く、仔細看の三字、悲甚だし、限り無き情思、妙、說出せざるに在り。楊廷秀曰く、一篇の中、句句皆奇、一句の中、字字皆奇、古今の作者之を難す、惟子美九日詩、八句便字字對屬し、三四古人の公案を翻盡す、五六詩人此に至りて筆力多く衰ふ、今且雄傑挺拔、一篇の精神を喚起す、筆力山を抜くにあらずんば此に至らず、結意味深長、幽然窮まり無し。陳后山曰く、孟嘉落帽前世以て勝絶と爲す、子美が羞將の十四字、其の文雅曠達、昔人に減せず。劉禹錫曰く、詩中茱萸の字を用ふる者凡三人、杜云ふ醉把茱萸仔細看と、王右丞云ふ遍插茱萸少一人と、朱傲云ふ學他年少種茱萸、三君用ふる所を變ふるに、子美を優と爲す、「詩醇」の評、意頗る頹唐、筆則ち老健、頸聯撐拄、自からは是れ衆流を截斷するの句。

野望

西山白雪三城戍。南浦清江萬里橋。海內風塵諸弟隔。天涯涕淚一身遙。唯將

遲暮供多病。未有涓埃答聖朝。跨馬出郊時極目。不堪人事日蕭條。

ず、馬に跨がり郊を出でて時に目を極むれば、堪へず人事の日に蕭條たるに、

【句釋】

野望を望野に作る本あり、意義同じ。西山は雪山即ち雪嶺、甘肅より四川へ涉りての山脈を云ふ。白雪三城戍は今日西藏の打箭爐に置きしものはれ三城戍なり、吐蕃の攻略を防ぐ。南浦は蜀の成都府。清江萬里橋、蜀大城の南門を江橋と曰ふ、江橋より南に渡るを萬里橋と曰ふ、孔明が費禕が吳に聘するを送りて、此に至りて曰く、萬里の行、此に始まると、是に因つて名を得と、此の西南に杜甫草堂今猶在りと曰ふ、題にある如く、今杜が望む所此に在り。海内風塵は天下の戦亂と云ふ意味。諸弟隔、公が弟の事「唐書」に傳無きも、公が本集「弟を憶ふの詩」少ならず、亂離の際東西分離せしものなり。天涯涕淚、漂浪の悲慘と云ふ意味。一身遙、諸弟は涕淚するや否やを知らず、一身は涕淚を以て悲しむ。唯將遲暮、我が身は早や老いて何事か爲さんと欲するも如何せん、供多病、健全なる身體自由ならずとなり、多病は公が自實にて、「史記」の留侯性多病の文字を取りしにはあらざるべし。未有涓埃、一「シヅク」一「チリ」程も、答聖朝、君恩に奉答せし事はあらず。跨馬出郊時極目、馬に跨がり郊外へ出て四邊特に三城戍の方を見る。不堪人事、人事の字公が心血のある所、天事にはあらず。日蕭條、景狀がサビシキなり。

【評論】此の篇、野望の名に託して、失政を悲しむなり、朝廷吐蕃の寇を怖れて三城の戍を嚴にすと雖も、政令の出づる法、悉く誤まり百姓疲弊して亦力を施すに至らず、高適が疏、三城の戍を

かんとす、朝廷納れず、公建明に阻す、太息する所以。蔣一葵曰く、自家の衷臆を話出す、妙其處に在り、然れども一身祇以て多病に供す、以て聖朝に報せず、則ち天涯の涕淚豈に徒らに我が私の爲めならんや、此の明年吐蕃は京師を陥し、西山諸州皆没す、公が痛嘆固より其の所なり。

登樓

花近高樓傷客心。萬方多難此登臨。錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今。北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵。可憐後主還祠廟。日暮聊爲梁甫吟。

花は高樓に近うして客心を傷ましむ、萬方多難にして此に登臨す、錦江の春色天地に來り、玉壘の浮雲古今變ず、北極の朝廷終に改めず、西山の寇盜相侵す莫れ、憐む可し後主の還祠廟せらるるを、日暮聊か梁甫の吟を爲す、

【句釋】登樓、高閣なり、吐蕃が京師及び松州、維州、保州の三州を陥る。花近高樓、花は人を樂しましむるが、本領たり、然るに今は爾らず。傷客心、喜ぶものを見て却つて傷む。萬方は天下と見て可なり。多難は種種使用法廣けれど、今は戰亂と見て可なり。此登臨、此の樓に登る。錦江は蜀の成都府に在り。春色來天地は、二種の解釋あり、錦江の天地は悉く春色なりと、更に錦江の春色は天地ありてより以來同じきなりと、此の二說の中で、余は前説を可とす、此の如く解して

も人事と異なり、來るべき時には來ると見る。玉壘は山名、灌縣の西北に在り。浮雲は春色と異なり、朝暮に變改す。變古今、興廢常無きを言ふ、以て國家の變遷に比す。北極は北辰なり、天の中に居、以て四時を正すと云ふ所より、帝王の居所に比す。朝廷は今の語で言へば政府に近し、然れども尤も切なるは天廷宸廷即ち帝室と見るに在り。終不改、中國の改變なき事は、彼の浮雲と異なる、決して改むる處なし。西山は西藏即ち吐蕃を指す。寇盜、彼からは攻め來るなり、此からは國を奪はん爲めの攻略ゆる寇盜なり。莫相侵、吐蕃は此の時、成都に攻め來るなり、登樓に因つて西北を望んで之を知る。可憐後主、蜀の劉禪は玄德が前帝なれば、此は後主なり、此の後主も亡國の君と爲らざれば、普通の祠廟なるが、亡國の君主ゆゑ先主の廟中に合祠せられてある、可憐の二字、杜が涙の存する所なり。日暮聊爲梁甫吟、孔明は躬ら隴畝に畔し、好んで梁甫吟を爲す、其の詩、「歩いて齊城の門を出で、遙かに望む蕩陰里、里中に三墳あり、纍纍として正に相似たり、問ふ是れ誰が家の塚と、田疆古冶氏、力能く南山を排し、文能く地理を絶す、一朝讒言を被りて、二桃三士を殺す、誰か能く此の謀を爲す、相國齊の晏子、昔齊の景公、士三人あり、田開疆、公孫接、古冶氏なり、功を恃んで禮無し、晏嬰公に請ふ、饋るに二桃を以てし功を計つて食ましむ、田古功を論じて先づ食す、公孫怒りて自刎す、田古慚ぢて亦自刎す、杜が今孔明が作りし此の詩を吟するは、孔明の忠志を憫れみ、蜀の滅亡を悲しみ、以て今日の爭亂を痛めばなり、梁甫は梁父も同じ、泰山

の下の小山の名、小山の雖も、書を爲すことは、甚だし、其の故は天子泰山に封じ、君王を有徳に輔佐せんと欲するも、小人讒邪の阻む所と爲る、此の名ある所以と。

【評論】此の篇、景に對して情を叙し、情に就いて景を叙し、精力を極む。徐而恭曰く、上句動かし得ず、却つて板様ならず、下句感愴の語翻つて宏麗を成す。沈歸愚曰く、世に諸葛其の人有人を望む、何等の抱負。又曰く氣象雄傑、宇宙を籠蓋す、此杜詩の最上なる者。詩醇の評に、律法甚だ細、隱衷極めて厚し、獨雄渾高闊の象を以て千古を陵轍せず。

秋興

玉露凋傷楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。江間波浪兼天涌。塞上風雲接地陰。叢菊

兩開他日淚。孤舟一繫故園心。寒衣處處催刀尺。白帝城高急暮砧。

玉露凋傷す楓樹林、巫山巫峽氣蕭森、江間の波浪天を兼ねて涌き、塞上の風雲地に接して陰る、叢菊兩び開く他日の涙、孤舟一に繋ぐ故園の心、寒衣處處刀尺を催す、白帝城高うして暮砧急なり、

【句釋】秋興、秋氣感に觸れ、百事紛集、秋ならざる句あり、秋なる所あり、一定せず、公夔州に在り、歸らんと欲して得ず、此の詩八首を賦す、此の選、四を取る。玉露凋傷、凋むは霜の爲め、露

の爲めならざるも、霜氣と言はず、玉露と言ふ所、杜の拙處を見る、此の杜の拙處、他人の妙處に超えて居ることも亦知らざるべからず。楓樹林、晩秋の楓林なり。巫山巫峽、共に蜀中の名勝とす、巫山は夔州府城東一百三十里に在る、山に望霞と翠屏と朝雲と松巒と集仙と聚鶴と淨壇と上昇と起雲と飛鳳と登龍と聖泉との十二峯あり、巫峽は杜宇の鑿する所、以て江水を通ず、連山七百里、略間斷無し、亭午夜分にあらざるより、日月を見ずと。氣蕭森、此の山と峽との氣色が蕭森即ち凄味あるなり。江間は峽の間を言ふ。波浪兼天涌、波が風の爲め激して其の高きを表はして言ふ。塞上風雲、巫山の上、白帝城邊の風雲。接地陰、下方まで陰翳なるを言ふ。叢菊兩開他日淚、去年も此の地で觀た菊を今年も復觀て涙の種と爲るを言ふ。孤舟一繫故園心、古來より二説ある、孤舟一繫して未だ去時あらず、則ち故園の心、舟の爲めに繋がる、一説は孤舟は此の地に繋ぐも心は則ち故園に在り、後説を以て可とす。寒衣處處催刀尺、防寒衣を製する爲めに處處に刀尺即ち衣類を仕度する用意を爲す、なせそれを知ると云ふに、白帝城高急暮砧、此の城は巫山の頂に在り、此の城は即ち一の市街なり、城中より聞ゆる音は唯練を搗つ砧なるが、羈客は衣無し、益す情に關する所以なり。

【評論】此の篇、一景一情、一實一虛、巧態を極む、江間の七字は、孤舟の七字に應じ、叢菊の七字は、塞上の七字に應ず、後人之を稱して交股體と云ふ。譚元春曰く神清横逸と。屠長卿曰く或謂ふ

杜は萬景皆實なり、李白は萬景皆虛なり、乃ち實を右にし、虚を左にす、而して謂ふ、李杜の優劣虚實の辯に在りと、願ふに詩虚あり實あり、虚虚あり、實實あり虚にして實なるあり、實にして虚なるあり、並行錯出何ぞ端倪すべけん、杜の秋興の如き托意深遠、三方を播弄し、羣品を鼓鑄せんとす。安んぞ萬景皆實なるに在らん、李の古風十首の如き托物慷慨安んぞ其の萬景皆虚なるに在らん。范德機曰く、作詩實事多きときは健、虚字多きときは弱、但亦全虚にして意味無窮なるもの、叢菊孤舟十四字の如き、何ぞ嘗て健ならざらん、錢愚山曰く、頷聯悲壯、頸聯悽緊、節を以てすれば杪秋、地を以てすれば高城、時を以てすれば薄暮、刀尺寒に苦しみ、急砧別れを促す、末句興懷を標舉し、五重を略有す、所謂嗟峨蕭瑟真に言ふべからず。

一一

千家山郭靜朝暉。日日江樓坐翠微。信宿漁人還泛泛。清秋燕子故飛飛。匡衡

抗疏功名薄。劉向傳經心事違。同學少年多不賤。五陵衣馬自輕肥。

千家の山郭朝暉靜かなり、日日江樓翠微に坐す、信宿する漁人還つて泛泛、清秋の燕子故らに飛飛、匡衡疏を抗げて功名薄く、劉向經を傳へて心事違ふ、同學の少年多く賤しからず、五陵の衣馬自ら輕肥、

【句釋】千家は俗語の千軒と見よ。山郭、山に在る町、千軒餘の町と云ふ氣味、千は萬と代へざるなり。靜朝暉、曉天に夔州城を見れば、寂寥として音なし。日日、毎日毎日。江樓、江邊の樓上。坐翠微、翠微は山の異名、山上に江あり樓あり、坐する者は杜自身なり。信宿、信は再なり。一宿以上を云ふ。漁人、漁を以て生活する者。還泛泛は、「ウカブ」一字にて「ウカブ」二字の時は「フハ」して居る貌。清秋燕子、秋は去るべきが燕子の性、然るに清秋に尙去らずして、故飛飛、山郭に飛ぶ、船は宿を越えて尙他江へ去らず、燕子は夏を過ぎ尙ほ去らず、二者共に我に似たるなり。匡衡は、漢の元帝の時の人、元帝即位す、是の時、日蝕地震の變あり、帝問ふに政治の得失を以てす。衡上疏す、帝其の言を説び、衡を遷して光祿太子少傅と爲す、杜は拾遺たり、上疏して房琯を論ず、而して黜けらる。抗は上なり、疏は書

匡衡傳、前漢書卷八十一。劉向傳、前漢書卷三十五。

なり、功名薄、匡は厚なり、我は薄なり、我が薄を字の上で匡に付す。劉向は、漢の宣帝の時、行修飭を以て諫大夫と爲る、初めて穀梁春秋を立て、五經を石渠に講論す。傳經心事違、劉は大夫と爲ること三十年間なり、心事違ふこと無し、我も經學を傳ふれども、事と志と毎に違ふ。同學、少時よりの同窓の友。少年多不賤、多くの友人は功名も薄からず、心事も違はず、志を當世に得たるなり。五陵は長陵と安陵と陽陵と茂陵と平陵となり、漢初に齊楚の大族を長陵に徙す、後世二千石、高貴富人を諸陵に徙す、故に五陵は豪俠の聚まる所と爲る。衣馬自輕肥、衣の輕きは、美衣なり、

馬の肥えたるは善馬なり、富人にあらざれば爲す能はず、「論語」に肥馬輕裘とある即ち是れなり。
【評論】 此の篇、前半は景、後半は情、景は今の具體的、情は今の抽象的なり、己が不遇を嘆ず、外界無心の漁人や燕子は我と殆ど境遇を同じうするが、我と境遇を同じうせざる者は匡衡なり、劉向なり、而かも是れ古人、及ばずと雖も可なり、同學少年輩の得意揚揚は我遂に見るに忍びずと、山郭の靜なる、五陵の輕肥なる、千古人をして心酸ならしむ、然りと雖も、一時に屈して萬世に伸ぶる者、亦以て瞑するに足る。

三

蓬萊宮闕對南山。承露金莖霄漢間。西望瑤池降王母。東來紫氣滿函關。雲

移雉尾開宮扇。日繞龍鱗識聖顏。一臥滄江驚歲晚。幾回青瑣點朝班。

蓬萊の宮闕南山に對す、承露の金莖霄漢の間、西望すれば瑤池王母降り、東來の紫氣函關に滿つ、雲は雉尾に移りて宮扇を開き、日は龍鱗を繞りて聖顏を識る、一臥滄江歲晚に驚く、幾回か青瑣朝班を點せん、

【句釋】 蓬萊宮闕、永安宮を改稱せしこと前に辨せり。對南山も已に辨せり。承露金莖霄漢間、建章宮前の銅柱高さ二十丈、大さ七圍、上に仙人あり、掌に露を承く、玉屑に和して之を飲む、長生の

法なりと言ふ。西望瑤池降王母、漢の武帝傳に七月七日、西王母嘗て武帝の別殿に降る、列子に、周の穆王、駕を命じて遠遊す、崑崙の邱に昇り、遂に西王母と瑤池の上に宴すと、今悉く玄宗が道教を信する漢武に似たるを悲しむなり。東來紫氣滿函關、此の詩意は前に叙せり、老子が關を出でし時、此の紫氣が起りて令尹が其れを知りしなり、玄宗が仙道の邪曲を信するを諷するなり。雲移雉尾開宮扇、天子、朝を受くるに當り、雉尾影開きて之を望めば雲の如きを言ふ、雉尾は扇の名「唐儀衛志」に天子朝に臨む、雉尾の障扇四、小なる團雉尾扇四、方雉尾扇十二ありと、護衛の美人之を持するなり。天子自ら持する扇にはあらず。日繞龍鱗識聖顏、龍顏光動き之に就けば日の如きを言ふ、「韓非子」に、龍の蟲たるや喉下に逆鱗あり、徑り尺、人主亦逆鱗あり。一臥滄江、滄州と江湖なり。驚歲晚、我昔し幾回か朝に列す、今は江湖に起臥して早や歳も晚れぬと驚き嗟す。幾回は、集賢院待制や右拾遺や工部員外郎などの官を何遍も經來る。青瑣點朝班、點は列の意味に見よ、又的在の意味。

【評論】 此の篇、秋興の題目には聊かも關係無し、此等の詩を興とするは狂人にあらざるより、寧ろ愚人なり、是の故に秋興の題目は斷じて重きを置かざるに若かず。徐士彰曰く、蓬萊宮闕は明皇の神仙に事ふるを言ひ、昆明池水は明皇の邊功を事とするを言ふ、而して末但感慨の意を寓す。

四

昆明池水漢時功。武帝旌旗在眼中。織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。波漂菰米沈雲黑。露冷蓮房墜粉紅。關塞極天唯鳥道。江湖滿地一漁翁。

昆明池水漢時の功、武帝の旌旗眼中に在り、織女の機絲夜月に虚しく、石鯨の鱗甲秋風に動く、波菰米を漂はして沈雲黒く、露蓮房に冷にして墜粉紅なり、關塞天を極めて唯鳥道、江湖滿地一漁翁

【句釋】 昆明池は長安城の西南に在り。水漢時功、漢の武帝の鑿せし功と言ふ。武帝旌旗在眼中、武帝は此の池中にて海軍の戰術を講習して以て胡を征せし功を樹つ、今其の事を想へば、其の威風凜たる旌旗が吾が眼中に彷彿として出で來るなり。織女機絲虛夜月、池の左右に牽牛織女の二神の石像を置くなり、夜月暗うして其の機絲を虚しうするを言ふ。石鯨鱗甲動秋風、池上に石造の鯨魚あり、雷雨毎に鳴吼し鬣尾皆動く、鬣尾は即ち鱗甲なり。波漂は搖かすなり。菰米、一名を凋胡と言ふ、池中に生ず、秋に至り其の實米の如し、又名、芟白、歲久しきもの中心白を生ず、臺小兒の臂の如し、臺中黒あるもの之を鬱と言ふ、後に至り實を結ぶ、乃ち彫胡米なり。沈雲黒、菰米を結ぶ、長さ寸許り、霜後之を采る、大茅針の如し、皮黒褐色其の米甚だ白し、滑膩飯と作して香

脆と、周禮の供御乃ち六穀九穀の數、今の沈雲黒は即ち芟鬱なり。露冷蓮房、昔時は宮人が船を浮べて蓮房を采りしなり、今は然らず、蓮房は露冷にして采する者なし。墜粉紅、昔時は墜粉なを恐くは見る能はざりしなり、今は自ら開き、自ら墜つ。關塞、蜀中の關塞を言ふ。極天唯鳥道、鳥道は小徑の事、今借りて以て我が天涯流落して關塞阻隔、鳥の飛び去る如くなる能はざるを慨す。江湖滿地一漁翁、到る處に隨つて江湖に一漁翁たるのみ、胡人内に入り、長安屢陷れられ、誰も救ふ者なし、漢武が胡人を征服したる事を想ひ、以て其の旌旗を望むなり。

【評論】 此の篇、全集八首順序次第ある中の第七に當る、一三五七と撮り、二四六八と除く、其の八首軒輕する能はざる名篇なるが、玉露凋傷と、昆明池水との二篇、特に傑出せるものと爲す。昆明の起句より、露冷の六句に至る池水に就いて感慨を叙し、關塞の二句以て我一身の感を叙す、雄麗壯偉、實に天地を空しうするの概あり、明皇以後代宗に至る間、天下紛亂、之を戢むる者、彼の武帝の如き雄主なく、胡人をして跋扈せしむるを悲しんで作りしなり。楊用修曰く、兵戈亂離の狀具に見る、杜詩の妙古語を翻するに在り、此れ三百篇の辟羊羶首三星在罍と同じ、之を晚唐人に比すれば、豈唯天壤の隔のみならん。

吹笛

吹笛秋山風月清。誰家巧作斷腸聲。風飄律呂相和切。月傍關山幾處明。胡騎中霄堪北走。武陵一曲想南征。故園楊柳今搖落。何得愁中却盡生。笛を吹いて秋山風月清し、誰が家ぞ巧に斷腸の聲を作す、風は律呂を飄して相和する切なり、月は關山に傍うて幾處か明なる、胡騎中宵北走するに堪へ、武陵の一曲南征を想ふ、故園の楊柳今搖落す、何ぞ得たる愁中却て盡く生ずるを、

【句釋】吹笛の曲名に種種あり、關山月、折楊柳は、共に別離を傷むの曲なり、此の詩は雙方を合詠したるもの、如し。秋山風月清、清の字は全體に係る、笛も清く秋も清く山も風も月も清きなり。誰家、自吹にあらざれば誰が家ぞと疑ふ、題の吹は聞が切なり、和語の「吹イテ居ル」と見れば妨げ無し。巧作斷腸聲、名手なるが故に人の腸を斷たしむ。風飄律呂は調子の事なり、六律六呂、律は陽で呂は陰なり、此の陰陽登降の調子が合ふゆゑ巧手なるを知る、相和切。風が之に和して爽快と吹く。月傍關山、天中の月を以て其の曲名を表はす。幾處明、此の月は幾處を照すか知らず、此の笛は幾人聞くや亦知らざるなり。胡騎中宵堪北走、「晉書」卷六に、劉琨、晉陽に在り、嘗て胡騎の爲め圍まる數重、城中窘迫計無し、琨乃ち月に乗じ樓に登り清嘯す、賊之を聞いて皆凄然として

長嘆す、中夜に胡笳を奏す、賊又涕を流す、曉に向つて復之を吹く、賊並に圍を棄てて走る、此の句之を言ふ。武陵一曲想南征、漢の馬援南征す、門下の袁生、善く笛を吹く、援歌を作り以て之に和す、名けて武陵深曲と曰ふ、其の曲に曰く、「滔滔たる武溪一に何ぞ深き、鳥飛んで度らず、獸臨むこと能はず、嗟哉武溪、毒淫多し」故園楊柳今搖落、漢の李延年、横吹二十八解中に折楊柳の一曲あり、晉の太康年京洛、折楊柳の歌を爲る。何得愁中却盡生、故園の楊柳は秋を経て盡く枯凋したるべし、然るに此の巧曲を聞けば、我郷を想ふ愁心中に再び楊柳が發生するかと疑ふを言ふ。【評論】此の篇、夔州に在つて作る所、笛の巧を稱するに古事に於て胡騎の北走、武陵の南征を以てし、我身分に於て關山愁中、故園を想ふに勝へざる情を言ふ、山二字、風二字、月二字、中二字他人に於ては失體の詩と爲る、公に於ては大手筆と爲る。邵夢弼曰く既に象に著かず、又空に落ちず、眞に物を咏する妙訣なる哉。譚元春曰く大手筆、聲律極めて細、然れども意を對して詞を對せず、詞を對して意を對せざる者あり。鍾惺曰く、句句凄遠、咏物の絶唱と、「詩醇」の評に、吞吐芳を含み、安詳度に合ふ、頓挫の妙を極む、而して高雅人に絶す。明人何景明七律全く此の種に本づく、千載の下、固に弦膠に合續する者あり。

閣夜

歲暮陰陽催短景。天涯霜雪霽寒宵。五更鼓角聲悲壯。三峽星河影動搖。野哭

千家聞戰伐。夷歌幾處起漁樵。臥龍躍馬終黃土。人事音書漫寂寥。

人事音書漫寂寥。

【句釋】 閣夜は西閣、夔州に在りて作る、是の時元大歴崔肝の亂未だ息まず。歲暮、十二月なり、歲

聿云暮は「毛詩」の語なり。陰陽は晝夜を云ふ。催短景、一年中日の短なるは十二月を極度とす。

天涯、客中なればなり。霜雪霽寒宵、短景なるときは夜長し、霜雪霽る故に寒甚だし、宵は夜なり。

霽は天なり、一本寒霽に作る、孰れも通するなり。五更は夜明なり。鼓角は防禦の爲め吹く、閣上

に聞く所。聲悲壯、後漢の禰衡善く鼓を撃ち、漁陽の參朶を爲す、聲切悲壯、聽く者慷慨せざるは

莫し、物悲しく聞えるなり。三峽、瞿塘と巫峽と歸郷之を三峽と並稱す。星河影動搖、三峽の空を

望めば、星河が動搖して物寂しきなり、民勞の應を示すなり、人事に依つて天象は變ずるを言ふ、

「天官書」に、星動搖するときは大兵起ると。野哭は良民が泣くと云ふことなり。千家聞戰伐、千

家悉く戰伐の爲めに出で、鋒鏑に死する者多し、其の野哭の聲を聞くなり、野哭が聞くにあらず。

夷歌は夷人の軍歌なり、五溪の種族、夔州に雜居して歌ふ、乃ち蠻腔なり、幾處起漁樵、漁人の家
も、樵人の家も、蠻人の占領する所と爲る、故に夷歌が其れ等の家より起る、中土人は愁悲して、蠻
人は娛樂する。臥龍は諸葛孔明なり、夔州城外に孔明廟あり。躍馬は後漢末の公孫述が事なり、
躍馬稱帝と左思の蜀都賦にあり、夔州城外に公孫述の廟あり。終黃土、死去を言ふ。孔明が忠
なるも、公孫述が逆なるも、同じく黃土と爲る。人事は臥龍と躍馬の事を言ふ、音書は杜が郷信を
言ふ。漫寂寥、寂寥に任すより外如何ともする無し、強ひて自ら寛うするなり。

返照

楚王宮北正黃昏。白帝城西過雨痕。返照入江翻石壁。歸雲擁樹失山村。衰
年病肺唯高枕。絕塞愁時早閉門。不可久留豺虎亂。南方實有未招魂。

楚王宮の北正に黄昏、白帝城の西過雨の痕、返照江に入つて石壁を翻し、歸雲樹を擁して山村を失す、衰年肺を病んで唯枕を高うし、絶塞愁時早く門を閉づ、久しく豺虎の亂に留まるべからず、南方實に未だ招かざるの魂あり、

【句釋】返照は雨後の暮景なり。楚王宮は巫山縣の西北に在り、楚の襄王游ぶ所の地、山谷が所謂細腰宮是れなり。北正黄昏、晚景に逼る。白帝城は公孫述が蜀を披き築く所、夔州府治東に在り、下は即ち陝口大江、瀾濤澎湃、信に楚蜀の咽喉たり。西過雨痕、一雨を経て樹色蒼たるなり。返照、北は暝し、西は霽る、則ち此の返照を見る。入江、大江に入る。翻石壁、返照の爲めに崖石光動き尙亦明なり。歸雲、正に宿せんとする雲。擁樹は樹木を遠擁する。失山村、山村を失却して見る能はず、返照の七字は、白帝の七字を承け、歸雲の七字は楚王の七字を承ける、歸雲は楚王宮北に當るなり。衰年は老年。病肺、肺病の人にして酒を飲む杜の如きは長生の部に屬す、老人肺病以て證と爲すべし。唯高枕、静養するを言ふ。絶塞は蠻地の極處を言ふ。愁時、華夷の戰爭を愁る時。早閉門、未だ日没ならざるに早く門を閉づ、盜賊を防ぐなり。不可久留豺虎亂、戰亂の地は久しく留まるべきにあらず、豺虎は惡獸、以て惡人に譬ふ。南方實有未招魂。南方は寇盜甚だしくして、吾が驚魂散じて未だ招かざるものあり、故に亟かに去ること能はざるなり、俗に魂が無き人は是れなり。

【評論】此の篇、返照の二字に重きはあらず、詩中の語を題としたるに過ぎず、故に返照の光景を咏ずるは前半、後半は全く我が感慨を叙す、大手筆と謂つ可し。蔣一葵曰く翻字は返照を寫し、失字は歸雲を寫す、畫の如し。

登高

風急天高猿嘯哀。渚清沙白鳥飛迴。無邊落木蕭蕭下。不盡長江滾滾來。萬里悲秋常作客。百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。

風急に天高くして猿嘯哀しく、渚清く沙白うして鳥飛迴る、無邊の落木蕭蕭として下り、不盡の長江滾滾として來る、萬里悲秋常に客と作り、百年多病獨臺に登る、艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新に停む濁酒杯、

【句釋】登高は一本九日に作る、高樓に登り懷を述ぶ。風急、西風吹急なり。天高、一天晴高なり。猿嘯哀、猿も亦清秋の氣を哀しむ。渚清、汀渚蒼清なり。沙白、平沙影白なり。鳥飛迴、鳥も亦清秋の晴を知る。無邊は四面を意味す。落木蕭蕭下、高處の景以て首句に應ず。不盡は廣大を意味す。長江滾滾來、低處の景以て第二句に應ず、風急天高、落木蕭蕭たる所以、渚清沙白、長江滾滾たる所以。萬里は萬里の外に來りて、悲秋、九日は佳節なれば、樂しまざるべからず、而かも亂離悲し

む所以。長作客、故郷の歡娛に背く。百年は俗語の「イツデモ」と云ふ意味。多病、肺病なり。獨登臺、病の身、看護夫も婦も無く、獨登臺す、愈よ悲し。艱難苦、苦は「非常」なり「甚」なり。恨、自ら遺恨に想ふ。繁霜鬢は半白の頭と爲る。潦倒是落魄零落を意味する字、水の逆流する字に従ふ。新停濁酒杯、艱難の苦を忘るゝには酒に若くもの無きも、病の爲め且つ零落の爲め酒杯を擧げ得ずと嘆息する。

【評論】此の篇、九日登高の事を叙し、以て我が遲暮を感じて作るなり。楊廷秀曰く、全く蕭蕭滾滾を以て精神を喚起す、見得連綿、是れ裴湊の贅語にあらず。蔣一葵曰く、起聯と雖も、而かも句中各自對す、老杜中聯にも亦多く此の法を用ふ。沈歸愚曰く、起二句對舉の中、仍も復韻を用ふ、格太だ奇。黄家鼎曰く、勢大海奔濤の如く、四の疊字之を振起す。

闕下贈裴舍人

錢起

二月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰陰。長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。陽和不散窮途恨。香漢長懸捧日心。獻賦十年猶未遇。羞將白髮對華簪。

猶未だ遇はず、羞づらくは白髮を將て華簪に對す、

【略傳】錢起字は仲文、吳興の人、天寶十年及第し、祕書郎を授く、考功郎中に終る、郎士元と俱に詩名高し。士林之が爲めに語つて曰く、前に沈宋あり、後に錢郎ありと、時に公卿の出牧奉使に二人の詩の祖儀無ければ、人以て恥と爲すと。集二十卷あり。

【句釋】闕下、宮闕下なり。贈裴舍人、裴夷直は吳人、仕へて中書舍人と爲る、錢起が未だ及第せざる時、裴が引薦を乞ひしなり。二月は仲春なり。黃鸝は日本の「ウグヒス」とは全く異なるが色は黧黒にして黄ゆる、古來より之に當てたものなり。飛上林、上林は苑名、連綿四百餘里、此の黃鸝は佗の登庸者を比して言ふ。春城紫禁は共に上林苑中なり。曉陰陰、此の陰陰は春氣の爲め朦朧たるを言ふ。長樂は宮名、高祖七年に成る、鐘室は此の宮中に在る。鐘聲花外盡、花深き處を出で來るなり。龍池は前に辨せり。柳色雨中深、池を繞りて皆楊柳、雨の爲め其の陰深きなり。陽和は氣候の佳を稱する詞なるが、以て天子の布澤に比す。不散、布澤も我に至らざるを言ふ。窮途恨、「吳越春秋」に、女子、綿を瀨上に撃つ、管中飯あり、子胥が謂はく、夫人一食を得べけんや、女子曰く不可なり、子胥が曰く夫人窮途を賑はず、少飯亦何ぞ嫌はんやと。今錢起は恩澤に預からざるを言ふ。香漢は天上の事、以て天子に比す。長懸捧日心、我は天子の爲め、力を盡さんと欲する心を持つとなり、「魏書」に、程昱少時夢に泰山に上る、兩手に日を捧ぐ、昱私かに之を異しむ、以て荀

咳に語る、咳以て曹操に白す、操曰く、卿終に吾が腹心とならん、其故事を用ひしなり。獻賦、探用せられん爲め賦を獻じ、其の力の試験を請ひしなり。十年猶未遇、此の十年は必ず十年と限るにあらず、多年の代名詞なり、用ひられずして白髮に至らんとす。羞將白髮、將は俗語の「サゲテ」に當る、此の面を「サゲテ」如何せんなどの意味。對華簪、紳士に對面するを羞づとの意なり、華簪は高官が頭に飾る具なり。

【評論】此の篇、前半は關の春色、即ち官人得意の境を叙し、後半は己が不遇、即ち失意の情を叙し、以て舍人の推舉を求むる、錢起は詩家中唐と稱する時代なり、其の詩風が、盛唐と變調を來し情を言ふ、稍、濃厚となり、遂に詩格の高尙を無視するに至る。黄家鼎曰く、三四は猶盛唐の典型を存す、五六遂に中唐の面目を露はす、鍾惺曰く、情あり色あり、體あり、高仲武曰く、右丞没後、員外、雄と爲す、齊宋の浮游を革ため梁陳の靡曼を削り、迥然として獨上し、之と與に京なること莫し、長樂十四字の如き、特に意表に出づ、古今に標準たり。余今謂く之を王右丞集に混するも亦辨する能はず、陽和十四字、黄家鼎は中唐の面目と言ふと雖も、中唐尙多く此の調を見ず、盛唐の格と謂つて可なり。

和王員外晴雪早朝

紫微晴雪帶恩光。繞仗偏隨鶴鷺行。長信月留寧避曉。宜春花滿不飛香。獨看積素凝清禁。已覺輕寒讓太陽。題柱盛名兼絕唱。風流誰繼漢田郎。

紫微の晴雪恩光を帶ぶ、仗を繞りて偏に鶴鷺の行に隨ふ、長信月留まりて寧ぞ曉を避けん、宜春花滿ちて香を飛ばさず、獨看る積素の清禁に凝るを、已に覺ゆ輕寒の太陽に讓るを、題柱の盛名絶唱を兼ね、風流誰か繼がん漢の田郎、

【句釋】和は前の如し。王員外、何人なるや未詳。晴雪早朝、雪が止みし翌曉、宮闕に向ふなり。紫微は宮名、未央宮の事なり。晴雪帶恩光、旭日の光と、天恩の光と雙方兼ねるゆる言ふ、王の事を言ふ。繞仗は天子の儀仗なり。偏隨鶴鷺行、黄を懷き白を縮し、鶴鷺行を成す、と「北齊樂曲」に在り、雪光恩光を兼ねて人に被らしむるを言ふ。長信は宮名、渭水の南に在り、太后の住處。月留、雪を指して月と云ふ。寧避曉、眞の月ならば曉を避くるが、雪なるが故に避けず。宜春は苑名、京城東南の隅に在り、即曲江の芙蓉苑なり。花滿不飛香、雪なるが故、香は飛ばさず。獨看は錢起なり。積素は雪を言ふ。凝清禁、宮城内に凝結する。已覺も錢起が覺ゆ。輕寒讓太陽、太陽に逢うては、凝結も解けざるべからず、讓る所以、起句の恩光と映應する。題柱盛名兼絶唱、盛名は

第一なり、絶唱は第一と言ふが如し、題柱の事前に在り。風流誰繼漢田郎、此の意は前に辨せり、田郎が盛名は君に非ずんば誰が繼がん、君又兼ぬるに絶唱を以てす、誰か亦君に繼がん者ぞと。
【評論】此の篇、紫微より以下六句は晴雪の景を叙し、七八二句王が事を叙す、雪を咏する詩として古今傑出のものとして爲す、王敬美曰く、長信宜春の句、晴雪に於て妙に形容を極む、人口に膾炙す、其の源、之を初唐に得、然れども初めより、竟に中唐に落つ、了に盛唐と相關せず、何ぞや、愈よ巧なるものは愈よ遠きなり。黄家鼎曰く、月を繪きて能く光を繪き、花を寫して能く香を寫す、自からは第一の神手。雪を月と稱し、花と稱し、小細工を弄するに至る、王敬美の嫌ふ所以、余も亦之を嫌ふ、黄家鼎は肉眼の見、何ぞ天眼と相違を恠しまん。

自鞏洛舟行入黄河即事寄府縣寮友。

韋應物

夾水蒼山路向東。東南山豁大河通。寒樹依微遠天外。夕陽明滅亂流中。孤村幾歲依微遠。天

水を夾んで蒼山路東に向ふ、東南山豁かにして大河通す、寒樹依微たり遠天の外、夕陽明滅す亂流の中、孤村幾歲か伊岸に臨み、一雁初めて晴れて朔風に下る、爲に報ず洛橋游宦の侶、扁舟繫がず心と同じ、

【句釋】鞏は縣名、洛は水名、河南省河南府なり、洛水の源は陝西の冢嶺山に出で東流して黄河に入る、此の舟中にて此を賦し諸州の僚友に寄示したるなり。夾水蒼山路向東、鞏洛の西方は唯山のみ、水を夾むとなれば、谷澗の間を舟にて過ぐ、而して東方へと舟は進むなり。東南山豁、谷間の洛水を出て東に向うて見れば、山が忽ち豁きて、大河、即ち黄河が通ずるを見る。寒樹、冬日の山林、依微は「ボンヤリ」なり。遠天外、正に是れ山景、以て起句に應ず。夕陽明滅亂流中、黄河の亂流見る所のもの、唯是れ夕陽の或は明或は滅するのみ。孤村幾歲、歲は處の誤なり、韋が孤村に幾歲が住したと注したる本もある。臨伊岸、古來より伊水の岸と解す、然るに伊水は河南の盧氏縣に出て嵩縣洛陽偃師縣の界を経て洛水に入ると「一統志」に辨す。唐汝詢曰く、按ずるに鞏洛河に至る處、伊水と接せず、疑ふ可し。蓋し韋が伊岸に住したる説を取るとせば伊と洛と接せざるも亦妨げざるなり。一雁初晴、天晴る、初め一雁を見る、一雁が初めて晴るならば兒童語に類す。下朔風、北風に雁が下る、即ち以て我が音信を通ずるに譬ふるなり。爲報は「ヨツテ」報すなり。洛橋遊宦侶、中央の都に住する官省の僚友なり。扁舟不繫與心同、我が心緒如何と問はゞ我は扁舟の繫がざるが如きなり、漢の賈誼が「鵬賦」に汎として係がざる舟の如しと。

【評論】此の篇、夾水以下の六句は、舟行中の景狀にして、七八二句は我が情想を言ふ、韋蘇州が洛陽丞たりし時の詩とす。蔣一葵曰く、瀟灑法度に乏しからず。鍾惺曰く、牽合の病無し。余謂

ふ、蘇州五古に巧妙にして七律に長せず、此の篇、中唐以下の纖弱に墮せずと雖も、蘇州の長技にはあらざるなり。

贈錢起秋夜宿靈臺寺見寄

郎士元

石林精舍武溪東。夜叩禪扉謁遠公。月在上方諸品靜。心持半偈萬緣空。

蒼苔古道行應遍。落木寒泉聽不窮。更憶雙峯最高頂。此心期與故人同。

石林精舍武溪の東。夜禪扉を叩きて遠公に謁す。月は上方に在りて諸品靜、

心半偈を持して萬緣空し、蒼苔古道行いて應に遍かるべし、落木寒泉聽いて

窮まらず、更に憶ふ雙峯の最高頂、此の心故人と同うせんことを期す、

【略傳】郎士元、字は君胄、中山の人、天寶十五年の進士、寶應元年、京畿の縣官に選ばれる、詔して

中書に試し、渭南尉に補す、右拾遺を経て、出でて昂州刺史と爲る、時に錢起と名を齊しうす、集

一卷あり。

【句釋】贈錢起秋夜宿靈臺寺、此の寺何處なるを詳にせず、典公云ふ、廬山ならんと。見寄、錢

起が寄せられしを和す。石林は石や林の多きなり。精舍は道を修する者、息心して栖む所を精舍と

曰ふ、寺即ち僧の住する場處の代名詞なるのみならず、道士も儒流にも共通するなり。武溪東、虎

を武と爲したるは避くる所あればなり。夜叩禪扉、虎溪の東林寺は晉代惠遠法師の住して說法せし道場なり。謁遠公、靈臺寺の今日の僧を譬ふ、佛教で僧に逢ふを相見と言ふ、謁は相見なり。月は前句に夜字あり、以て之に應ず。在上方、佛典に上方世界、下方世界の語あり、今上峯と言はず、上方と言ふ、妙味限り無し。諸品靜、品は品類と成語して種種の物と言ふ意なり、雜類の聲を開かず、四面寂靜たり。心持半偈、此の半偈は、釋尊の過去譚に、雪山童子が修行中、鬼あり、大聲に諸行無常、是生滅法と唱ふ、童子之を聞き、汝の唱ふる所は半偈ならん、尙半偈あらん、鬼曰く、我餓るて後半偈を唱ふる能はず、汝我が爲めに身を施さば、以て聞かせん、童子曰く可なり、是に於て生滅滅已寂滅爲樂と唱ふ、童子身を鬼口に投せんとするとき、鬼王嘆じて法の爲めに童子が道心の堅固なるを稱す、今其の故事を用ひて以て道を問ふを言ふ。萬緣空は、諸品靜なるが故に萬緣空しきなり、萬緣空なるが故に諸品靜なり、諸行無常の意を表はす。蒼苔古道は、佛典に何等の關係なし、山の道の形容のみ。行應遍、行者は錢起なり。落木寒泉、萬緣空なる所へ落木蕭蕭の聲、寒泉淙淙の響きを聞く。聽不窮、山は深く且遠く趣も亦窮まらざりなり。更憶、其の上に憶ふ。雙峯最高頂、廬山に雙劍峯あり、然れども寺の代名詞に用ふるが、詩人の本領とす、雙樹雙林の典故を忘れざる爲めなり。此心期與故人同、我が憶ふ所は、此に止まらず、愈よ深く愈よ遠く窮まる所まで窮めて游賞に供せん、是れ爾と期する所なり、此心は作者に係る、故人は錢起なり。

【評論】此の篇、石林以下の六句は、悉く錢起の事を叙し、七八二句は我が情を叙す、作法分明なり、中唐僧寺の七律、此の右に出る者なし。鍾惺曰く、月在の二語上上智に非ざれば、了了の悟無し。此の評亦確たり、中唐と雖も、初唐にも此の名篇を見ず、後生僧寺の詩を作らんと欲する時は、宜しく此の詩を三讀すべし、心字二字あるは學ぶべからず。

長安春望

盧綸

東風吹雨過青山。却望千門草色閒。家在夢中何日到。春來江上幾人還。

川原繚繞浮雲外。宮闕參差落照間。誰念爲儒逢世難。獨將衰髻客秦關。

東風雨を吹いて青山を過ぐ、却て千門を望めば草色閒なり、家は夢中に在つて何れの日か到らん、春は江上に來りて幾人か還る、川原繚繞たり浮雲の外、

宮闕參差たり落照の間、誰か念はん儒と爲りて世難に逢ひ、獨衰髻を將て秦關に客たらんとは、

【略傳】盧綸字は允言、河中の人、天寶の亂に番陽に客たり、大歴の初、進士に擧げられ第せず、元載其の文を取つて以て閩郷尉に補す、監察御史に遷る、輒ち疾と稱して去る、綸が舅章渠牟其の才を表して宮中に召見す、帝作る所あらば、輒ち唐和せしむ、時に韓翃等十人と皆詩名あり、大歴十

才子と號す、集十卷あり、卒年未詳。

【句釋】長安春望、吐番亂後に長安荒蕪の春色を望み作る。東風吹雨過青山、春風春雨青山は尙ほ人に可なり。却望千門草色閒、千門は宮禁の事なり、草色も凄閒なり。家在夢中、代宗は此の時

陝に逃げ宮禁は草のみ生じ、我家は何處ぞ、其に夢中の思ひあり。何日到、返る能はざる意。春來江上、天事は人事に關せず春節は江上に來る。幾人還、亂後出奔して都人は、在らず還りて都に入る

者幾人ぞや。川原繚繞は、川や原がめぐりめぐる。浮雲外、浮雲は有り、民居は無し。宮闕參差、宮闕は高低たる屋瓦が、落照間に見える。誰念爲儒、儒の道は治國平天下を説くに在り、今國步將に

傾かんとす、之を救ふの道を維持する者が流離して、逢世難、自分を救ふ能はず、況んや天下國家をや、泰平には文、亂世には武の眞理を言ふ。獨將衰髻、世難を救ふの術無く、空しく衰髻と爲る

客秦關、長安は即ち古の秦關なり、客と爲るは流離を言ふ。

【評論】此の篇、東風以下六句は亂後長安の春色を叙し、七八二句我が情を叙す、一讀凄慘を覺ゆ。顧華玉曰く、傷亂の意、言外に溢る、中唐に於て寛徐なる者と。

陸勝宅秋雨中探韻

張南史

同人永日自相將。深竹閒園偶辟疆。已被秋風教憶繪。更聞寒雨勸飛觴。歸

陸勝宅秋雨中探韻

張南史

同人永日自相將。深竹閒園偶辟疆。已被秋風教憶繪。更聞寒雨勸飛觴。歸

心莫問三江水。旅服從沾九月霜。醉裏欲尋騎馬路。蕭條是處有垂楊。

霜、醉裏尋ねんと欲す騎馬の路。蕭條として是の處垂楊あり、
寒雨を聞いて飛觴を勸む、歸心問ふ莫かれ三江水の水、旅服沾ふに従す九月の
霜、醉裏尋ねんと欲す騎馬の路。蕭條として是の處垂楊あり、

【略傳】張南史字は季真、幽州の人、少うして奕を好み、中歳感激し苦節して文を學ぶ、數歳の間、
稍詩境に入る、以て參軍に試し、亂を避け揚州に居る、再召赴かずして卒す、詩一卷あり。

【句釋】 同人は「易」に出づ、友人なり。永日自相將、自は「ココニ」此處の意、將は引なり、乃
ち集合する。深竹閑園、陸勝が宅の形容。偶辟疆、「世說」に、王子敬が顧辟疆が名園ありと聞き而
かも主人を知らず、徑ちに其の家に造る、顧方に賓友を集め酣燕するに値ふ、辟疆、吳郡の人、郡
の功曹平北參軍を歴、名園あり東晉の時最も著はる、偶は偶比、陸が閑園顧の名園に比すととなり、
已被秋風教憶鱸、晉の張翰は吳郡の人、大司馬東曹掾と爲る、因て秋風の起るを見、乃ち吳中の菰
菜葦羹鱸魚の鱸を思ひ、曰く、人生適意を貴ぶ、何ぞ能く數千里の外に羈官して以て名爵を要せん
や、遂に駕を命じて歸る、吳中は鱸魚和語の「スズキ」を鱸と爲し、菰菜を葦と爲す（粉にするこ
と）魚白うして玉の如く、菜黃にして金の如し、東南の佳味なりと、「南部煙花記」に出づ、今故郷の事

を思つて一杯飲むなり。夏聞寒雨勸飛觴、寒雨を聞きながら酒を飲むの快趣を言ふ、觴を飛ばすと
は互に應酬すること。歸心莫問三江水、張翰が東曹掾と爲り、同郡の顧榮に謂つて曰く我に歸心あ
り、榮其の手を執りて愴然として曰く、吾亦子と南山の蕨を採り、三江水の水を飲まんのみ、松江
の東北海に入る者、婁江、東南する者東江、之に松江を併せ三江と言ふ。旅服從沾九日霜、九日の
霜が其の衣を沾ほすに従す、醉うて大に興を發するが爲め、衣の沾ふなぞ頓著せず。醉裏欲尋騎馬
路、歸らんと欲して醉中、馬上にて其の途を求む。蕭條は「サビシキ」貌。是處有垂楊、垂楊を記
して置き、又後日の往訪の日當とす。

【評論】 此の篇、陸勝が宅に於て探韻、即ち韻字を藏し置き、各自に探り取り、張は七陽の韻を得
たるなり、是れ此の時代より起りし事にて盛唐以前は此事なし、然れども晩唐に次韻の惡法を興し
て和韻の正法を害したるの詩は、此の選本一首も取らず、以て珍重すべし。高仲武曰く、三四二句
謂つ可し物理俱に美、情致兼深しと。

鹽州過胡兒飲馬泉

李益

綠楊著水草如煙。舊是胡兒飲馬泉。幾處吹笳明月夜。何人倚劍白雲天。從
來凍合關山道。今日分流漢使前。莫遣行人照容鬢。恐驚憔悴入新年。

綠楊水に著きて草煙の如し、舊是れ胡兒の飲馬泉、幾處笳を吹く明月の夜、何人か劍に倚る白雲の天、從來凍合す關山の道、今日分流す漢使の前、行人をして容髯を照さしむる莫れ、恐らくは憔悴して新年に入るに驚かん、

【略傳】李益、字は君虞、隴西姑臧の人、大歴四年の登第、末秩を受け事に従ふ、十八載多く兵間に在り、心疾有りて用ひられず、嘗て「恩に感ず地有るを知る、望京樓に上らず」の句あり、憲宗召して祕書少監と爲す、太子賓客に遷る、禮部尙書を以て致仕して卒す、

集二卷あり。

李益傳、新唐書卷二百三。

【句釋】鹽州は唐に關内道即ち今日の山西大同府なり。胡兒飲馬泉、此に白道泉あり、飲馬長城窟の處是れなり、李益が幽州都督劉濟が營田副使と爲る、此の詩其の時の作。綠楊著水、正に是れ春半柳枝長く水面に垂る。草如煙、草色が煙の如く澹なり。舊是は昔日なり。胡兒飲馬泉、胡人が此に來り馬に飲かはしむ。幾處吹笳明月夜、胡兵と漢兵と鐵笳を吹き明月の夜を徹せし地なり。何人倚劍白雲天、自身が營田副使と爲り郷山に遠き白雲の天涯に在るを言ふ。從來凍合關山路、去年の冬來りし時は氷が結合して山路を埋めたるが、今日分流漢使前、今年の今日は春風の爲め氷は解けて我が眼前を流れる。莫遣行人照客髯、奇麗な鏡の如き水色であるが、己の面や髪を寫し呉れるな

と、水に頼むなり、行人は李自身を言ふ。恐驚憔悴入新年、風塵に奔走して形容憔悴せり、然れども鏡で照さずんば、心で知り乍らも、眼に見ず、故に憂が薄きが、一度照して分明に知るに於ては、我の憂如何ぞや、況んや新年に入るに於てをや。

【評論】此の篇、一二の句は直ちに泉を叙し、三句は胡兒が舊事を叙し、四句は己が今狀を叙し、五六は泉の今昔を叙し、七八は己れの情に歸宿す、中唐李庶子を推して古今作家と稱す、此の詩以て其の一斑を窺ふ可し。譚元春曰く、悲壯、末句極めて其の清を言ふ、兼て邊塞の氣を影すと。

登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史

柳 宗元

城上高樓接大荒。海天愁思正茫茫。驚風亂颭芙蓉水。密雨斜侵薜荔牆。嶺樹

重遮千里目。江流曲似九迴腸。共來百粵文身地。猶自音書滯一鄉。

城上の高樓大荒に接す、海天の愁思正に茫茫、驚風亂れ颭す芙蓉の水、密雨斜に侵す薜荔の牆、嶺樹重ねて千里の目を遮ぎり、江流曲がりて九廻の腸に似たり、共に來る百粵文身の地、猶自ら音書一郷に滯る。

【句釋】登柳州は今の廣西省柳州府、初め昆州、後柳州と改む。漳州汀州は並に福建の地、封州連州は並に廣東の地、永貞元年、宗元、韓泰、韓華、劉禹錫、陳謙、凌準、程异、韋執誼と皆、王叔

文に附するを以て貶して八司馬と號す、準と執誼は貶處に卒す、程昇先づ召用す、元和十年子厚等五人例して召し京に至る、又出でて刺史と爲る、子厚は柳州、泰は漳、畢は汀、謙は封、禹錫は連なり。城上高樓、俗に「火ノ見樓なり」。接大荒、彌よ廣く、彌よ大を大荒と言ふ、所謂海外なり。海天愁思、海も天も空闊にして愁思も隨つて窮まり無し。正茫茫、廣大なる形容詞を茫茫と言ふ。驚風は急に吹く風。亂颭は風が浪を吹き動かす。芙蓉水は、蓮花の水なり。密雨は晴ること無き雨。斜侵薛荔牆、蔦の牆に打ち敲くなり。嶺樹重、嶺又嶺と重疊する。遮千里目、故郷を遠望するも嶺の爲め遮ぎらる。江流曲、流の盤曲する様は、似九廻腸、人間の腸は一日に九廻すとは支那醫書に示す所、水の曲るは我が憂腸の九廻するに似たりと言ふ。其來、五人を言ふ。百粵は一種にあらず、百蠻と言ふが如し、粵は越なり、南越閩越今の廣西廣東其に越の地とす。文身地、「莊子」に越人髮を斷ち、身を文る、越人身を刺して龍鳳紋を爲る、我俗の入墨なり。獨自音書滯一鄉、各自一郷に滯在して音書すら久しく絶つと言ふ。

【評論】此の篇、城上より江流に至るの六句、城上遠望の狀を叙し、其來二句は、其の情を叙す、作法知り易し。蔣一葵は、驚風の二句を評して中唐を下ること一格と罵るが酷に過ぐ。鍾惺曰く、嶺樹の二句、道ひ得て眞率、結語鄭重と。

奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻

韓愈

天仗宵嚴建羽旄。春雲送色曉雞號。金爐香動燭頭暗。玉佩聲來雉尾高。戎服上趨承北極。儒冠列侍映東曹。太平時節身難遇。郎署何須嘆二毛。天仗宵嚴にして羽旄を建て、春雲色を送りて曉雞號く、金爐香動いて燭頭暗く、玉佩聲來つて雉尾高し、戎服上趨して北極に承け、儒冠列侍して東曹に映ず、太平の時節身遇ひ難し、郎署何を須ひん二毛を嘆ずるを、

韓愈傳、新唐書一百七十六、舊唐書一百六十。

【略傳】韓愈字は退之、南陽の人、少にして孤、兄が嶺表に官たるに隨ひ、兄卒し、愈自から刻苦儒を學び、長ずる比、六經百家に通ず、貞元八年進士に擢んづ、四門博士に調せらる、監察御史に遷る、上疏して宮闈を論じ、陽山令に貶せらる、元和の初、擢して國子博士と爲る、東都に分司す、都官員外郎に改む、尋いで復博士と爲る、既に才高うして數ば黜し、官又下遷す、乃ち進學解を作りて以て自ら喻ふ、執政其の才を奇とし、比部郎中に改む、中書舍人に進む、裴度が行軍司馬と爲て、蔡を伐つ、蔡平らぎ、刑部侍郎に遷る、上疏して佛骨を論ず、上怒りて潮州の刺史に貶す、袁州に量移せらる、召して國子祭酒に拜す、兵部侍郎に轉ず、穆宗の時、鎮州を宣撫す、歸奏して、吏部侍郎に遷り、京兆尹兼御史大夫に轉ず、李

紳に効せられ罷む、未だ幾ならず吏部侍郎に復す、長慶四年卒す、年五十七、禮部尚書を贈る、諡して文と曰ふ、集四十卷あり。

【句釋】奉和、長上なるが故に奉字を付す。庫部は官名、戎器鹵簿儀仗を掌どる。盧は姓。四兄は尊稱。曹長は尚書丞郎相を呼ぶ稱なり、長官の事なり。元日朝廻、退朝して作りし詩に和したるもの。天仗、元日を祝する爲め天子出御を待つ儀仗。宵殿建羽旄、未明の頃より嚴重に旄を樹て、衛士が守る様なり。春雲送色、既にして天明、春雲の變態として彩を爲すを見る。曉雞號、號は「ナク」なり。金爐香動螭頭暗、起居郎が筆を乗つて宰相に隨ひ殿に入る、香案を夾み分つて殿下に立ち、第二の螭首に直立し、墨を和し、筆を濡し、皆勦處に即く、時螭頭と號す、螭は龍の若くにして角無し、殿階欄楯螭を刻り飾と爲す、故に丹墀の上階を螭頭と曰ふ。玉佩聲來雉尾高、此の事は前に辯せり、共に味爽の景。戎服は武官を言ふ。上趨承北極、北極は朝廷、天子の代名詞と心得べし、承は和語の「ウケタマハル」に當る。儒冠は文官を言ふ。列侍は森列侍坐なり。映東曹、東曹は韓愈なり。太平時節身難遇、風條を鳴さざるの時容易に遇ひ難きなり。郎署の役人と爲りて、何須嘆二毛、漢の馮唐が中郎署長と爲る、文帝問うて曰く、父老何自より郎と爲る、唐實を以て對へ、其の白首尙郎署に住するを悲嘆す、今其の事を用ひて以て自ら言ふ、而かも其の側面は嘆息するなり。

【評論】此の篇、天仗より儒冠に至る六句は和の意味を叙し、太平の二句、我が情を言ふ、吳吳山曰く題是れ朝廻にして詩、但早朝を言ふ、廻字の意無し、又止春雲二字あり、元日に切ならず、並に奉和の意亦未だ見ず、若盛唐人之を爲らば必ず是の如くならず。春雲は元日には早しとの意ならんが、色を送るには春雲ならざるべからず、奉和の意を見ずとは、見ざる者の失なり、和の意ありて、和の字無きのみ。

國譯唐詩選卷五終

國譯唐詩選卷六

五言絕句

五言絕句は漢魏の樂府より始まる、出塞曲、桃葉歌、長干曲、白頭吟の如き皆其の體なり、唐人始めて聲勢を穩順して定めて絶句と爲す、樂府は即ち此を以て之を奏す、或は一二の句、散句を以て起り、三四の句、對句を以て結す、或は前二句は對し、後二句は散す、或は四句俱に對し、或は前後俱に散す、律詩の前後中間兩頭を截て作ると謂ふ者は非なり、首尾布置、起承轉合、須らく出すに自然を以てすべし、語絶えて意絶えず、語短にして意長きを要するなり、其の細致は本文に入つて注すべし。

五言絶句

主人不相識。偶坐爲林泉。莫謾愁沽酒。囊中自有錢。
主人相識ならず、偶坐林泉の爲めなり、謾に酒を沽ふを愁ふること莫れ、囊中自から錢あり、

題袁氏別業

賀知章

【略傳】賀知章、字は季真、超拔羣類の科に擢んでられ、太常博士に遷り、開元の初、禮部侍郎に遷る、晩節誕放にして四明狂客と號す。

【句釋】袁氏は未詳。別業は別荘なり。主人は袁氏を言ふ。不相識、吾と主人と友人にはあらず。偶坐は二人並坐を言ふ。爲林泉、知己にあらざる人と偶坐するは畢竟林泉を賞するが爲めなり。莫謾愁沽酒、沽は買なり、主人は客を遇せんとて、決して酒を沽ふ心配は無用なり。囊中自有錢、吾に貯へし錢が有り、主人を勞せざるなり。

【評論】此の篇、口に隨つて出で、修飾する所無し、主人を嘲笑せしにはあらず、單に自分の胸襟を開きしもの。

夜送趙縱

楊炯

趙氏連城壁。由來天下傳。送君還舊府。明月滿前川。

趙氏連城の壁、由來天下に傳ふ、君が舊府に還るを送れば、明月前川に滿つ、

【句釋】夜送趙縱、送別の燕を開くは大底夜なり、出途が夜と限るものにあらず、趙が傳は未檢なり。趙氏、同姓なるが故出す、趙國の惠文王が楚の和氏が壁を得、秦の昭王、人をして書を遣らしめ、願くは十五城を以て請うて壁に易へん、趙王蘭相如をして壁を奉じ秦に入ら遣む、秦王大に

喜ぶ、相如、秦王の趙に城を償ふの意無きを視て、乃ち其の從者をして褐を衣其の壁を懷き、徑道より亡して壁を趙に歸さしむ、と「相如傳」に出づ。連城壁、壁が十五城に當る價值あるより、此の名起る。由來天下傳、盧諶の詩に趙氏和壁あり、天下傳へざるはなし、秦人來りて市はんと求む、厥の價徒らに空言、連城既に偽りて往く、荆玉亦眞に還る、傳は其の名を傳知するなり。送君還舊府、昔は其の名を聞く、今は其の實を見る、趙縱の名、天下に聞く久し、今君が舊府に還るを送るは恰かも壁が無事に趙へ歸りしと同様なりとの意。明月滿前川、府中の光輝を譬へて言へば、皓皓たる明月が前川に光滿るが如きなり、實景を以て其の人を稱讚す。

易水送別

駱賓王

此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已沒。今日水猶寒。

此地に燕丹に別れ、壯士髮冠を衝く、昔時人已に沒し、今日水猶ほ寒し、

【句釋】易水は直隸省易州に出づ、東流して滹沱河と合し海に入る。送別は假りに設けたる題、必ず其の人あるにあらず。此地は二字で「ココニ」と訓む。別燕丹、「史記刺客傳」に、燕の太子丹、